

儿々古町

平成 9 年度年報

1998

北巨摩市町村文化財担当者会

八ヶ岳考古

(平成 9 年度年報)

北巨摩市町村文化財担当者会

例　　言

- 1 本書は平成9（1997）年度の北巨摩市町村文化財担当者会の事業をまとめたものである。
- 2 本書の試筆は、「組織と活動」を事務局が行い、Iの「研究活動報告」は文頭に文責を記し、IIの「発掘調査速報」については各調査担当者が行っている。
- 3 本書の編集は、小宮山隆（長坂町教育委員会）が行った。
- 4 本会の活動並びに本書の刊行において、山梨県教育委員会学術文化財課・北巨摩教育事務所・北巨摩市町村文化財審議会連絡協議会・都内各市町村役場並びに教育委員会の皆様にご協力を頂いた。記して感謝いたします。

目　　次

例言・目次

北巨摩郡周辺地形図

組織と活動	1
-------	---

I 研究活動報告

X字状把手付大型深鉢形土器の展開—八ヶ岳南麓を中心として—（伊藤公明）	9
北巨摩地域の石器について—その大きさと抉の時期的変遷—（村松佳幸）	27
垂崎市三宮地遺跡出土の編文時代晚期の土器について（間間俊明）	39

II 発掘調査速報

1. 坂井遺跡（韮崎市）	51
2. 三宮地遺跡（垂崎市）	53
3. 石之坪遺跡（垂崎市）	55
4. 東向・長坂遺跡（須玉町）	58
5. 堀下西遺跡（須玉町）	59
6. 桑森遺跡（明野村）	60
7. 宮の前遺跡（高根町）	62
8. 宮久保遺跡（長坂町）	65
9. 龍角西遺跡（長坂町）	67
10. 甲ツ原遺跡第12地点（大泉村）	69
11. 島原平造跡群（上小川遺跡ほか）（白州町）	74
12. 上原遺跡（武川村）	75
13. 真原八遺跡（武川村）	76
平成9年度発掘調査一覧	77

III 新規指定文化財

1. 蔵原の経筒（高根町）	81
2. 今川義元朱印過書（高根町）	82
3. 坂本清三郎宛書簡（高根町）	83
4. 塔之越経筒 付 銭貨（双葉町）	84
北巨摩市町村刊行の埋蔵文化財発掘調査報告書一覧	86



北區摩羅邊地形圖 (1/200,000)

(地図中の数字は、発掘調査連報の遺跡番号と一致する)

組織と活動

組織概要

北巨摩市町村文化財担当者会（以下、北文担と略す）は、平成7年4月より北巨摩郡内9町村と韭崎市の文化財担当者を会員として組織され、文化財保護に関する啓蒙普及活動、文化財保護に関する調査研究、文化財担当者の資質向上のための研修、郡内文化財保護行政の概要を報知するための年報発行を、活動の主眼としている。さらに、山梨県教育庁学術文化財課長、北巨摩教育事務所長、北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長を参与に迎え、その活動に指導、助言いただいている。会運営は各自治体の負担金収入を元で、年報発行のための収入と支出の枠は、負担金、事務局費、事業費とは別に設けている（文末、会計参照）。

そうした活動は、月1回の定例会により、企画、実施されている。定例会は特に定めはないが、郡内自治体の協力を得て施設を拝借し、開催している。

平成9年度北文担役員

平成9年度における北文担の役員は次のとおりである。

会長 山路恭之助（須玉町）

副会長 雨宮正樹（高根町）

参与 学術文化財課長 小池光夫

北巨摩教育事務所長 中村勝一

北巨摩市町村文化財審議会委員連絡協議会長

事務局員 杉本 光（白州町）

高須秀樹（双葉町）

監事 山下孝司（韭崎市）

以上の役員のほか、研究活動・年報編集のため、次のとおり委員が選任された。

研究活動委員 竹田寅人（武川村）

年報編集委員 小宮山隆（長坂町）

平成9年度の活動

平成9年度においては、研修会3回と県外研修を実施し、遺跡の見学会を韭崎市石之坪遺跡で主催した。また調査研究活動として、月例会に毎回2ないし3名が中間報告を行い、年報において発表した。

4月24日 須玉町コミュニティセンター 定期総会。事業計画、会計、役員、会則について協議。研究活動中間報告（佐野、小宮山、閑間）。

5月28日 韭崎市市民会館 5月定例会。県北上地改良事務所と調査計画について協議する。研究活動中間報告（竹田、村松、伊藤）。

6月18日 双葉町町民会館 6月定例会。研修会「治水施設と発掘調査」講師 畑大介氏。研究活動中間報告（雨宮、杉本）。

- 7月16日 白州町中央公民館 7月定例会。遺跡見学会について検討。研究活動中間報告（山下・高須）。
- 8月21日 人泉村総合会館 8月定例会。広域的発掘調査組織について検討（長野県木曾郡町村会の視察報告）。研究活動中間報告（佐野・小宮山）。
- 9月17日 高根町役場 9月定例会。遺跡見学会・研修会について検討。研究活動中間報告（間間・村松）。
- 10月18日 莩崎市石之坪遺跡の見学会を主催。
- 10月22日 小瀬沢町福祉活動 10月定例会。研修会「打製石斧を作る」講師 宮里 学氏。研究活動中間報告（竹田・伊藤）。
- 11月19日 明野村中央公民館 11月定例会。咲北土地改良事務所と調査計画について協議。研究活動中間報告（雨宮・杉本）。
- 12月9日 明野村中央公民館 新潟県新井原南生産學習連絡会から広域の文化財保護について視察。
- 12月17日 長野農村開拓報告センター 12月定例会。研修会・県外研修について検討。研究活動中間報告（山下・山路）。
- 1月21日 武川村教育福祉センター 1月定例会。研修会「中世の陶磁器について」講師 志村憲一・佐々木 潤氏。
- 2月18日 白州町中央公民館 2月定例会。研究活動、年報編集について検討。研究活動中間報告（高須）。
- 2月25日 長野農村開拓報告センター 臨時会議。民間開発にともなう発掘調査担当職員人件費の原因者負担問題について協議。
- 3月4日 愛知県陶磁資料館他、陶磁器に関して県外研修。
- 3月23日 双葉町町民会館 3月定例会。平成10年度事業計画について検討。研究活動中間報告（佐藤・間間・村松）。

研究活動報告のタイトルは以下のとおりである。

- 4月24日
 佐野 隆「曾利式土器終末期の様相—八ヶ岳南麓・茅ヶ岳山麓における曾利V式の再検討—」
 小宮山隆「縄文時代の地域的個性を考える」
 間間俊明「縄文時代の焼失住居跡について（都内の中期の事例から）」
- 5月28日
 竹田真入「北巨摩郡における縄文中期初頭土器群について」
 村松佳幸「縄文時代前期から後期における生產用具組成について：中部・関東地方を中心」
 伊藤公明「X字状把手付大型深鉢形土器の展開」
- 6月18日
 雨宮正樹「東久保遺跡出土の墨書き土器について」
 杉本 充「円形土坑について—遺物の伴わない造構の覆土調査—」
- 7月16日
 山下孝司「平安時代における八ヶ岳南麓の開発を考える」
 高須秀樹「釜無川の治水とかすみ堤」
- 8月21日

佐野 隆「塙川流域の生物總生産量の推計について（中間報告その1）」

小宮山隆「遺跡立地・分布の分析1（Thiessen polygons）」

9月17日

閑間俊明「東八代郡中道町上野原遺跡第7B号住居跡覆土内出土の土器について」

村松佳幸「北巨摩出土の石鎌について—住居跡出土の無茎石鎌を中心に—」

10月22日

竹田眞人「五領ヶ台式期の複数の埋甕がをもつ住居跡について」

伊藤公明「八ヶ岳南麓における縄文前～中期を中心とした石製装身具の埋納について」

11月19日

兩宮正樹「土坑墓について」

杉本 充「平安時代の豊穴住居址内貯藏穴について」

12月17日

山下孝司「白山城及び周辺の城館跡について」

山路恭之助「のろし台について」

2月18日

高須秀樹「水制について」

3月23日

佐藤勝広「富藏山（とくらさん）と刻む碑について」

閑間俊明「山梨県内の勝坂前半期の土器群について（曾根丘陵付近と八ヶ岳南麓付近との比較から）」

村松佳幸「北巨摩出土の石鎌について②」



「打製石斧を作る」研修会



韮崎市石之坪遺跡見学会

平成9年度北巨摩市町村文化財担当者会会計決算報告

単位：円

収入の部

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
前年度繰越金	35,631	35,631	0	
市町村負担金	100,000	100,000	0	10市町村×10,000円
年報発行特別予算	500,000	500,000	0	10市町村×500,000円
その他収入	100	264	164	預金利子
合 計	635,731	635,895	164	

支出の部

項目	予算額	決算額	比較増減	備考
事務局費	32,320	64,820	32,500	
通信費	12,320	12,320	0	切手代
事務費	20,000	52,500	32,500	閲版台紙
事業費	82,000	53,800	△28,200	
月例会費	2,000	0	△2,000	
見学会費	40,000	0	△40,000	
講師謝礼	40,000	45,000	5,000	研修会講師謝礼10,000円×4人 年報題字謝礼5,000円
研修会費	0	8,800	8,800	県外研修時資料館見学費 (300円+500円)×11人
年報印刷製本費	500,000	500,000	0	70部×10市町村
予備費	21,411	4,000	△17,411	視察時の昼食代
合 計	635,731	622,620	△13,111	

収入決算額635,895円－支出決算額622,620円=13,275円（次年度繰り越し）

北巨摩市町村文化財担当者会会則

- 第1条 本会は、北巨摩市町村文化財担当者会と称し、事務局を会長の定めるところにおく。
- 第2条 本会は、各市町村における文化財保護・研究・活用の推進のために、必要な研修を行うことと同時に文化財担当者相互の親睦を図り、北巨摩地区文化財行政の進展に資することをもって目的とする。
- 第3条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
- (1)文化財調査成果を地域社会に還元するための各種行事の企画・運営。
 - (2)各市町村の文化財を素材とした月例の研究会の開催。
 - (3)先進地との交流および視察。
 - (4)各市町村単位に行う事業の相互援助。
 - (5)関係機関との文化財行政についての研究協議。
 - (6)関係機関との文化財調査についての研究協議。
- 第4条 本会は、各市町村教育委員会に勤務する文化財担当者および調査員をもって組織する。
- 第5条 本会に次の役員をおく。
- 会長1名、副会長1名、事務局員2名、監事2名、参与3名
- 第6条 役員の選出は次のようにする。
- (1)会長・副会長は、会員のなかから会員の互選とする。
 - (2)事務局員は会長が委嘱する。
 - (3)監事は役員以外の会員のなかから1名、北巨摩教育事務所から1名を選出する。
 - (4)参与は、山梨県教育庁学術文化財課長、北巨摩教育事務所長および北巨摩文化財審議会委員連絡協議会長をもって構成する。
- 第7条 役員の任期は1年とする。ただし、事務局員は2年とする。役員の選任にあたってはこれを妨げない。
- 第8条 会長は、会を統括するとともに外部に対して会を代表する。
- 第9条 本会の経費は、各市町村負担金およびその他の収入をもってあてる。各年度の市町村負担金は事業計画に準じて前年度に会員協議のうえ取り決める。
- 第10条 会計は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。
- 第11条 会計の処理については、年度末および必要に応じて会員に報告する。

付則

この会則は、平成7年4月1日から実施する。

I 研究活動報告

X字状把手付大型深鉢形土器の展開 ——八ヶ岳南麓を中心として——

伊藤 公明

はじめに

八ヶ岳南麓で現在までに縄文時代で最も調査事例が多いのは中期後業の曾利式期の集落跡である。このことからだけでもこの地域の当時の社会がその前後の時期と比べて卓越して繁栄、あるいは成熟した時期であったことが端的に窺い知ることができよう。この様な中で祭祀遺跡をはじめとした甲府盆地域、あるいは曾利遺跡をはじめとした八ヶ岳西南麓の土器群と八ヶ岳南麓の土器群とを比較した時、明確な地域性こそ指摘できないものの、穿掘気の異なったもの、異質なもののが存在が注意されはじめた。ここで扱うX字状把手付大型深鉢形土器は地域性を探る上で良好な指標となり得るもので、八ヶ岳南麓を中心として変遷を追いかながら、その地域性に焦点を当てていきたい。

X字状把手付大型深鉢形土器（以下あまりにも器種名が長いためX大深鉢と略すことを容赦願いたい。）は曾利式を代表する器種である。この器種は曾利式土器の成立からその終末まで変遷が追えるものとして特筆される。法量的に極めて大きく、貯蔵用の機能が考えられる。しかし、煮沸痕の残るもののがほとんどであるという点からは、当時の一住居に生活した人数を正確には割り出せないものの、一住居構成員を越えた特殊な儀礼・祭祀の際に、大勢で煮炊きに使用し、共に豪華のものであろうか、特殊な機能・性格を想定させる（註1）。この様な特殊な属性の他、この器種はもう一方で普遍性という属性もある。住居跡からの完形資料の出土数は決して多くはないものの、把手の一片、大型破片の出土等決して特殊な出土状況を示す器種ではなく、普遍的な器種であるという点は注意を払わねばならない。そして、何よりも本論の着想の源点ともなった屋内外の埋廻に使用されるということから（註2）、集団の出自を明らかとすることが可能なのではないか（註3）。即ち、器形的には極めて規制の強い器種であるものの、その文様構成を検討することにより地域性の抽出が可能と考えられるのである。また、一方で完形個体の少なさから、他の器種に比べて製作個体数自体が少なかったことが予測され、その形式学的変化も緩やかなものであったことが予測される。これはともすれば一個の出土資料により変遷観が見直される他の器種とは異なり、大きな変遷が把握し易いという利点もある。

以上の性格を踏まえ、八ヶ岳南麓のX大深鉢の変遷を明らかにすると共に、他地域との比較を通して八ヶ岳南麓の縄文中期後業の社会の一端を明らかにしていきたい。

研究略史

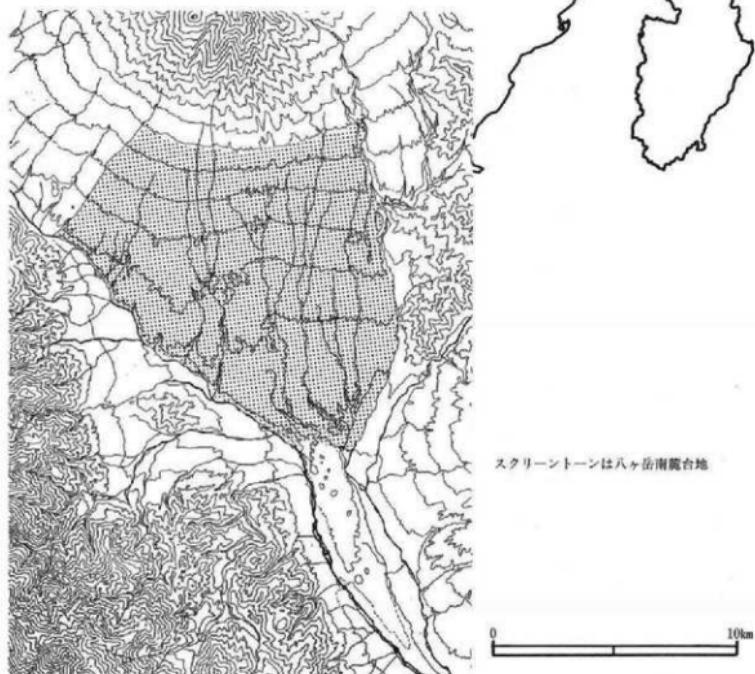
X大深鉢は、その特徴的なX字状の把手と極めて大きな法量とを有しながら曾利式土器研究の中で取り上げられることはほとんどなかった。それは出土個体数が少ないとから編年研究中心の近年の曾利式土器研究にあっては副次的なものとして扱われることが多かったためである。

この様な中で、まず、この器種の編年的位置付けを試みたものに米田明訓氏の論考がある（米田1978）。これは発掘資料の少なかった段階で曾利式土器の大系だった編年作業に先駆けた初期的論考であり、その中でこの器種の編年が試みられている。しかし、資料的な少なさ故であろうか、条線地文大型深鉢形土器（註4）と、このX大深鉢との混亂が見られ、その後もその影響下で編年が組まれていくことになる。

また、小林公明氏はこの器種に着目し、文様要素毎の系譜、意味付けについて論じると共に、その内在す

る神話的世界について論じている（小林 1988）。ここに論じられる神話の世界については自分が判断する根拠を持ち合わせていないので評価は避けたい（註5）が、曾利式土器終末まで一系的に存在するこの器種の性格の強さを指摘し、「まさに曾利式土器文化の背骨である」という評価は卓見である。

また、從来曾利式土器の地域性については明確な地域的型式差が少ないとから論じたものはほとんど無く、遺跡単位の変遷や、同一地域の土器を集成し、変遷表を作成しただけに止まっており、便宜的に“○○遺跡”“○○地域”的年表というものが提出されているに過ぎない（註6）。

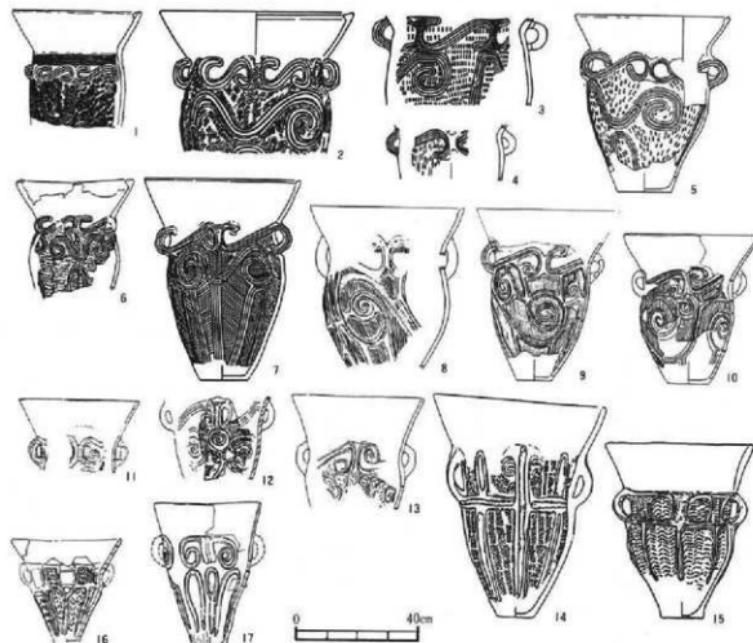


第1図 八ヶ岳南麓台地位置図

この様な中、土器の型式学的研究から地域性を指摘した数少ないものの中に櫛原功一氏の論考がある（櫛原1993）。氏は曾利I式に見られる溝巻文、W字状文を曾利I式の古い段階のものと位置付け、分布を明らかにする中で八ヶ岳山麓特有の地域性を有した文様要素として捉えている。

また櫛原功一氏等は土器胎土レベルで小地域性を明らかにしようと試みている（櫛原他1989）。曾利V式に特徴的なハの字状文地文の土器のみを選択して時間差を極力小さくするよう配慮しながら、北巨摩郡下の各遺跡の土器胎土分析を試みた。この結果、塩川水系と釜無川水系、その間に位置する八ヶ岳南麓台地とのその特徴的な胎土組成から分類されることを明らかにすると共に、各々の搬入関係を示した。これは、上記三つの地域でそれぞれに土器を製作し、おそらく曾利V式に限らずその地域内で変遷するであろうことを予測させる極めて大きな成果であったと考えられる。換言すれば土器そのものから導き出される最も小さい地域単位が上記三地域と言えるのである。しかし、その後の研究がこの論文を補強（例えば八ヶ岳西南麓との比較、その他の時期の動向の確認等）、あるいは土器形式上の地域性の抽出に進まなかったのは惜しまれるところである。

以上の他にも曾利式土器については多数の論考が主に土器編年論を中心に提出されているが、ここでは紙面の都合もあり割愛させていただく。



1 天神遺跡 2~4、7 須無遺跡 5 柳坪遺跡 6 甲ヶ原遺跡 8 中原遺跡 9、10、17 方城第1遺跡
11 杜口遺跡 12、16 次郎橋遺跡 13 大和田遺跡 14、15 川又南遺跡

第2図 八ヶ岳南麓出土のX大深鉢 ($S = 1/16$ 但し7、14~16は縮尺不同)

出土資料の検討

前記梅原氏等の論考は、先にも述べたが北口摩郡下での小地域性の存在を予測させるには十分な成果を上げたと言える。これを踏まえ、ここでは八ヶ岳南麓（大泉村、高根町、長坂町、小瀬沢町、須飞町の一部）の資料を中心に分析を進め、地域差の進入を極力少なくするよう努める。そして、資料の欠落は周辺地域の資料を検討しながら援用していくこととする。

第2図に当該地域の出土資料を集成した。既発表の器形・文様帶のある程度明らかなもののみを取り上げたので資料数は決して多くはない（图7）。

1は天神遺跡B区7号住居跡の埋甕で、口縁部の一部と胴下半を打ち欠かれている。頸部に4条の隆帯を貼付け頸部文様帶を構成する。把手は7単位見られる。体部文様帶は把手直下の点文間を3条の隆帯でU字状に結んでいる。口縁部は頸部から直線的に外上方に開き、口唇部内面には断面三角形の粘土紐貼付けが見られる。体部は胸の張らない長胴形となる。地文は結節繩文の充填である。

2は頭無遺跡10号住居跡の埋甕を使用されていたもので、やはり底下半を打ち欠かれている。頸部文様は懸垂文の一端をそのまま下部まで垂下し、もう一端は溝巻状とする。この溝巻文と懸垂部下部に逆U字状文が付加される。これは井戸尻式以降見られる対向U字文からの流れを想起させる。頸部文様帶は既に消失し口縁部は頸部から緩やかに内弯しながら外上方に開き、口唇部内面に断面三角形の粘土紐を付加する。胴上部に張りを持つ。把手は8単位で、地文は結節繩文の充填である。法量的には極めて大きく、口径は60cm以上を測る。

3は同じく頭無遺跡10号住居後覆上中からの出土である。胴部の大型破片で、把手は6単位と考えられる。地文が点点文で、体部文様は懸垂文の一端から近びる溝巻文の下部の逆U字状の貼付けは消失しているもののほぼ2と同様の構成となる。

5は柳坪遺跡2区11号住居跡覆土中からの出土である。把手は5単位で、体部文様は3と共に通する。口縁部は直線的に外上方に開き、口唇部内面には断面三角形の粘土紐が貼り付けられている。体部は上半に張りを持つ。

6はこの器種としてはやや小型の資料で、甲ヶ原遺跡第6地点2号住居跡覆土中からの出土である。把手は6単位で、地文は烈立文刺突である。文様モチーフは懸垂文の凹部を内側に巻き込んだ溝巻文が見られ、懸垂文下部に逆U字文を付加する。溝巻文下部や懸垂文中、逆U字文中に蛇行隆帯が貼り付けられる。口唇部内面には断面三角形の粘土紐の貼り付けが見られ、体部は中位近くに張りを持つ。

7は頭無遺跡10号住居跡覆土中からの出土である。当初口縁～胴上半までの全体として報告されたものであるが、1986年の柳坪遺跡撤回時に再整理され、ほぼ完形の個体として報告されている（图8）。把手は5単位で、地文は条線が充填されている。文様モチーフは6に近いが、抽出手法が隆帯から半截竹管の内側を使用して半隆帯手法に変化している。口唇部内面の粘土紐貼り付けは消失して、僅かに口唇内面を輪積みにより把厚させる等入きく型式学的に変化していると言える。

8は中原遺跡B区1号土坑出土である。屋外埋甕とは判断できないものの、いずれ特異な埋納をされた上器であろう。遺存状態が悪く、判然としないが4ないし5単位の把手が付き、胴部には大きく展開する溝巻繩文が見られる。以上の資料とは異なり、把手と体部文様モチーフが一体化し、ダイナミックに器面全面に展開している。溝巻文下部に見られる足部に延びる隆帯は5、6に見られる懸垂文下部の逆U字状文が溝巻文と一体化したものであろう。モチーフの抽出手法は二本の隆帯を貼付け、その両側及び隆帯間にユビナデにより沈線を施している。地文は条線の充填である。

9、10は共に方城第1遺跡2号住居跡出土中の出土である。把手は共に4単位で、8と同様把手と一体となった溝巻絞ぎ文が大きく2単位展開している。地文も条線地文であり、その施文順位、抽出手法いずれも8と共通するが、隆帯が1本化している点が大きく異なる。

13は大和田遺跡7号住居跡炉跡及び柱穴中の出土の破片が接合した口縁～胴上半の大型破片である。その特異な出土状況から廐屋墓であった可能性も考慮される。把手は4単位で、この段階から構造化してはいるものの、未だに体部文様モチーフは把手と一体となった隆帯による溝巻絞ぎ文となるものであるが、隆帯両側の沈線は消失している。口縁部は緩く外反しながら外上方へ立上る。地文は隆帯貼付け後に充填している。口唇部の肥厚も消失している。

14、15は共に川又南遺跡出土の戸外單独揮毫である。体部文様は共に把手部と体部を面する隆帯下に隆帯を無くさせただけで、漫巻文を消失する。地文は14が純文で、15は櫛齒状工具の刺突によるハの字状文の充填である。14は口縁部が緩やかに内弯しながら立上るのに対し、15は緩やかに外反している。この段階から把手部は独立した文様帶として把握されるようになる。

16は火郎橋遺跡の性格不明遺構⁽¹⁶⁾出土のものである。底部から直線的に把手下部まで立上り、屈曲して把手上部から開いて口縁部に至る。地文はヘラ切りによるハの字状文の充填である。

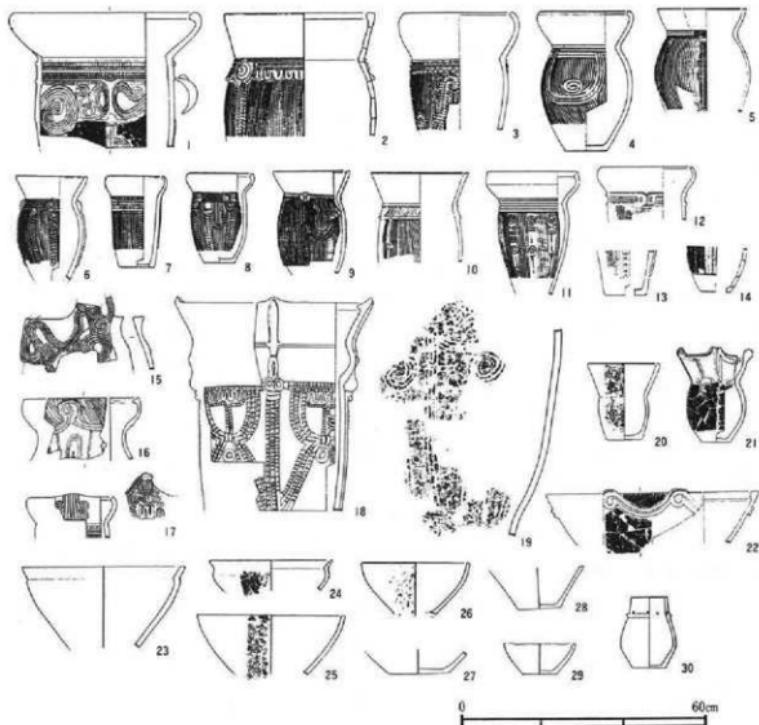
17は方城第1遺跡1号配石に伴って出土した戸外埋甕である。櫛状把手が4単位見られ、これをを利用して隆帯貼付けにより人面状にモチーフを展開している。把手部で若干屈曲するものの底部からほとんど直線的に口縁部に至っている。地文は消失している。この器種の最後の形態を示すもの一つと考えられる。

出土資料の編年的位置付け

以上で出土資料の紹介と共に若干の変遷観について述べてきた。以下では共伴遺物等から編年的位置付けを試みる。

第3図に当州町上小用遺跡（教民石民部館跡）1号トレンチ出土の遺物を提示した。対象地域外ではあるが、南畿と隣接する地域の資料で、時間的位置付けを確認するために注目した。この資料は館跡確認のためのトレンチがちょうど住居跡の中央に入った形で、大きな時間差も見られず1軒の住居跡の一括資料としてはほぼ問題のない資料である。この中で注意を要するのが多數の条線地文の十器群に混じてX大深鉢が1点出土していることである。これらの条線地文深鉢は曾利I式の古い段階に位置付けられるもので、八ヶ岳西南麓～南麓で特徴的に見られる口縁部溝巻文、W字状文の存在⁽¹⁷⁾からも時間的位置付けは揃らがないであろう。さて、問題のX大深鉢であるが、頸部に隆帯貼付けによる頸部文様帶を有し、口縁部は大きく内弯する受け口状を呈している。把手は4単位見られ、各が独立して展開している。この把手に沿って溝巻文、W字状文が見られ、条線地文の深鉢と時間差が無いことは明らかである。また、地文は結節を伴わない単節RLの充填で、文様モチーフの抽出手法は幅広隆帯の分割による。モチーフは御好意により実見させていただいたが、把手直下から「し」の字状に隆帯を垂下し、その途中から窪く半円弧を描き出している。実測図によると腹部は直線的に表現されているものの実見した感じでは腰中位に若干張りを持つようである。

第2図-1の天神遺跡例と比べた時、頸部文様帶を有することで共通するものの口縁部が受け口状であること、地文に結節を伴わない繩文を採用している等明らかに古い要素である。八ヶ岳南麓では資料が少々あるもののここに型式学的変化の画期を認めX大深鉢における上小用遺跡段階を1期と認めた。文様モチーフについては地域差も考慮されることからここでは判断は避けたが、1期の時間としての存在を明らかとし、今後の八ヶ岳南麓での資料の増加を待つこととした。



第3図 上小用遺跡第1トレンチ出土土器 ($S = 1/12$)

次に第2図-1、2の時間差についてであるが、頸部文様帯を持つものが古いことは前後型式の比較から明らかである。これらは地文の結節縄文から共に曾利II式の古い段階として位置付けられていた (iii)。しかし、曾利I式の古い段階から続いた頸部文様帯の消失は大きな型式学的変化と考えられる。ここではこの頸部文様帯の消失を3期のはじまりと認める (iii)。

次に大きな型式学的変化を口唇部内面の粘土紐貼付の消失に置く。即ち3期を頸部文様帯消失以降～口唇部内面粘土紐貼付け消失まで、従来の編年観からは大概曾利II式の範疇とする。これらは地文の変化により更に細分が可能である。

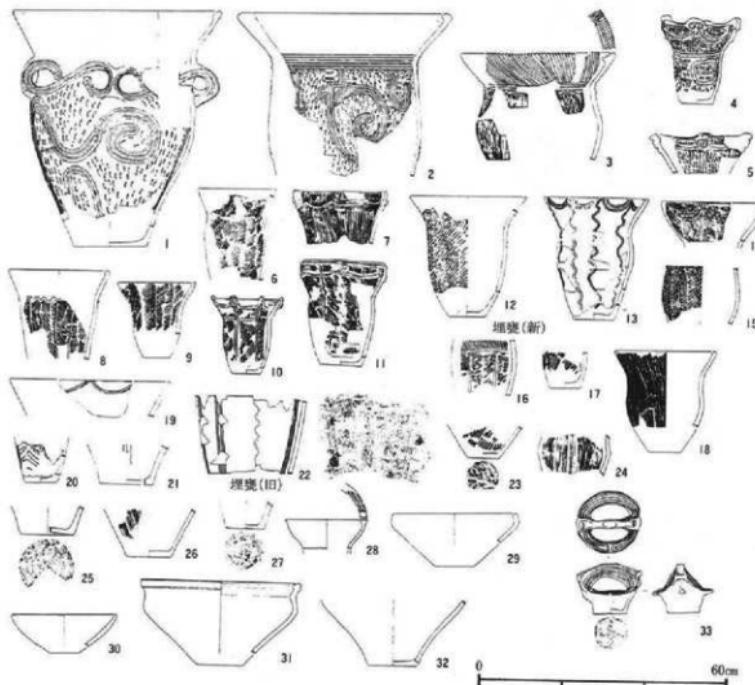
この段階では結節縄文を地文に持つものと、烈点文のものが見られるが、米田氏も指摘しているとおりこれらは明らかに時間差を持って存在している (米田1986)。ここでは結節縄文を地文とするものを3-1期、烈点文のものを3-2期と細分する (iii)。結節縄文を地文とする3-1期は資料的に少ないが、3-2期になると資料が増加する。3-1期ではモチーフの明らかなものは第2図-2の1点のみではあるが、この段階に成立した懸垂文の一端をそのまま垂下し、一方を渦巻状とするものは3-2期まで継続している。文様モチーフの抽出手法については両時期共にはほとんどが幅広隆帯の分割によるが、寺所第2遺跡 (iii) の3-2

期の資料には沈線により描出されているものが出土している。また、第4図に柳坪遺跡2区11号住居跡一括資料を提示した。覆土中出土のものなので若干の時間差はあるものの時間的位置付けが確認できることと思う。

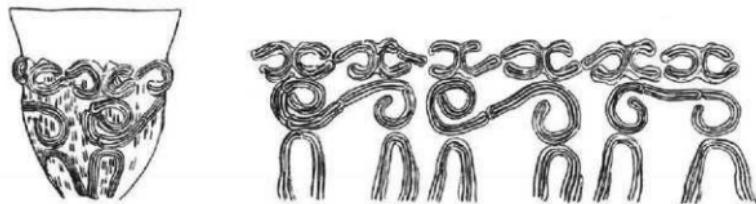
3-2期のモチーフを見ていくと新たに懸垂文の両端の下部を内側に巻き込んだもの(第2図-6)、更に長野県富士見町徳久利遺跡では渦巻縞文もこの段階に成立している(第5図)。残念ながら現状では八ヶ岳南麓では検出されていないものの、今後検出される可能性は大きいものと考えられる。

次に4期として把手が再び独立して頸部文様帯を形成する以前のもの、從米の編年観では曾利III式~V式の古い段階に相当するものとする(第2図-7~13)。これらの中にも時間差が指摘でき、以下細分をしていく。

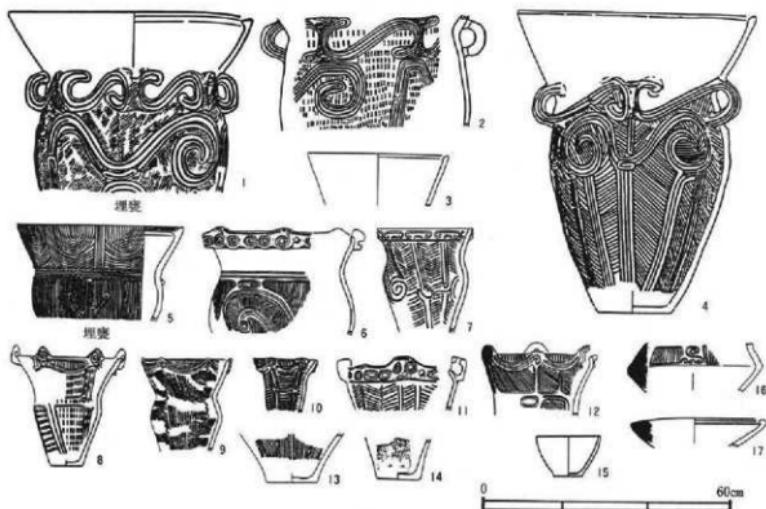
4-1期として第2図-7の頭無例の段階とする。第6図に頭無遺跡10号住居跡の一括資料を提示した。烈点文地文のものも若干含むものの、前時期からの残存形態とするよりは混入と考えたい。現在までに半陰帯で文様モチーフを描出したX大深鉢はこの事例しか知られていない。今後の資料の増加を持ちたい。モチーフとしては第2図-6の甲ッ原遺跡例から系統的に変遷したものと言えよう。この段階の特徴を3-2期からの文様モチーフの繼承と地文烈点文の消失、条線地文への変換として捉えておく(註15)。



第4図 柳坪遺跡2区11号住居跡出土土器 (S = 1/12)



第5図 徳久利遺跡出土×大深鉢（『純文土器大観3』より筆者スケッチ、縮尺不明）

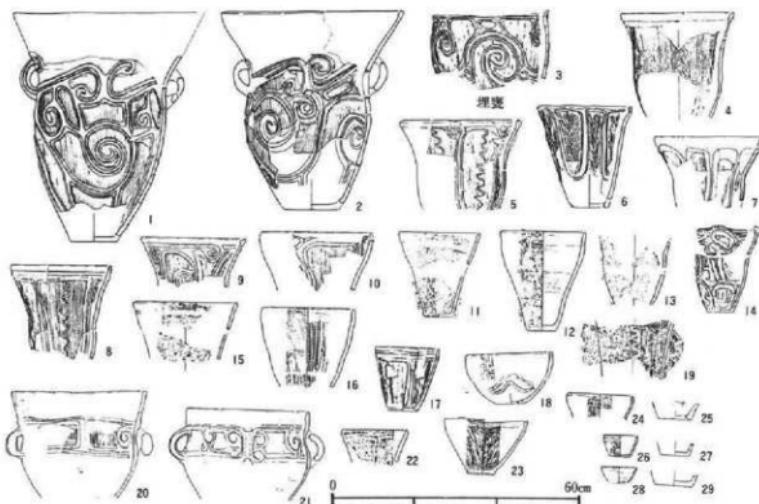


第6図 須無遺跡10号住居跡出土土器（S = 1/12 但し4は縮尺不明）

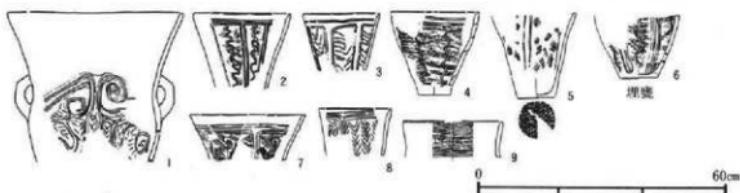
4-2期になると文様展開の上で大きく変化し、画期を形成する。即ち器面全面に展開する大型の渦巻縞ぎ文の盛行である。渦巻縞ぎ文自体の当該地域での成立を3-2期に置くことを前述したが、必ずしも主体を占める文様モチーフではなかったのだが、この段階以降は極く少数の例外はあるものの主体となるモチーフである。この渦巻縞ぎ文の盛行を型式学的変化的画期と見ることも可能はあるが、器形そのもの、あるいは土器製作技法の変化を上位概念として変遷を追っていることからあえて4-2期としてここでは捉えていく。この段階の良好な資料は八ヶ岳南麓では現在のところ少ない。

更に文様モチーフの描出手法が二本一対の隆帶貼付け、隆帶間及び両側のユビナデによる沈線が、一本の隆帶とその両側のユビナデによる沈線への変化に小画期を認め、隆帶の一本化から4-3期と捉える。曾利IV式に該当する(第2図-9、10)。この変化は他の器種にも見られる変化で、他の器種と同調した型式学的変化と考えられる。この段階の良好な資料として方城第1遺跡2号住居跡出土資料を第7図に提示した。

また、4-4期として大和田遺跡7号住居跡段階を設定する。把手が鶴状化するが、把手間を隆帶で連続



第7図 方城第1遺跡2号住居址出土土器 ($S = 1/12$)



第8図 大和田遺跡7号住居址出土土器 ($S = 1/12$)

的に結び、文様モチーフの連続性を維持していることから4期の範疇で捉えることとした。胴部文様は隆帯両側の沈線が消失して粗雑な作りとなる。地文は他器種で普遍となるハの字文となり、従来の縦年観では曾利V式の古い段階と評価されるものである。第8図に大和田遺跡7号住居跡一括出土土器を提示した。

さて、次に5期として把手部の独立と再び頸部文様へと変化した段階と捉え、この器種の終末までとする。やはり細分が可能で、地文については密に施文されるものから粗らに施文されるものへ、プロポーション的には胴部の張りが残存するものから、底部から直線的に立上るものへと変化することから、前者を5-1期(第2図-14、15)、後者を5-2期(第2図-16、17)と捉える。この5-2期でX大深鉢は最終段階と考えられるが、この器種の消滅を曾利式土器型式の組成の崩壊と捉え、これ以降は曾利式の範囲中からは除外する立場を執りたい(註10)。

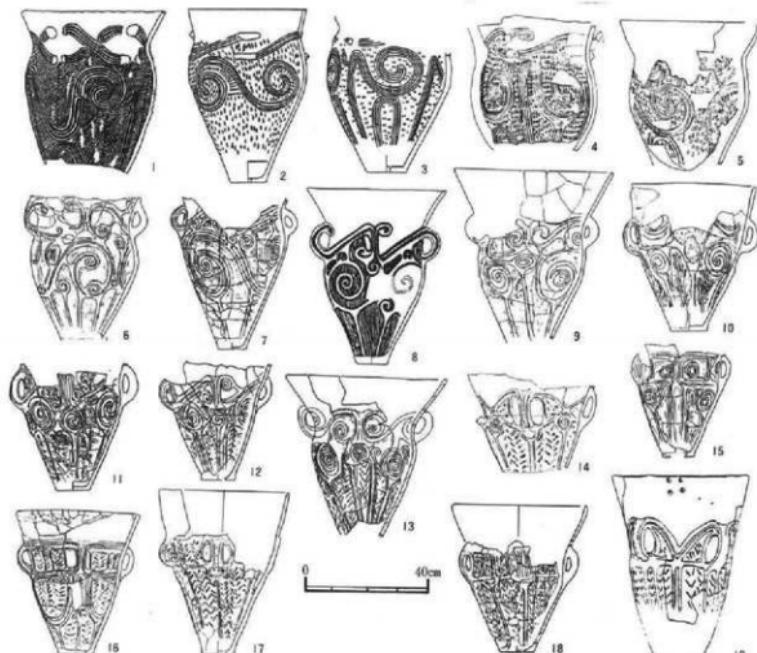
以上、八ヶ岳南麓のX大深鉢の型式学的変遷を難駁に見てきたが、このX大深鉢は八ヶ岳南麓において、多少の断絶、欠落が見られるものの、極めて連続的に型式変化が追えると言える。

隣接諸地域のX大深鉢の検討

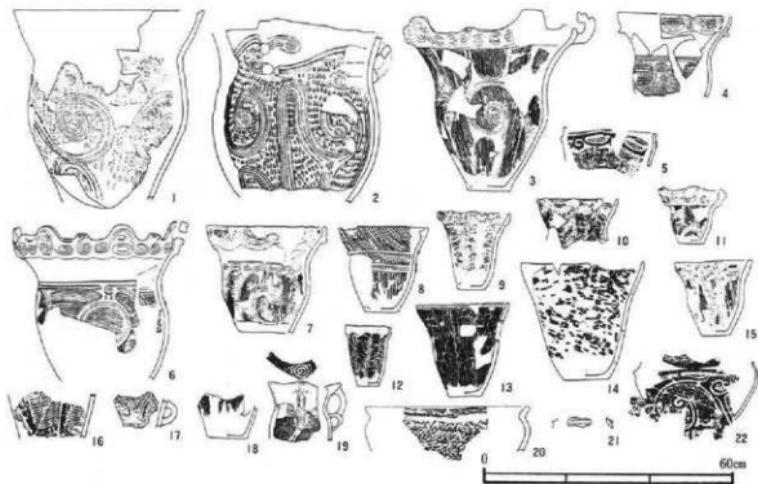
a. 南麓を除く北巨摩地域の様相

第9図に八ヶ岳南麓以外の北巨摩、韭崎市内のX大深鉢の出土資料を集成した。韭崎市内（特に後田遺跡C区2号配石）出土資料が大半を占め、他は資料的に少なく、先の地域（釜無川流域、塩川流域）毎の変遷、動向については探れる内容とはならないことをおことわりしておく。

ここで注目しておきたいのが、1、2、4の資料である。1は先の変遷觀で3-1期としたものと地文、文様モチーフ共に類似するのだが、胴部上半に張りを持ち、やや長胴ぎみのプロポーションとなる。このプロポーションは先の南麓の変遷觀では3-1期というよりも後続する4-1期の資料に近似するより新しい様相を呈している。口縁部を欠き判然とはしない部分が多いためここでは地文からは3-1期の特徴を備えるものの、これより新しい段階に属する可能性を指摘しておく。2についても徳久利遺跡例から満巻縫ぎ文の成立を3-2期に置いたものの、1同様の器形を呈し、これについても南麓の3-2期よりも後出する可能性を指摘しておきたい。4は宿尻遺跡6号住居跡出土であるが、その一括資料を第10図に提示した。この土器自体は地文は烈点文で、3-2期の特徴を有するが、文様モチーフを見ると後続する曾利III式の肥厚口縁深鉢のモチーフと同様に幅広縦帯を沈線により分割し、その一部に満巻文を施す等、より後出的な様相を呈する。既に触れた須無遺跡10号住居跡では古い段階の土器が混入していたが、この6号住居跡出土例



1. 8 収井遺跡 2. 3 飯米場遺跡 4. 5 宿尻遺跡 6. 7. 9-12. 14-18 後田遺跡 13. 19 屋敷添遺跡
第9図 北巨摩地域出土のX大深鉢 ($S = 1/16$)



第10図 宿居遺跡 6号住居址出土土器 (S = 1/12)

は新しい要素と古い要素が混在しているのが良好に観察される。

以上その他は南麓と比較して特に大きな変化は見受けられないものの、上記の資料からは南麓の資料との直接的な対比を躊躇させる内容と評価される。但し、文様モチーフの変遷等は南麓とほぼ同様に変遷していることから、時に南麓よりも新しい段階まで各属性レベルで残存するものの、南麓と同様な、あるいはその強い影響下で型式の変遷が追える地域として把握される。

b. 八ヶ岳西南麓の様相

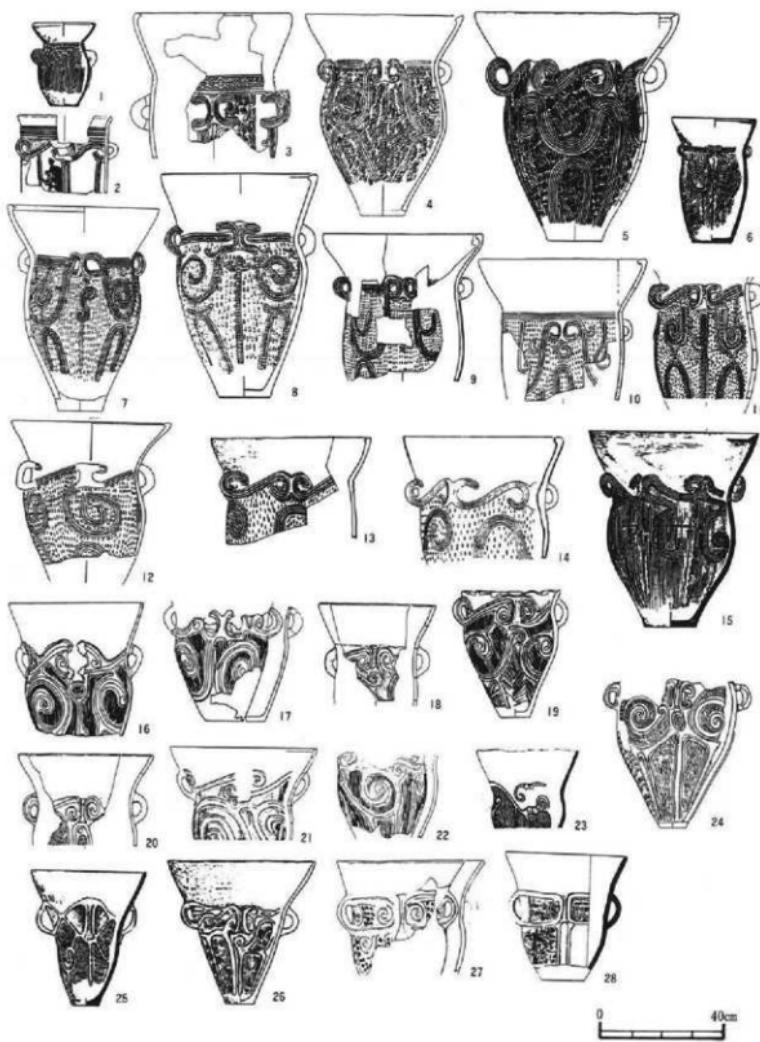
第11図に八ヶ岳西南麓の主な出土資料を集成した。現在の行政区割では諏訪郡富士見町から岡谷市の範囲を対象とした。この中に小地域差が存在する可能性もあるが、筆者自身の不勉強からこの地域を設定したことをおことわりしておく。

この地域は從来より南麓との地域差に着目されることなく、というよりはむしろ一体のものとして把握されてきた。しかし、内容的には差異があり、変遷を辿りながらその差異に触れていく。

1、6は法量的に小さく、X大深鉢の範囲には含めないで考えているが、参考資料として示した。1は曾利遺跡5号住居跡出土資料である。從来の編年觀ではやや受け口状を呈する口縁部、頸部文様帶の存在からX大深鉢の祖形として考えられていた形態であるが、法量的決定的な違いから改めてこれがX大深鉢の祖形とは成り得ないことが明らかである。小型の条線地文深鉢のX字状把手の付くものとして別の器種、形式として把握すべきものである。

2は頸部文様帶の存在、結節を伴わない縄文が地文であることから1期と同等の編年的位置に置ける資料である。3は地文は結節の伴わない縄文であるものの蛇行隆帯が加飾され、口縁部はやや内弯ぎみに外上方へ開く等、2に比べ新しい要素と言える。2期に位置付ける。

4～14を3期に置く。4は結節を伴わない縄文が地文であるものの頸部文様帶の欠落や口縁部の形態から3～1期と判断した。



1、6、13、26 曽利遺跡 2、3、7、9、19、24 標桟遺跡 4 向原遺跡 5、11、20 唐波官遺跡
8 中原遺跡 10 古上遺跡 12 与助尾根遺跡 14 本城遺跡 15 海戸遺跡 16 よせの台遺跡
17、23、27 花上寺遺跡 18、25 居平遺跡 21 茅野和田東遺跡 23 大畠遺跡 28 茅野和田西遺跡

第11図 八ヶ岳西南麓出土のX深鉢 (S = 1 / 16)

さて、この3期が南麓と比べると大きな差異が見られる。南麓と同様な文様モチーフ（懸垂状モチーフの一部をそのまま垂下し、もう一方を巻き込む等）を持つものが5、13、14の三個体だけで、土体となるのは把手を基点として両側に隆起を垂下させ、その両端を外巻きに渦巻状に巻き込むものである。換言すれば把手と一体となって、把手間を結ぶU字状、あるいは対向U字状のモチーフとなるものである。即ち、把手の連続性が薄く、把手間は直線的な脊部で結ばれる。11は把手間は連結されるものの、体部モチーフは上記と同様である。12は把手間は連結し、体部は把手を基点とした渦巻文を描出している。即ち西南麓のX大深鉢は把手と体部モチーフの一體化という際立った特色を持っている。これに対し南麓は把手と体部モチーフの独立性が指摘され、明らかに異なる様相が指摘される。

また、先に徳久利遺跡出土の3-2期の渦巻維ぎ文を示し、南麓から今後出土する可能性を指摘しておいたが、この渦巻維ぎ文は西南麓の特徴である把手と体部モチーフの一體となったものから派生したものとは考えられない。むしろ南麓の特徴である把手と体部モチーフの独立した文様展開の中にこそ、その派生の可能性を強く指摘しておきたい。同様に上小川遺跡例を示し南麓での1期の存在の可能性を示したが、把手を基点とした文様モチーフのあり方はむしろ西南麓的であり、南麓ではこの時期のものが存在しない（西南麓で出現した器種を遅れて移入した）か、存在するとすれば異なる文様モチーフのものとして存在した可能性を指摘しておく。

15は海戸遺跡出土であるが、一見して他のものとは明らかに系統が異なるものと判断される。条線を地文とし、把手から半円弧を描くように垂下する隆起等から後述する甲府盆地域から移入されたもの、あるいはそれを模倣したものと考えられる。時期的には3-1期に併行するものであろうか。

16-26を4期に併行するものと考える。前時期と大きく異なり、若干の相異はあるもののほぼ南麓と同様の変遷が追えるようになる。現在までに4-1期の良好な資料に恵まれていないものの4-2期には一転して資料が増加する。この4-2期の様相は南麓とは逆転しており、偶然の賜とは考えられない。何らかの社会の動きに起因するものと考えたい。4-3期では24、25が注目される。南麓で烈点文が再び地文に採用されるのは曾利V式になってからであり（他の地域ではこの器種には見られない）、地文の変化が南麓よりも先行して見られる。また、25は渦巻維ぎ文が崩れ、把手も網状化しており、型式変化が南麓よりも先行する。4-4期として26が対比されるが、やはり地文の構造文は南麓に先行して出現する。

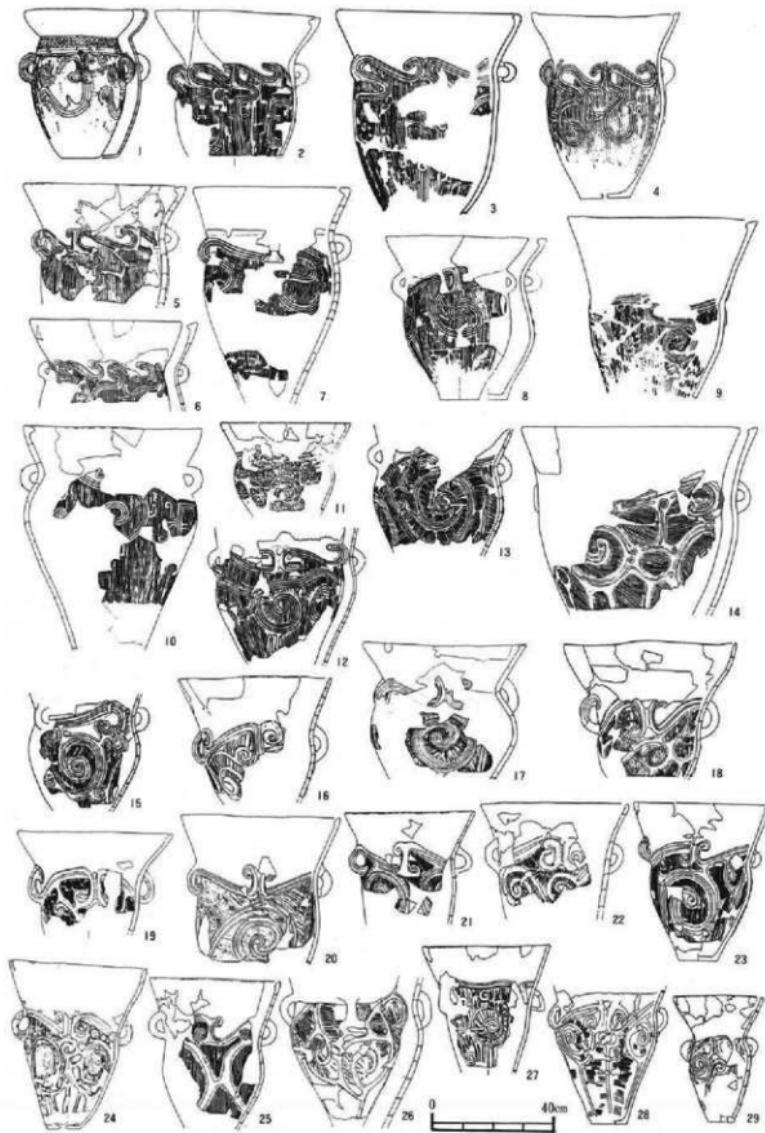
27、28は5期に対比されるが、器高に対し口径が大きくなり、深鉢というよりも鉢に近い形態となる。

以上のことから西南麓では南麓が先行してX大深鉢が出現した可能性があること、3期で特に顕著であった文様モチーフの南麓との相異が4-2期になると解消されて同様に変化していくことが明らかとなった。この3期から4期への転換は特に重要性を含み、文様モチーフを神話的世界の表現と見た時、南麓の神話的世界による西南麓の神話的世界の破壊、接合・奪取と見ることもできる。しかし、その終焉を迎えるころには再び独自色が強まっていく。

c. 甲府盆地の様相

第12図に新迦堂遺跡を中心とする甲府盆地東部の資料を集成した。

1の土器に注目したい。宮の前遺跡屋外單独埋蔵の資料で、同地域最古例のX大深鉢である。まず注目されるのが頭部文様帶を有し、地文が条線地文となっている。これは文様モチーフ描出後の充填である。この施文部位は南麓、西南麓のものと共通する。即ち、頸部文様帶、施文順位、隆起による文様モチーフ突出という点で広く南麓、西南麓と共通するものであるが、際立って異なるのが当初より条線を地文として選択しているという点である。また、文様モチーフについては把手を基点として隆起を垂下させ、把手と文様モチ



1 宮の前遺跡 2~8、10~29 駿遊堂遺跡 9 一の沢遺跡
第12図 甲府盆地出土の×大深鉢 (S = 1/16)

モチーフを一体化する点、文様モチーフの非連續性という点では隣接する南麓よりも西南麓との共通性が大きいと考えられる。

さて、2~10の十器であるが、頸部文様帶の欠落から大きく南麓の3期に併行させることができる資料である。この中で7は地文が縦文となるが、他は条縞地文である。把手は連續性が見られるが、体部文様モチーフは把手を基点というよりも把手と一体化しており、その一端から大きく蛇行する隆起が垂下している。これらの特徴から西南麓とも南麓とも異なる独立した地域性の抽出が可能となる。

8、9は西南麓の3~2期に特徴的に見られる文様モチーフを有し、地文は異なるもののこの段階に位置付けてはほぼ誤りはなかろう。

11は器形の明らかな粗点文地文のものとして数少ない資料である。この土器は地文、文様モチーフ、把手部の特徴から明らかに南麓から移入されたもの、あるいはその模倣されたものと考えられる。糸迦堂遺跡では多くのX大深鉢が検出されているもののこの地文を有するものは少なく、南麓との関係の稀薄性を示唆するものとして注目しておきたい。

13以降の資料については西南麓の様相と共通し、南麓の強い影響下にあるものと判断され、大きな社会変化があったものと想定したい。¹⁰ そして、やはりその終局についてはハの字次文地文が採用されず、把手が独立して再度頸部文様帶化しない等、西南麓同様、土器製作における規制が崩壊し、再び地城色が胎動する。

以上のように甲府盆地でも西南麓同様、当初地城色を持って成立したこの器種は、その後南麓と同一化し、強い齊一性を示しながら、その終末には西南麓同様地城色が再度台頭していく。

おわりに

冗長な論の展開となつたが、これまでのまとめをしていきたい。

X大深鉢の体部文様モチーフの横巻縫ぎ文の出現を八ヶ岳の3~2段階に置いた場合、この地域では出現期の様相が不明確なもの、極めてスムーズに型式変遷が追えることが確認できた。これは南麓がこの器種の主要な伝統を形成し、分布の中心となっていたことの証左となろう。

また、他の地域との比較から、特に南麓の横巻縫ぎ文の成立以前には各々に地城色があり、独自に変遷が見られた。これは西南麓タイプ、南麓タイプ、甲府盆地タイプとも称せるほど強い地城色であった。各の地城タイプについてみると、地文については西南麓と南麓に共通性が見られるものの、文様モチーフについては西南麓と甲府盆地に、より類縁性が認められる。文様モチーフを何らかの神話的世界と捉えた時、後者の関係により重要な意味があったと考えられる。しかし、これら地城タイプも4~2期以降には解消され、齊一性を示すようになった。これを南麓のイニシアチブの下での型式変遷の結果と捉え、南麓地城の特異性を指摘した。その後再び4~4期以降は、特に5期に至るとそれぞれ独自色が強まるが、これは○○タイプと表現できるほどのまとまりとはならなかった。

これら一道の動き（地城タイプ→解消・齊一性→崩壊・独自性・終焉）が何を意味するものか、何に起因するものか、現在のところ明らかではないが、今後これを明らかにする上で八ヶ岳南麓での成果が重要な位置を占めるのではないだろうか。

以上で論を閉じるのだが、自身が南麓をフィールドとしているため、南麓に重点を置き過ぎた觀がある。また、実際に土器を確認せずに論を進めたため、多くの誤認、誤解もあることと思われる。今後、冷静に再検討し、検証を進めたい。

当初、南麓のX大深鉢の変遷と編年的位置の確認を目的に論を起こしたが、計らずも地域性の抽出まで論を進めることができた。これは担当者会員諸氏はじめ、多くの方々の御指導、御助言の恩と深謝する次第である。

追記

最近、曾利式土器と加曾利式土器の編年対比を試みた論文に接し、その地域の設定のあまりの広範さに批判的でいた文章を書いた。また、その方は曾利式土器研究が“純粹曾利式の抽出”を目指し、特に加曾利式との関係について振り返らなくなつとも指摘している。筆者は地域研究の延長上にしかトータルな意味での曾利式土器文化が見えてこないものと考えている。徒らな編年対比はかえつて混乱を招きかねない。この拙論が地域研究の一助になればと願うのみである。

註

註1 土器の透水性を低くするために炭化物、動物性脂肪分等を煮沸して土器内面に被膜を作っていた可能性も考えられることを櫛原氏から御教示いただいたが、数回程度の被熱の痕跡とするよりは日常的な被熱の痕跡と考えられるものが多いように見受けられる。

註2 他の器種と比べて特にその比率が高いということではない。しかし、蘿崎市後田遺跡C区2号配石に伴って12個体の追跡が検出されているが、この内実に11個体がこの器種を用いている点はその特徴性を如実に物語っているよう。

註3 佐々木藤雄氏は一連の論考の中で父系制社会における通婚図を示すものとして異系統通婚について分析している。佐々木1981、1983、1997、1998

註4 条地文大深鉢形土器の内、みみずく把手の付くものがX大深鉢の祖形と捉えられることが多い。この器種は井戸尻式～曾利I式まで変遷が進むものであるが、後述する上小用遺跡例で明らかのように隣接する形式として相互の影響関係は認められるものの、X大深鉢とは明らかに異った器種として捉えられよう。

註5 神話的世界が土器文様の中に存在することを否定しているのではない。個人的にはその存在を積極的に認めたいのだが現状では神話内容の検討よりも文様系統の絆分とその編年的位置付けを明確にすることによって神話内容の検討に備えるべきと考える。いずれにしろ小林氏の言う「土器文様は福年のために存在するものと勘違いしている」という縄文土器研究の現状に対する批判は痛烈である。

註6 米田1986、小野1987、高根町教育委員会他1997 等

註7 平成6～8年度に山型県立文化財センターで調査した酒谷塙遺跡、平成元～9年度同センター調査の甲ヶ瀬遺跡、平成5、6年度高根町教育委員会調査の社口遺跡、平成7年度大泉村教育委員会調査の寺所第2遺跡等この地域を代表する大規模集落の成果が明らかにされれば、その資料は飛躍的に増加するものと期待される。

註8 米田明嗣氏の御教示による。

註9 報告による。高根町遺跡調査会1996。

註10 櫛原1993による。

註11 米田氏はその先後関係について触れながらも他の器種との文様要素の共通性、即ち示標とする結節縄文の存在から二者を同時期に位置付けている（米田1986）。

註12 2期の規定の問題を残すが、曾利I式の新しい段階の様相が明らかでないことから、上小用段階以降、頭部文様帯消失までとしておきたい。これは曾利II式の古い段階の更なる細分を念頭に置いていたものではなく、器種によ

る形態変化のタイミングのズレと考えたい。

- 註13 3-1期としたものの時間幅は小さい可能性が高いが、一器種の型式学的变化を追うという本論の目的からは細分の必要を認める。
- 註14 平成7年度大泉村教育委員会調査。未発表。
- 註15 資料数の集少性から型式設定に躊躇しないものではないが、沈縫（半隆帯となっているが）による文様モチーフ抽出手法の系統性、文様モチーフが胴上半を中心に展開する等、前後の時期との中間的様相を示すことから設定に躊躇切った。曾利式の古祖を示す段階と把握されようか。
- 註16 山形氏はこの段階以降になると曾利E式の影響を受けて文様が変化したり、曾利E式と共に文様が出現したり、同時期の土器を見ると曾利E式が凌駕するといったことから今後の尾段階、一の沢段階として曾利式土器の範疇から外して考えている（山形1996）。また、蛇足かもしれないが、氏の提唱する施文順序A（山形1989）は、この器種に限ってはその終末段階まで一貫して維持されている。その製作の強い規制を感じさせると共に、この段階までを曾利式土器と捉える根拠と考えている。
- 註17 ここでは南越のイニシアチブを想定したが、仮にそうでない場合でも從米の地域性が解消され、ほぼ同様の型式変遷が見られるというこの現象は、極めて重大な社会変化が見られたと考えられる。

引用・参考文献

- 小野正義 1987 「第6章第1節第9項 曾利式土器」『积迦堂II』山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第21集
- 梅原功一・河西 学・大村昭三 1989 「八ヶ岳南麓地域とその周辺地域の縄文時代中期末土器群の胎土分析」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第1集
- 梅原功一 1993 「曾利I式土器の再検討—山梨県大泉村越神遺跡の資料とともに—」『縄文時代』4
- 小林公明 1988 「生活用具としての土器の組成と用途」『庄板宮』富士見町教育委員会
- 佐々木藤雄 1981 「縄文時代の通婚団」『信濃』33-9
- 佐々木藤雄 1983 「縄文時代の親族構造」『異想』10
- 佐々木藤雄 1997 「縄文時代の土器分布図と家族・親族・部族（上）」『先史考古学論集』第6号
- 佐々木藤雄 1998 「縄文時代の土器分布図と家族・親族・部族（下）」『先史考古学論集』第7号
- 佐野 隆 1997 「曾利式土器終末期の編年について」『八ヶ岳考古—平成8年度年報—』
- 北江市町村文化財担当者会
- 末木 錦 1981 「曾利式土器」『縄文文化の研究』4
- 末木 錦 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観』
- 山形真理子 1989 「曾利式土器における施文順位の意義」『磯貝正義先生喜寿記念論文集—甲斐の成立と地方的展開—』
- 山形真理子 1996 「曾利式土器の研究（上）内的情報と外的交渉の歴史」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第14号
- 米田勝訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』第30号
- 米田勝訓 1980 「曾利式土器編年の現状と課題」『縄文時代・中期後半の諸問題』神奈川考古第10号別冊神奈川考古同人会
- 末日明訓 1986 「第4章第1節 縄文時代の道構と遺物」『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集
- 神奈川考古同人会 1981 「シンポジウム縄文中期後半の諸問題」『神奈川考古』第11号

- 大泉村教育委員会 1988 『方城第1遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書第6集
- 大泉村教育委員会 1989 『人和臼・人和田第2遺跡』大泉村埋蔵文化財調査報告書第7集
- 大泉村教育委員会 1994 『甲ヶ原遺跡 第6地点・第7地点』大泉村埋蔵文化財調査報告書第10集
- 岡谷市教育委員会 1967 『海戸 第1次調査報告』
- 岡谷市教育委員会 1968 『海戸 第2次調査報告』
- 岡谷市教育委員会 1996 『花上寺遺跡』郷土の文化財19
- 須玉町教育委員会 1986 『川又南遺跡』須玉町埋蔵文化財調査報告第3集
- 高根町遺跡調査会他 1996 『次郎坊遺跡』
- 高根町教育委員会他 1997 『社山遺跡第二次調査報告書』
- 茅野市教育委員会 1957 『尖石』
- 茅野市教育委員会他 1970 『茅野和田遺跡緊急発掘調査報告書』
- 茅野市教育委員会 1978 『よせの台遺跡』
- 茅野市教育委員会 1990 『樹塁』
- 茅野市 1986 『茅野市史』上巻
- 長野県教育委員会他 1973 『長野県中央遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市内その1・その2—』
- 五崎市 1979 『五崎市史』
- 山州町教育委員会 1990 『教米石呂部館跡 第2次発掘調査報告書』
- 富士見町教育委員会 1978 『曾利遺跡 第三、四、五次発掘調査報告書』
- 富士見町教育委員会 1988 『唐廬宮』
- 森森栄一編 1965 『井戸尻』
- 穴藤雄六 1965 『長野県諏訪郡上見町大畠遺跡第3次調査報告』『長野県考古学会誌』3
- 山梨県教育委員会 1994 『天神遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第97集
- 山梨県教育委員会他 1974 『山梨県中央遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 北巨摩郡小淵沢町内一』
- 山梨県教育委員会他 1975 『山梨県中央遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・越崎市内一』
- 山梨県教育委員会他 1986 『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第13集
- 山梨県教育委員会他 1986 『駒庭堂I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第17集
- 山梨県教育委員会他 1987 『駒庭堂II』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第21集
- 山梨県教育委員会他 1987 『駒庭堂III』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第22集
- 山梨県教育委員会他 1989 『一の沢遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第42集
- 山梨県教育委員会他 1993 『宿尻遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第81集
- 山梨県教育委員会 1995 『宮の前遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第107集

北巨摩地域の石錐について ——その大きさと抉の時期的変遷——

村松佳幸

はじめに

縄文時代を通じて石錐は時期的にも地域的にも数多く出土する石器の一つである。早割期から晩期に至るまで全国的に出土し、前期あるいは晩期には一遺跡から数百あるいは数千点もの出土がみられる場合もある。報告書にもよほど数多く出土しなければほぼ全点図示されるなど、縄文時代を代表する石器の一つである。しかし、古くから研究はされているものの、形態の変化に乏しいためなのか、矢尻としての機能が明らかとなるためなのか、その数はあまり多くない。また、各報告書にその遺跡の石錐の分析を行っているものが幾つかあるが、その報告書で分析が終わっていてその後の展開があり見られず、それらの分析をまとめた研究も少ない。

石錐の研究では形態分類が古くから行われているが、その代表的なものが赤堀英二や佐原真の研究であろう。赤堀英二は基部の有無、基部形態により12に分類している(赤堀1929)。佐原真は粟窓山遺跡の報告書の中で赤堀よりすっきりした形で分類しており(佐原1964)、後の石錐分類の基礎となっていた。

また、形態分類以外に石錐の大きさ等を統計学的処理をし分析する研究もある。上野佳也、五十嵐芳郎、神村透、佐々木彰等の研究がそれであるが、上野佳也は北海道・東北地方、関東地方、中部地方の石錐の大きさを数量的分析で比較している(上野1963)。五十嵐芳郎は秋田県の遺跡から出土した石錐を統計学的方法で分析を行っている(五十嵐1975)。神村透は長野県上松町の最中遺跡から採集した石錐について統計学的処理をしてその傾向を多数のグラフに表わしている(神村1976)。佐々木彰は北上川中流域の前・中期の遺跡から出土した石錐の大きさの時期的変遷を追っている(佐々木1982)。

このように、各地域で石錐の分析を行っている。実際これらをまとめ、全国的にも時期的にも普遍的に出土する石錐をもう一度見直す必要があるのではないかだろうか。そこでその第一歩として筆者が研究フィールドとしている北巨摩地域の石錐について分析していこうと思う。石錐といっても大きさ・形態・重量・石材等のいろいろな属性があるが、今回は手始めとして石錐の大きさと基部の抉について考えていく。というのは、石錐の大きさと抉は当然形態や重量などに影響を与えるものであり、時期的に変化しやすいと思うからである。

また、抉の深さを浅いものと深いものとに分類している報告書が多いが、見た目で分けている場合が多いと感じる。実際、どこからが浅くどこからが深いのかその境がよく分からない。そこで、抉を実際計測して数値化していく、明確な区分があるのかも合わせて見ていただきたい。

石錐の計測

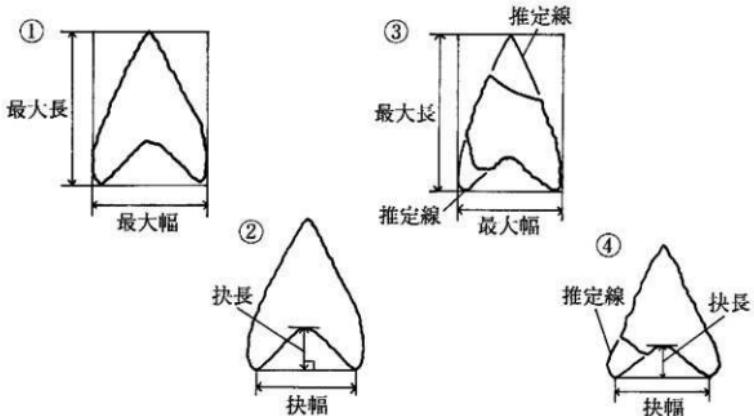
今回資料に用いたのは住居跡から出土した石錐に限った。というのは、グリッド出土あるいは表探の石錐だと帰属時期の判断が難しいので、住居跡から出土した石錐だけを計測していった。石錐の時期的変遷を追うためには、石錐の時期がはっきりしていないといけない。しかし、石錐だけでは時期を決定することができないので、伴出した土器により時期を決めるのだが、遺跡全体で考えると時期の幅が大きくなりすぎてしまう。できるだけ時期の幅が狭くなるようにするために、住居跡出土の石錐をデータとして用いることにした。厳密に言うと、必ずしも石錐と住居が同じ時期に使われていたということにはならないが、住居跡の時期と

数型式ぐらいの違いに収まると思われる。今回分析する時期区分も土器型式別ではなく、前期・中期・後期と大きな時期区分なので、数型式の時期差が生じても大差ないと判断した。

石器の計測は次のとおりに行う。第1図①のように先端部を上に脚部を下に置き、先端部の先から脚部の下端までの間の距離を最大長、脚部の左右の端の間の距離を最大幅とする。また、最大長を最大幅で割った値に100を掛けた数値を長幅指数とする(長幅指数=最大長÷最大幅×100)。これは石器の縦と横の比率を表わす数値で、100で最大長と最大幅が等しく、それより大きいと細長くなり、小さいと偏平なものになることを示している。

抉についてでは、第1図②のように左右の脚部の下端の間の距離を抉幅とし、抉幅を測った2点を結んだ直線とそれと直交する抉の一番深いところまでの距離を抉長とする。凸基の場合は基部と思われるところから張り出し部の最下端までの距離を計測した。今回は凹基の抉長を「+」の値に、凸基の抉長を「-」の値にした(例)。また、抉長を抉幅で割った値に100を掛けた数値を抉指指数とした(抉指指数=抉長÷抉幅×100)。抉指指数が0で平基になると、「+」の値になると凹基に、「-」の値になると凸基になる。

完形と思われる石器ならば簡単に計測できるが、先端部あるいは脚部を欠損しているものについては少し手を加えて測る必要がある。それは、図面上で復元して計測するのである。先端部あるいは脚部が欠損しているものでもおおよその大きさは推定できよう。第1図③のように先端部欠損の場合、側縁部のラインをそのまま伸ばし、両側縁のラインが交叉したところを先端として最大長を計測した。脚部の場合も第1図③・④のように、欠損していない片方の脚部の形を参考にして、側縁部のラインと抉部の弧のラインから脚部を推定し、最大長・最大幅・抉幅を計測した。本来なら完形品と考えられる欠損しているところがない石器のみを資料として用いるべきであろうが、それのみを扱うと資料数が少なくなってしまうためと、統計処理では多くの資料を必要とするためと、ほんの少し先端部あるいは脚部が欠損しているからといって資料にしないのは気が遠けるために欠損している石器も積極的に資料とした。なお、石器の左右のどちらか半分が欠損しているものは、石器が左右対称に作られることが多いので、元の形を推定することができると考え資料としたが、下半部が欠損していて基部がまったく残存していないものは、元の形を推定することは不可能な



第1図 石器の計測例

ので資料として取り上げなかった。

また、統計学的に見るために、前期から後期の最大長・最大幅・抉長・抉幅・長幅指数・抉指数のそれぞれの平均・標準偏差・分散・最大値・最小値を求めた(表2)。

以上のことを前提として、北巨摩地域の遺跡から前期6遺跡164点、中期12遺跡122点、後期5遺跡73点、総計19遺跡(表2)359点の石器について計測を行った。筆者の怠慢もあり359点全てを実際の遺物から計測した訳ではなく、大部分を報告書の図面から計測した。よってコンマ何という厳密な数値は多少誤差があると思われる。

各項目の時期的変遷

まずは、最大長と最大幅の関係を見ていこう(第5図参照)。前期では、最大長の最大値3.55・最小値1.30であり、3.2~1.4ぐらいのところに分布が集中している。最大幅は、最大値2.90・最小値0.95であり、2.4~1.0ぐらいのところに集中している。最大長の平均は2.09、標準偏差は0.43、分散は0.19である。最大幅の平均は1.70、標準偏差は0.36、分散は0.13である。

中期になると、最大長の最大値3.85・最小値1.20であり、3.2~1.4ぐらいのところに集まっている。最大幅の最大値2.65、最小値1.10であり、2.4~1.1ぐらいのところに集中している。最大長の平均値は2.25、標準偏差は0.51、分散は0.26であり、最大幅の平均値は1.64、標準偏差は0.36、分散は0.13である。



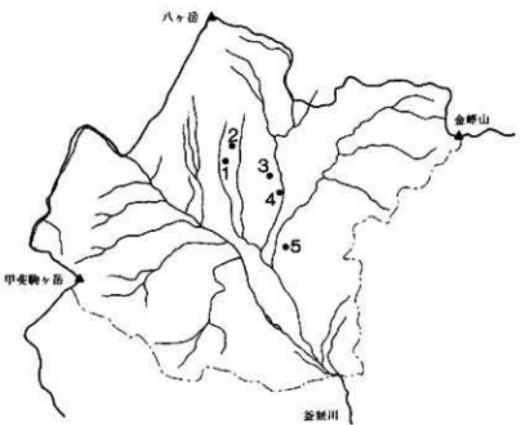
遺跡名	出土位置	年号	石器件数
1 鹿野寺	4月2日	新石器時代	1
2 上北原	10月2日	新石器時代	1
	15年2月	新石器時代	1
	17年4月	新石器時代	1
	18年2月	新石器時代	3
	20年2月	新石器時代	1
	21年2月	新石器時代	1
	22年2月	新石器時代	1
	23年2月	新石器時代	2
	23年2月	新石器時代	1
3 朝日村	6月2日	新石器時代	6
4 須崎	6月2日	新石器時代	1
5 木神	1月10日	縄文時代	2
	3月10日	縄文時代	2
	4月10日	縄文時代	11
	5月10日	縄文時代	3
	6月10日	縄文時代	1
	7月10日	縄文時代	2
	11月10日	縄文時代	2
	14年6月	縄文時代	2
	15年6月	縄文時代	4
	15年6月	縄文時代	7
	20年6月	縄文時代	1
	21年6月	縄文時代	2
	23年6月	縄文時代	1
	24年6月	縄文時代	1
	24年6月	縄文時代	2
	32年6月	縄文時代	6
	34年6月	縄文時代	3
	36年6月	縄文時代	2
	37年6月	縄文時代	2
	38年6月	縄文時代	3
	40年6月	縄文時代	4
	41年6月	縄文時代	2
	42年6月	縄文時代	1
	43年6月	縄文時代	2
	44年6月	縄文時代	1
	47年6月	縄文時代	17
	48年6月	縄文時代	1
	49年6月	縄文時代	2
	50年6月	縄文時代	7
	51年6月	縄文時代	1
	54年6月	縄文時代	1
	55年6月	縄文時代	2
6 幸ヶ原	A842年6月	縄文時代	6
	A843年6月	縄文時代	1
	A844年6月	縄文時代	2
	A847年6月	縄文時代	4
	C813年6月	縄文時代	7
	C821年6月	縄文時代	7
			8 164

第2図 分析に用いた前期遺跡分布図



第3図 分析に用いた中期流域分布図

流域名	出土地點	地質	石炭成層
1 油田川	GE1号井	馬鹿ヶ谷	1
	GE2号井	中野ヶ谷	1
	GE3号井	中野ヶ谷	1
	GE4号井	中野	4
	GE5号井	中野	4
2 小畠	GE6号井	五箇ヶ谷	3
	GE7号井	五箇ヶ谷	4
	GE8号井	五箇ヶ谷	3
	GE9号井	五箇ヶ谷	3
3 大畠川	GE10号井	五箇ヶ谷	3
	GE11号井	三河A	17
	GE12号井	豊利V	1
	GE13号井	豊利V	1
4 大畠川	GE14号井	豊利V	1
	GE15号井	豊利V	2
	GE16号井	豊利V	2
	GE17号井	豊利V	1
5 鶴神	GE18号井	豊利V	2
	GE19号井	豊利V	2
	GE20号井	豊利V	2
	GE21号井	豊利V	1
6 天神	AE1号井	五箇ヶ谷	2
	AE2号井	五箇ヶ谷	1
	AE3号井	五箇ヶ谷	1
	AE4号井	五箇ヶ谷	2
	AE5号井	五箇ヶ谷	1
	AE6号井	五箇ヶ谷	1
	AE7号井	五箇ヶ谷	1
7 幸ヶ原	AE8号井	五箇ヶ谷	1
	AE9号井	豊利V	3
	AE10号井	豊利V	8
	AE11号井	豊利V	2
	AE12号井	豊利V	10
	CR1(1)号井	黒内V	1
	CR1(2)号井	黒内V	2
	CR1(3)号井	黒内V	3
	CR1(4)号井	豊利V	1
	CR1(5)号井	豊利V	1
	CR1(6)号井	北芦内V	3
	CR1(7)号井	豊利V	2
	CR1(8)号井	豊利V	1
8 鶴井	CR1(9)号井	豊利V	1
	CR1(10)号井	豊利V	1
	CR1(11)号井	豊利V	1
	CR1(12)号井	豊利V	1
9 手口	CR1(13)号井	豊利V	1
	CR1(14)号井	豊利V	1
	CR1(15)号井	豊利V	1
	CR1(16)号井	豊利V	6
10 佐野川	CR1(17)号井	豊利V	2
	CR1(18)号井	豊利V	1
	CR1(19)号井	豊利V	1
	CR1(20)号井	豊利V	1
11 金峰	CR1(21)号井	豊利V	1
	CR1(22)号井	豊利V	1
	CR1(23)号井	豊利V	1
	CR1(24)号井	豊利V	1
12 金峰	CR1(25)号井	豊利V	1
	CR1(26)号井	豊利V	1
	CR1(27)号井	豊利V	2
	CR1(28)号井	五箇ヶ谷	1
	CR1(29)号井	豊利V	1
	CR1(30)号井	豊利V	1
	CR1(31)号井	豊利V	6
	CR1(32)号井	豊利V	2
	CR1(33)号井	豊利V	1
	CR1(34)号井	豊利V	1
	CR1(35)号井	五箇ヶ谷	1
合計 125			



流域名	出土地點	地質	石炭成層
1 佐野川	7号井	豊利V	2
	8号井	豊利V	1
	9号井	豊利V	1
	10号井	豊利V	1
	11号井	豊利V	1
2 鶴神	12号井	豊利V	1
	13号井	豊利V	1
	14号井	豊利V	1
	15号井	豊利V	1
3 手口	16号井	豊利V	1
	17号井	豊利V	1
	18号井	豊利V	2
	19号井	豊利V	1
4 丹波上	20号井	南条V	16
	21号井	南条V	9
	22号井	南条V	2
	23号井	中東V	2
5 金峰	24号井	豊利V	4
	25号井	豊利V	1
合計 73			

第4図 分析に用いた後期流域分布図

後期には、最大長の最大値は3.45・最小値は1.15であり、2.2~1.1ぐらいのところに多く分布している。最大幅は、最大値2.45・最小値0.80であり、1.7~0.8ぐらいのところに集中している。最大長の平均は1.75、標準偏差は0.39、分散は0.16である。最大幅の平均は1.29、標準偏差は0.28、分散は0.08である。

以上前期から後期に至るまでの最大長と最大幅の変化は、前・中期では最大長・最大幅とともに同じ様な傾向を示しているが、後期になると小さくなってくる。各項目のバラツキを示す標準偏差をみると、前・中期の値が大きく後期になると小さくなる。また、平均をみても後期になると前・中期に比べ小さくなっている。以上のことから、後期になると石器が小型化していくことが分かる。この結果は、中部地方の石器は前段から中期になると幅が狭くなり、中期から後期になると幅が見られないとした上野の分析結果（上野1963）とは異なり、中部地方の中でも細かな地域性がある可能性がある。今回分析した地域が八ヶ岳南麓を中心とした北山地域で中部地方の中の一つの地域であるため、甲府盆地あるいは諏訪湖周辺といった他地域との比較により細かな地域性が出てくるのではないだろうか。

また、各時期の最大長・最大幅の標準偏差あるいは分散を比較すると、最大長の方が値が大きく、バラツキが大きいことが分かる。これは、三上徹也の言うように石器は繰り返し再生されたと考えるならば（三上1990）、このバラツキも納得できよう。

次に抉長と抉幅の関係を見てみる（第6図参照）。

前期では、抉長の最大値は1.00・最小値は-0.60であり、0.8~0ぐらいのところに分布が集中している。抉幅の最大値は2.60・最小値は0.50であり、2.0~0.5ぐらいのところに集中している。抉長の平均は0.33、標準偏差は0.23、分散は0.05であり、抉幅の平均は1.38、標準偏差は0.38、分散は0.15である。

中期になり抉長の最大値は1.20・最小値は-0.60であり、0.8~0ぐらいのところに集中している。抉幅は、最大値は2.60・最小値は0.45であり、2.0~0.7ぐらいのところに集中している。抉長の平均は0.44、標準偏差は0.29、分散は0.09である。抉幅の平均は1.32、標準偏差は0.41、分散は0.17である。

後期には抉長の最大値は1.10・最小値は-0.10であり、0.4~0ぐらいのところに分布が集中している。抉幅は、最大値は2.30・最小値は0.50であり、1.5~0.7ぐらいのところに集中している。抉長の平均は0.23、標準偏差は0.20、分散は0.04である。抉幅の平均は1.07、標準偏差は0.29、分散は0.08である。

これも、最大長・最大幅と同じ様に、前・中期では抉長・抉幅ともには同じ傾向を示しているが、後期になると小さくなる。ここでも後期の石器が大きさだけでなく抉についても小さくなる様子が分かる。標準偏差をみると後期になり値が小さくなっている。抉長の平均は中期に大きくなり、後期に小さくなる。抉幅の平均は中・後期になるにつれだんだん小さくなっていく。以上のことから抉は前・中期では比較的抉幅が広く抉が深いが、後期になり抉幅が狭く抉が浅くなっていく。また、標準偏差あるいは分散が最大長と比べると値が小さく、最大幅のそれと近い数値を示しており、バラツキが少ない。

抉の深さも前期から後期を見ても、あまり明確に区別することはできないのではないだろうか。グラフを見ると、どれも深いものもあれば浅いものもあり、なおかつその中間のものもある。

最大長・最大幅のところでも言えることであるが、各項目の標準偏差と分散が中期になると値が大きくなる。これは中期の石器の最大長・最大幅・抉長・抉幅についてバラツキが大きいことを示しているが、何故であろう。遺跡に残った石器は使えないと判断され捨てられたものが多いのだが、中期ではその判断基準が曖昧であったのだろうか、あるいは土器の一括廻棄が行われたときに石器も使えると思われるものまで一緒に廻棄したためバラツキが大きくなったのだろうか、興味深いことである。

最後に長幅指数と抉指数の関係をみてみよう（第7図参照）。

前期では、長幅指標の最大値は215.80・最小値は73.90であり、160~90ぐらいのところに分布が集中している。抉指數は、最大値は133.30・最小値は-42.10であり、50~0ぐらいのところに集中している。長幅指標の平均は125.11、標準偏差は23.13、分散は535.22である。抉指數の平均は25.46、標準偏差は17.76、分散は315.46である。

中期になり長幅指標の最大値は200.00・最小値は72.70であり、190~90ぐらいのところに集中している。抉指數は、最大値は85.00・最小値は-31.30であり、80~0ぐらいのところに集中している。長幅指標の平均は139.59、標準偏差は28.42、分散は807.54である。抉指數の平均は35.0、標準偏差は21.21、分散は449.69である。

後期では長幅指標の最大値は233.30・最小値は80.0であり、180~100ぐらいのところに集中している。抉指數は、最大値は73.10・最小値は-9.10であり、50~0ぐらいのところに集中している。長幅指標の平均は137.59、標準偏差は28.44、分散は808.90である。抉指數の平均は20.97、標準偏差は14.54、分散は211.38である。

第7図を見てまず気が付くのが前期のグラフの分布が密集していることである。前期は長幅指標70~160・抉指數10~50に密集している。中・後期は前期と比べて、やや分散している。前期でこれほど分布が片寄るのは、長幅指標では使えないと判断される大きさがある程度決まっていたか、抉指數では石器製作時に強い規定があったかなどいろいろ考えられるが、これが北口摩の地域性なのかどうかの解明は今後の課題にしたい。

抉指數に関していうと中期で最大になり、前期・後期よりも抉を深く作る傾向がある。

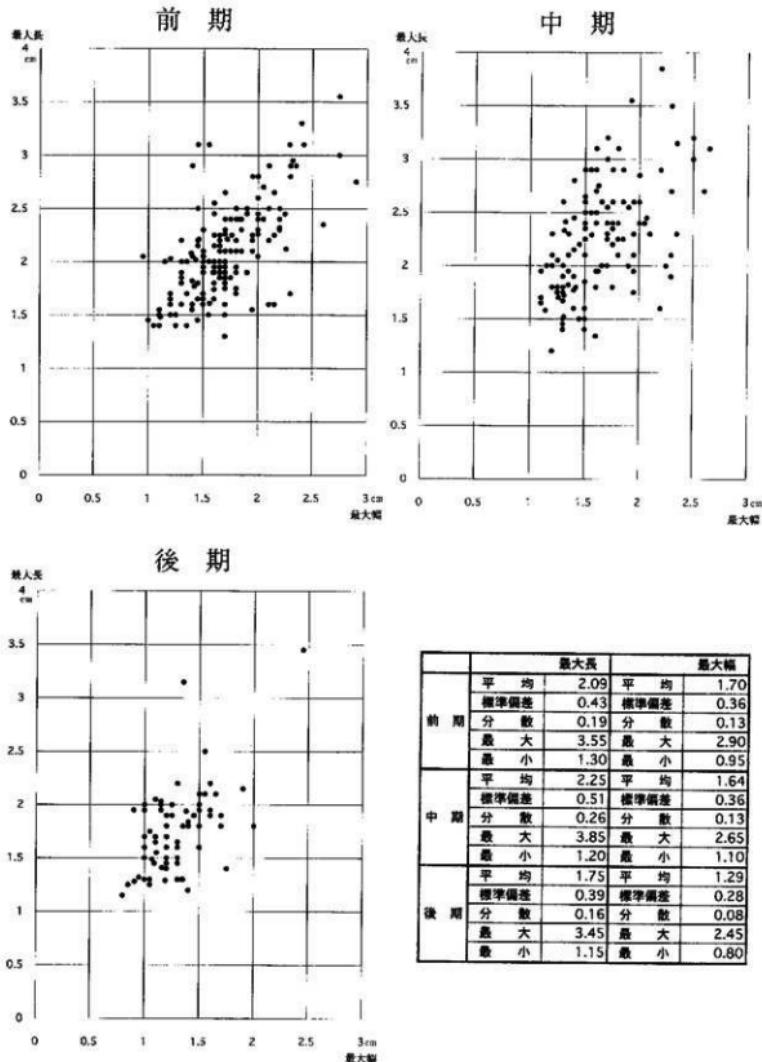
まとめ

以上のことまとめると次のようになる。

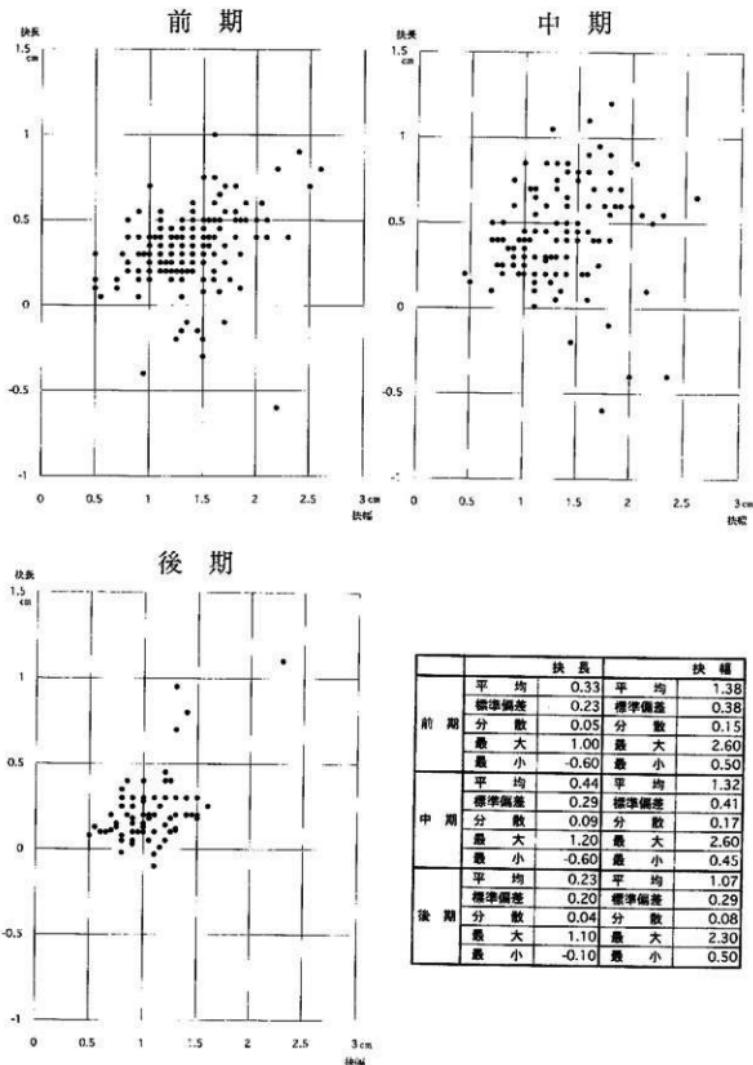
- ・平均すると後期の石器は前・中期のよりも小型である。
- ・平均すると最大長は中期の石器が一番大きいが、最大幅は前期の石器が大きい。
- ・平均すると中期が抉が深く、後期が抉が浅い。
- ・中期ではどの項目も標準偏差あるいは分散が前・後期と比べると大きい。
- ・長幅指標をみると前期が一番小さく正三角形に近いが、中・後期はやや細長い。
- ・前期は長幅指標・抉指數とも分散が小さい（バラツキが小さい・長幅指標70~160・抉指數10~50のところに密集している。）
- ・中期は長幅指標・抉指數とも分散が大きい（バラツキが大きい）。
- ・後期は長幅指標の分散は大きいが、抉指數の分散は小さい。
- ・どの時期も、抉指數の標準偏差あるいは分散が長幅指標のそれと比べると値が小さい（抉指數はバラツキが小さく、長幅指標はバラツキが大きい）。

それを表にまとめたものが第1表である。しかし、これはあくまで各時期の平均を模式化したものであり、その形の石器が存在しているとは限らず、それ以外の形がほとんどであることは言うまでもない。また、これは遺構内出土の石器の分析結果であり、遺構外出土の石器を含めると数値が変わるものもある。

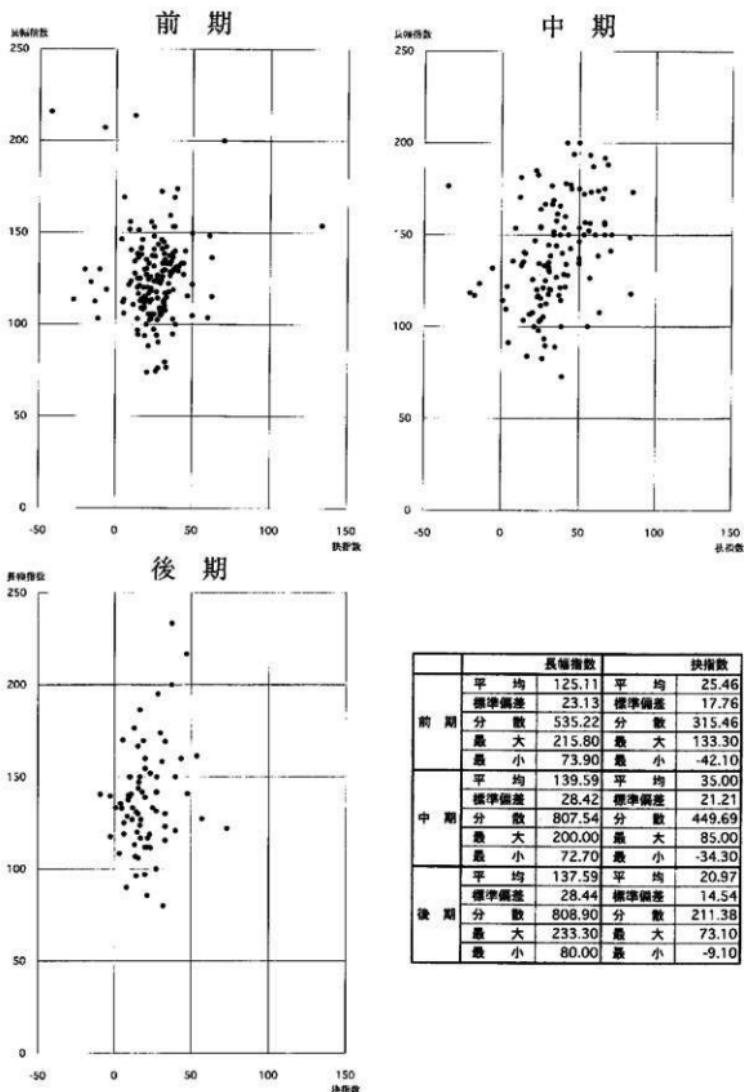
前・中期は大きさはほぼ同じであるが、その形に近いものが多いのが前期で、バラツキが大きいのが中期である。後期は大きさが小さくなり、最大幅はバラツキが小さいが最大長はバラツキが大きいと言える。



第5図 最大長・最大幅の時期別グラフ及び表



第6図 塗長・塗幅の時期別グラフ及び表



第7図 長幅指數・決指數の時期別グラフ及び表

第1表 分析結果のまとめ

時 期	前 期	中 期	後 期
平均を基にした模式図			
長幅指數	125.11 (535.22)	139.59 (807.54)	137.59 (808.90)
抉指數	25.46 (315.46)	35.00 (449.69)	20.97 (211.38)
特徴	最大幅が大きい 長幅指數が小さい 長幅指數と抉指數の分散が小さい	大きさが大きい 抉が深い 各項目の分散が大きい 長幅指數と抉指數の分散が大きい	大きさが小さい 抉が浅い 長幅指數の分散は大きいが、抉指數の分散は小さい

* 構内の数値は平均 (国中の平均の単位はcm)。 () 内は分散

今後の課題

今回は石鎚の最大長・最大幅・抉長・抉幅・長幅指數・抉指數の関係をみてきたが、これは基礎的な分析である。石鎚には特に最大厚・重量・先端角・石材等の属性があり、それらを含めた分析をしなければならない。また、脚部形態や側縁部形態の分類と合わせて考えると、こういう形態の脚部はどれくらい抉をいれているかとか、この側縁部の時にはこれぐらいの縱と横の比率があるなどある程度の規則性が見えてきて、大きな時間軸での変遷や細かな地域性がとらえられるのではないだろうか。

また、今回は北巨摩という地域だけしか検討していないが、さらに視点を広げ中部地方、あるいは東日本といった範囲に分析地域を広げていく必要がある。

そして、そこで明らかになった結果の要因が何であるかを解明していかねばならない。

註

- (1) 斎村道雄 (岡村1978)・町田勝利 (町田1996) 等は、抉のほうを「-」としている。こちらのほうが一般的であり、各報告書でも用いられているが、今回はほとんどが四基の石鎚であること、「-」の値でグラフを作成すると見ずくなると思いたい。抉のほうを「+」の値にした。
- (2) 平均・標準偏差・分散・最大値・最小値はそれぞれ次のように求めた。
平均 (算術平均)：グループの値を全部足して値の個数で割った値

$$\bar{x} = \frac{\sum x_i}{n} \quad \bar{x} : \text{平均} \quad \sum x_i : \text{値の総和} \quad n : \text{値の個数}$$

標準偏差：グループの平均からのへだたり・グループのバラツキの大きさを表す値 (値が大きいほどバラツキがある)

$$\sigma = \sqrt{\frac{\sum (x_i - \bar{x})^2}{n}} \quad \sigma : \text{標準偏差} \quad \bar{x} : \text{平均} \\ \sum (x_i - \bar{x})^2 : \text{それぞれの値から平均を引き、それを2乗した値の総和}$$

分散：標準偏差の2乗の値（値が大きいほどバラツキがある）

分散一（標準偏差）²

最大値：グループの中の最大の値

最小値：グループの中の最小の値

- (3) 天神遺跡や甲ヶ原遺跡のように2つの時期にわたる遺跡もあるので、各時期の遺跡数を足した数より少なくなっている。また、第2～4回をみると八ヶ岳南麓の遺跡が多いが、これは調査の多家により分布に片寄りが生じたためである。

参考文献

- 赤堀美三 1929 「石器研究の一方法—石器に関する二、三の試み」『人類学雑誌 第44卷第3号』
- 五十嵐芳郎 1975 「秋田地方出土石器の基礎実験」『秋田考古学 第32号』秋田考古学協会
- 上野佳也 1963 「東日本縄文文化石器の大きさについての比較研究」『考古学雑誌 第19卷第2号』
- 岡村道雄 1978 「剥片石器とその素材」『上深沢道路』宮城県教育委員会
- 1979 「縄文時代石器の基礎的研究とその具体例」『東北歴史資料館研究紀要第5巻』東北歴史資料館
- 神村達 1976 「石器と統計(1)」『反戸県考古学会誌 23・24』長野県考古学会
- 佐々木彰 1982 「石器における時期的変遷の様相—北上川中流域の縄文時代前・中期を中心として—」『法政考古学 第7集』法政考古学会
- 佐藤真 1964 「第四章 第一部 石器」『奈良出』輪問町文化財保護委員会
- 鈴木慎之助 1983 「石器」「縄文文化の研究 7 道具と技術」雄山閣
- 町田勝則 1996 「石器の研究法—報告文作成に伴う観察・記録法①」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
- 三上徹也 1990 「縄文石器における「完形品」の概念について—石器を例とした考古学的史料批判の試論的実践—」『縄文時代1』縄文時代文化研究所会
- 山本茂樹・野代幸和 1995 「日影田遺跡」山梨県教育委員会
- 新津健・米田明訓 1994 「大穴遺跡」山梨県教育委員会
- 野代幸和 1987 「駒藏地遺跡」山梨県教育委員会
- 新津健・三田村美彦 1993 「川又坂上遺跡」山梨県教育委員会
- 浅利司・保坂利博 1991 「小坂遺跡」山梨県教育委員会
- 右神孝子 1996 「唐松遺跡」山梨県教育委員会
- 山本茂樹・野代幸和 1994 「平ヶ原遺跡(第3次) I」山梨県教育委員会
- 山本茂樹・今福利恵 1997 「甲ヶ原遺跡II(第2・3次調査)」山梨県教育委員会
- 櫛原功一 1987 「姥神遺跡」大泉村教育委員会
- 櫛原功一 1986 「豆生田第3遺跡」大泉村教育委員会
- 伊藤公明 1988 「方城第1遺跡」大泉村教育委員会
- 伊藤公明 1989 「大和田遺跡 大和田第2遺跡」大泉村教育委員会
- 折井敏 1991 「上北田3遺跡 新居浜上遺跡」白州町教育委員会
- 武藤雄六・杉本光 1993 「上北田遺跡」白州町教育委員会
- 雨宮正樹・榎本勝 1992 「持井遺跡」高根町教育委員会
- 宮沢公雄 1986 「清水塚遺跡」明野村教育委員会
- 板倉誠之他 1994 「健旅村遺跡」新宿区区民健康村遺跡調査団
- 山根弘人他 1981 「御所遺跡—第2次発掘調査報告書」山梨大学考古学研究会

鷹原功・ 1997 『社口遺跡第3次調査報告書』社口遺跡発掘調査団

小宮山隆 1996 『酒呑場遺跡G区』長坂町教育委員会

分析で用いた石器一覧 (ページと図番号は各遺跡の報告書の番号である)

○前 期

新居道上 p38 第36図1 ~ 3

上 北 田 p38 第33図4、p41 第36図17、p43 第38図11、p44 第39図20、p47 第42図5 ~ 7、p55 第50図12 ~ 16、p56 第51図15、p57 第52図26、p60 第55図8 9、p61 第56図4

健 康 村 p22 第9図1 ~ 6

御 所 p74 第49図1 2 4 ~ 6 11 12、p74 第49図10

甲 ツ 原 p12 第11図1 ~ 6、p15 第16図1、p20 第22図1 ~ 5 7、p34 第39図1 ~ 5 (第5次) p34 第24図9 17 23 41 42、p36 第26図130 131 149 152 166、p37 第27図184 (第2 ~ 3次)

大 神 p177 第166図2 ~ 4 9 10 13 14 17 ~ 19 22 23 27 29 36 ~ 40 44 46 48、p178 第167図1 2 4 6 ~ 10 13 14 16 17 21 23 24 26 ~ 29 32 33 39 41 ~ 43、p180 第169図1 2 11 17 ~ 19 22 23 25 28 ~ 30 32 34 ~ 38 41 ~ 43 46 47、p181 第170図1 ~ 5 9 13 15

○中 期

酒呑場 p29 第34区1号住16 2号住10 3号住4 4号住3 6 ~ 8 5号住22 31 ~ 33

小 坂 p12 第9図1 ~ 3、p17 第14図3 ~ 6、p22 第20図1 ~ 3

大 和 田 p12 第9図22、p15 第12図9、p22 第19図13、p27 第23図29

方城第一 p10 第10図20 21、p29 第28図15

蛇 神 p10 第11図10 11、p31 第32図8、p34 第35図15 16、p35 第37図9 10、p53 第56図29

天 神 p177 第166図5 16、p178 第167図42、p179 第168図7 25、p180 第169図24、p181 第170図6 12

甲 ツ 原 p8 第7図1 2、p25 第27図1 ~ 3、p27 第31図1 2 4 ~ 7 9 10 (第5次) p34 第24図1 5 15 16 28 ~ 30 32 40 46 48 50 58 63、p35 第25図66 68 72 ~ 74 76 77 81 83 86 88 90 100 106 113 115、p36 第26図138 139 143 151 153 161 164 167 168 170 172、p37 第27図185 186 190 (第2 ~ 3次)

持 井 p8 第6図3

社 口 p97 第86図56、p101 第90図12、p104 第93図8、p112 第101図80 ~ 85、p116 第105図26 27

日 影 田 p10 第8図1

舞 露 地 p13 第9図6

唐 松 p52 第40図9 14 18 39 40 42 47

○後 期

豆生田第3 p13 第9図16 17、p14 第10図15

蛇 神 p7 第7図3、p13 第14図21 ~ 23、p16 第17図26 ~ 28、p21 第22図47 ~ 51、p24 第25図22 23、p28 第29図33、p30 第31図25 ~ 30、p39 第41図10 ~ 13

社 口 p119 第108図33 ~ 35、p121 第110図26、p123 第112図13 14、p126 第115図3 ~ 38、p131 第120図12

川又坂上 p12 第11図1 ~ 5 7 ~ 10 12 13、p13 第12図27 ~ 31、p20 第21図1 ~ 9、p29 第29図6号址1 2、p29 第29図7号址8 9

清 水 塚 p17 第15図1 ~ 4

垂崎市三宮地遺跡出土の縄文時代晚期の土器について

間間俊明

はじめに

三宮地遺跡は山梨県垂崎市藤井町北下条字三宮地に所在する遺跡である。垂崎市文化ホール前通り線の拡幅工事に伴う緊急発掘調査として平成9年度に調査を垂崎市教育委員会が行った。その結果、縄文時代中期前半（猪沢式期）の住居跡1軒、縄文時代晚期前半の配石土坑群・トチの実集中土坑・奈良・平安時代の住居跡14軒・掘立柱建物跡5棟などを確認し調査した。その内容に関しては、「三宮地遺跡」（山下・間間・秋山1998）として報告したが、諸般の事情により遺構外から出土した縄文時代晚期前半を中心とする上器に関する報告することができなかった。しかし、遺跡の所在する通称「藤井平」はもとより北巨摩郡において縄文時代晚期前半の遺跡は、大泉村金牛遺跡や長坂町長坂上条遺跡など数遺跡のみであり、当時期の文化様相の一端を知る上で有効な資料と思われることから本誌を借りて以下に出土資料に関して紹介し、若干の考察を行いたい。

出土土器について

1) 出土土器

出土資料が破片であり、器種の想定できるものが非常に少ないとから、以下のように系統を文様要素を中心として分類をおこなうものとする。また、資料は客上、表土および水田床土除去後の暗黒褐色土層（堆積は10~15cm）中から出土し、層位的には区分できないものである。

○ I群 晚期前半に位置づけられるものである。

1から12類に分類が可能である。なお、本群に含まれるであろう無文の土器は、本群に含めずIII群として扱った。

1類（第1図1~26）

沈線により縫の手文の施文されるものである。

1は入り組む縫の手文間に縫の手文が施文され、また口縁部文様帶下部に粘土粒が貼付けられている。2は入り組む縫の手文が上下の横走する沈線と交わらないものである。3から17は、入り組む縫の手文が上下の横走する沈線と交わるものである。18から20は、入り組む縫の手文の入り組む間に縫の手文が施文されたものである。21は入り組む縫の手文の変形したものである。22と23は入り組む縫の手文が「T」字状に変形したものである。24は入り組まない縫の手文である。25と26は入り組む縫の手文が曲線化したものである。

以上のように本遺跡の縫の手文は入り組む縫の手文が中心であるとともに、すべて右下がりの縫の手文である。21から23及び25と26は、いずれも縫の手文が変形したものと考えられ、その他の縫の手文よりも後出のものと考えられる。

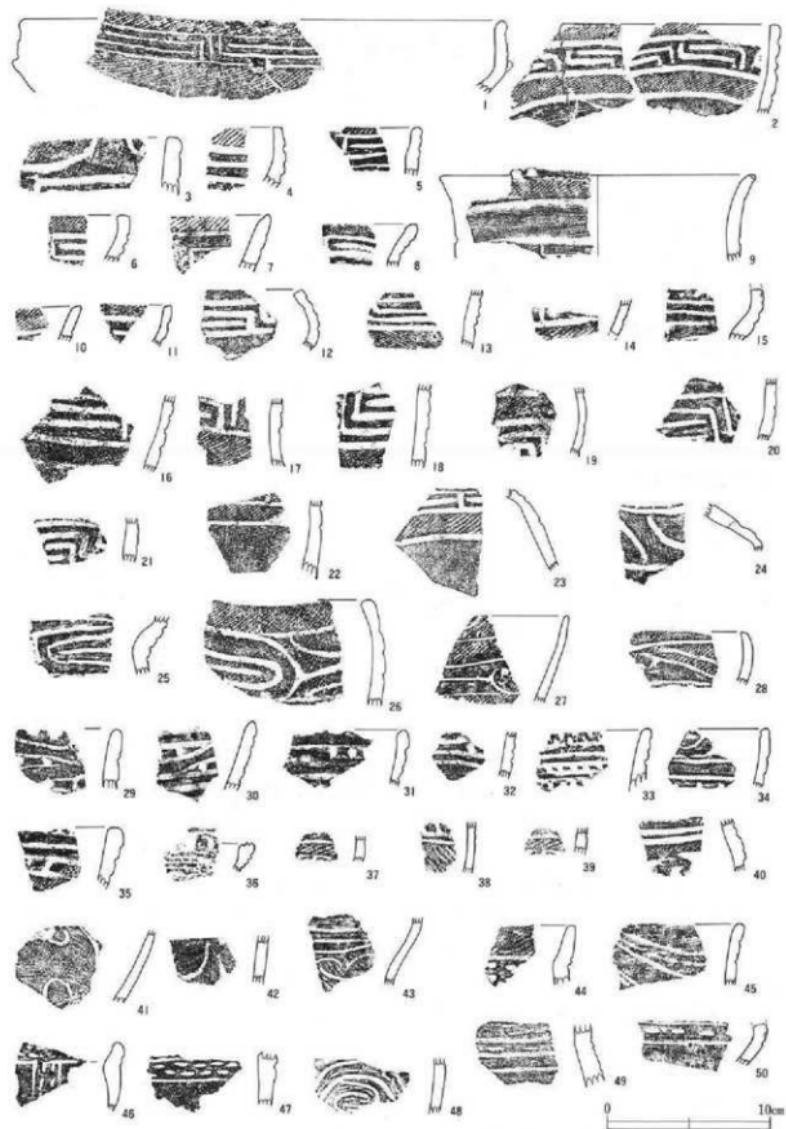
2類（第1図27~28）

沈線による玉抱三叉文の施文される大洞B式系のものである。

3類（第1図29~39）

羊齒状文またはその変化した文様の施文される大洞BC式系のものである。

29から32は、羊齒状文から変化した連続刺突文に類似していることから、3類のなかで型式学的な前後関



第1図 出土土器 1 (S = 1 / 3)

係の存在する可能性があり、4類の大洞C1式系に含めるべきかもしれない。

4類（第1図40～43）

磨り消し技法による雲形文などの施文される大洞C1式系のものである。

5類（第1図44～50・第2図1～9・第3図6・7）

沈線および列点文で文様施文をおこなうものであり、安行3bから3c式系のものである。

列点には、やや長めの刺突（第1図44から50）と円形の刺突（第2図1から9）との2種類が存在する。

第3図6と7は口唇部下に網文帯が施文され、その下部に沈線とやや反の刺突文の施文されるものである。7の口唇部上には刺突文が施文されている。

6類（第2図10～13）

磨消繩文手法により連続する弧状文の施文される安行3b式系のものである。

10は口唇部に突起を持つ高環である。11と13も10と同様の器形であろう。12では、蒂繩文の繩文部分が刺突文に置き換わっている。

7類（第2図14～22）

貼付け文等のあるものである。安行3bから3c式系のものと後期後半から晩期前半のものが含まれている。

14は4単位の波状口縁となる肩部の膨らむ鉢形土器である。貼付け文や文様は安行3c式であるが、本来刺突文である地文が繩文のままである。15から17も同様の位置づけであろう。

18から22は円形の貼付け文の中央を埋めたものである。18は4単位の波状口縁となる口縁部の内湾するキャリバー形の深体形上器である。波頂下には粘土粒の貼付けが認められ、波頂間には沈線により対弧文状の文様が施文されている。この文様は長野県人花遺跡2号住居例にもあるように後期後業から晩期前半に位置づけられるものであることから、18も同様の位置づけになろう。19は18と同様の貼付け文を持つが、地文にやや長めの刺突文が施文されていることから安行3bから3c式期に位置づけられよう。20から22は18や19と同様の貼付け文を持つものである。

8類（第2図23～33）

口縁部を中心に薄線を貼り付けるものいわゆる薄継文土器である。

27・29・30は波状口縁部であり、波頂間に陰線を弧状に施文するものである。

9類（第2図34～36）

三叉状入り組み文の施文されるもので北陸の中尾式と関係のあるものである。

34は波状口縁部の内面の波頂下に玉抱三爻文を施文し、肩部に入り組む三爻文状沈線文および三爻文の印刷文の施文されたものである。35と36も同様の施文手法を用いたものである。

10類（第3図1～5）

口縁部文様帶に沈線による対弧状文等の施文される清水天王山式系のものである。

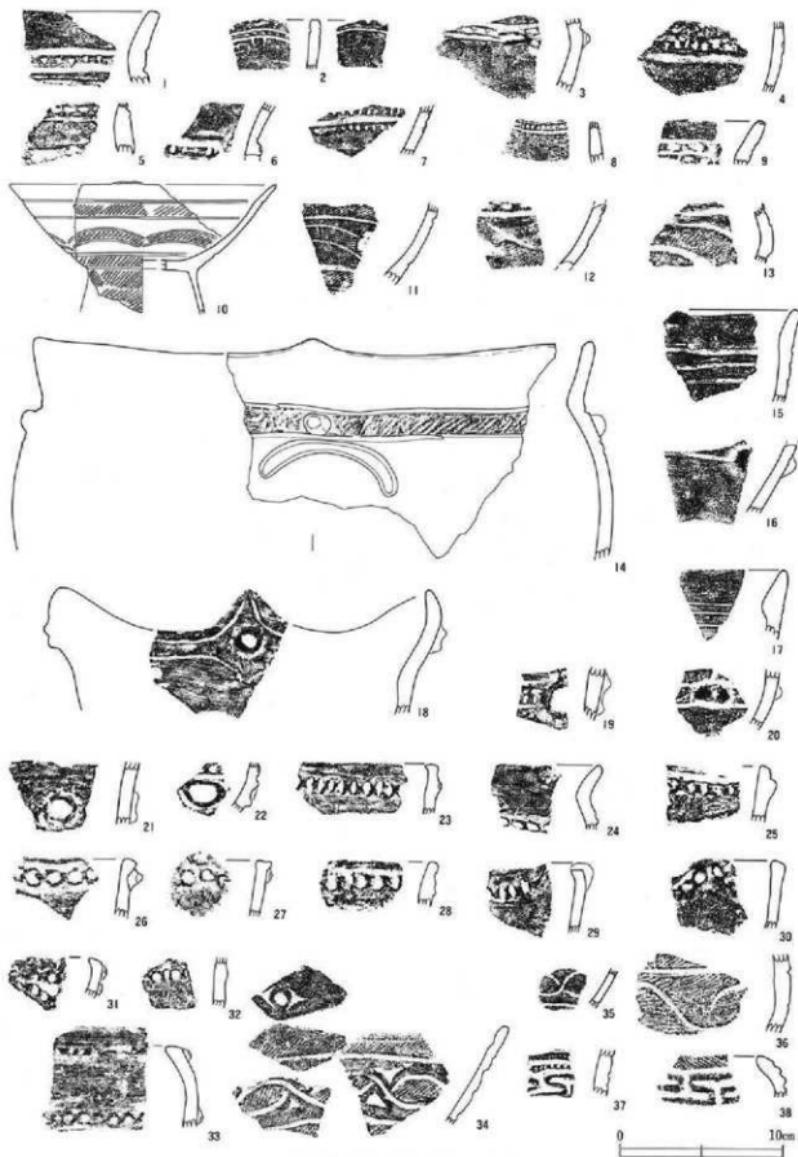
1・2は対弧状文が施文されたものであり、清水天王山式の中でも古い段階のものであろう。3～5はおそらく先端で入り組む長い沈線と考えられる。

11類（第3図8～16）

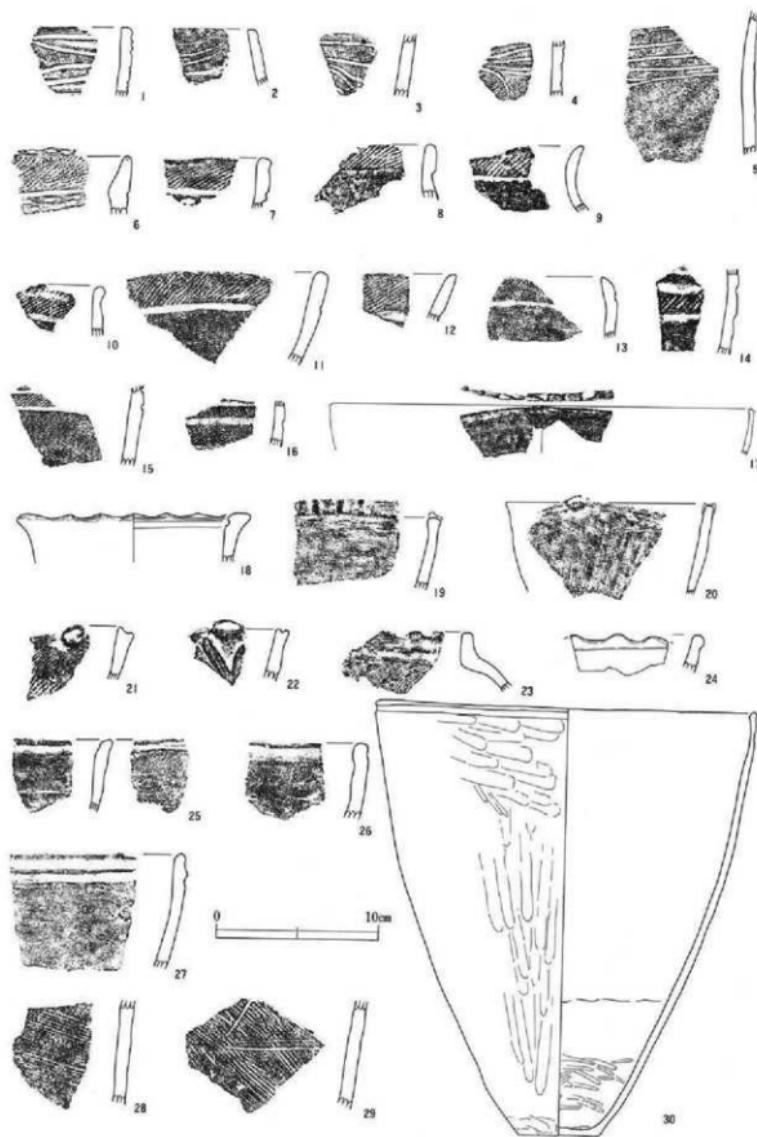
磨り消し技法による蒂繩文のみられるものである。

12類（第3図17～19）

口唇部上に文様の施文される（口外帶）ものである。



第2図 出土土器2 (S = 1/3)



第3図 出土土器3 (S = 1/3, 1/6 17・30)

17は隆線や印刻により三叉文が施文され、空白部に単節LR縦文が施文されている。18は12単位の波状口縁で波頂間の口唇部上を沈線が入り組み文状にめぐる。また、口唇部直下内面に横走する沈線が施文されている。19は隆線により直線的な文様が施文されている。

13類（第3図20～24）

口唇部上に突起の付されるものである。

20から22は口唇部上に円形の貼付け文の施文されたものである。貼付け文は5類の中で指摘した粘土粒の中央を埋めたものである。24・25は山形の突起の付されるものである。

14類

その他の晩期前半と考えらえるが小破片であるために分類が不可能なもの等である。

○II群 晩期後半に位置づけられるもの

1類（第2図7・38）

いわゆる粗大T字文の施文されるものである。

2類 浮線文系

3類 条痕文系（第3図28・29）

やや斜め方向に細かい条痕が認められる。29は稜妻状に沈線が縱方向に施文されたものである。

4類 口唇部直下に横走する沈線が施文されているものである（第3図25～27・30）

30は1号配石上坑内に埋設されていたものである。外面部付近は横方向のヘラナデ調整、調部上半から口縁部にかけては縦ミガキ調整後に横方向のヘラナデ調整がおこなわれている。内面は横方向のミガキおよびヘラナデ調整がおこなわれている。又、胴部下 $\frac{1}{3}$ の内面には、スス状の黒色付着物を観察できる。

○III群 I群およびII群に位置づけることのできない晩期の上器

1類 無文の口縁部である。8,600g出土している。

2類 無文の胴部である。106,030g出土している。

3類 底部である。11,760g出土している。

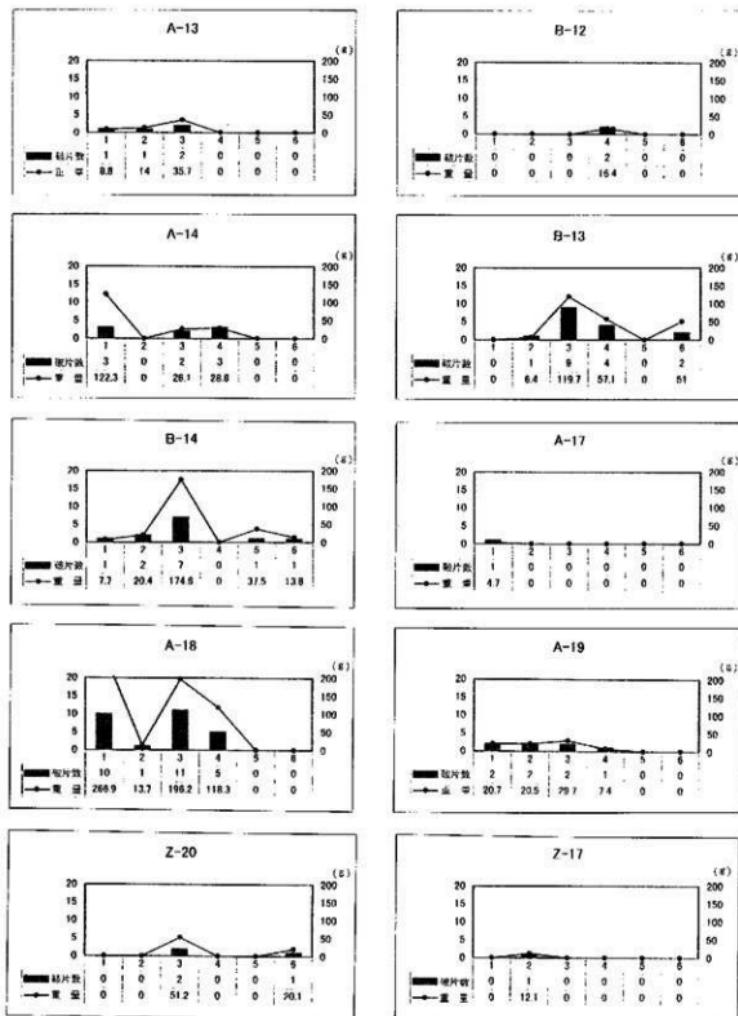
底面の調整等により3種別が可能である。網代底を有するもの、木葉底を有するものとそれらを有しないものである。網代底を有するものが主体であり、木葉底を有するものは非常にわずかであった。

2) 分類別重量・破片数（第4～6図）

ここでは、上記のように分類したものが、猫の額ほどの狭い調査範囲（第7図）ではあるが、遺跡内でどのように分布するかを示しました、総体としてはどのような系統組成かを重量および破片数をグラフ化することにより示しておく。なお、遺跡内における縄文時代晩期土器総重量は148,109gであり、III群とした無文の土器が126,390gに対し有文の土器は21,719gであり、その比は約6：1である。

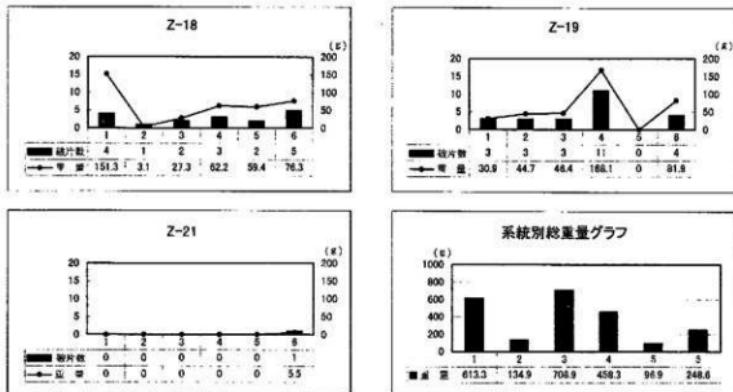
まず、遺跡内における縄文時代晩期土器総重量は148,109gであり、全体のグリッド別の重量であるが、第6図に示したグラフのように、遺跡調査範囲内の13～14ラインおよび17～20ラインの2ヶ所に分布の中心が存在する。この2ヶ所における分類上の組成の違いは認められない。しかし、17～20ラインには配石上坑群等の晩期の遺構が集中しているのに対して13～14ラインには晩期の遺構は皆無であり、この2ヶ所における晩期の利用形態の違いを反映している可能性がある。

次に有文土器片のグリッド・分類別の重量・破片数に関するグラフを示しておく。各グリッド共通して、I群とした土器群では、1類とした鏡の手文系と5・6・7類の安行3bから3c式系の占める割合が高く、

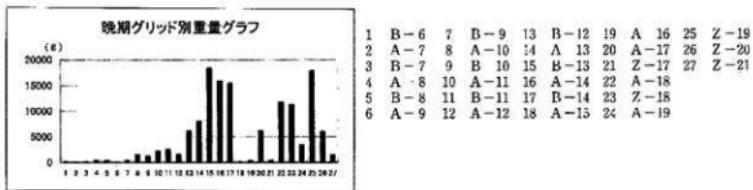


1 猿の手文系 4 中割高地系
2 大洞系 5 北壁系
3 安行系 6 清水大王山系

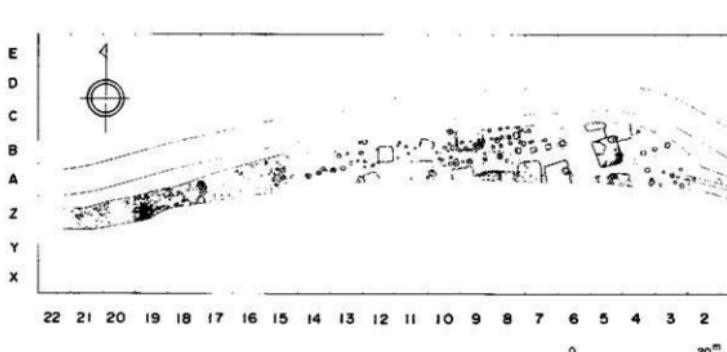
第4図 グリット毎分類別破片・重量グラフ(1)



第5図 グリッド毎分類別破片・重量グラフ(2)



第6図 晩期土器片総重量グラフ



第7図 三宮地遺跡遺構配置図

次に10類の清水天王山式系および8類の隆帶文系などの中部高地系がやや高く、これらに3・4類の大洞BCからC1式系や9類の中屋式系(北陸系)のものなどが伴うといった形で構成されている。また、I群2類とした大洞B式系は非常に少いものの、7類の18などを考え合わせれば、三宮地遺跡においてこの段階にすでに生活活動がおこなわれ始めたといえよう。

II群とした土器群では、各グリッドともに非常に少なく、特にII群2類とした浮線文系は皆無に等しい。三宮地遺跡内において浮線文期に土器を伴うような生活活動等が積極的には行われていなかったことを反映したのであろう。

まとめ

以上のように調査区から出土した資料の多くは無文であるが、有文の資料の分析から以下のことを指摘することが可能である。

- 1 安行3b～3c式・大洞BC式期の土器が中心に出土し、安行系(関東系)・大洞系(東北系)・中部高地系・北陸系・鍵の手文系・清水天王山式系のものが混在している。出土資料の系統別の割合は、鍵の手文系がやや高く、それに他の系統の土器が共伴している状況である。このような状況は、中谷遺跡第1遺物集中区(長沢1996)において、清水天王山式および「鍵の手文」系が大量に、「中屋式」系が若干出土し、明確な安行式・大洞式が出土していないことと対照的である。また、金生遺跡(新津1989・1994)とは、時間的な軸は異く異なるものの系統別の出土量の様相は非常に類似している。このようなことから三宮地遺跡は、その所在地が示すとおり八ヶ岳周辺の同時期の遺跡と類似していることを指摘できる。しかし、時間的な軸の違いから遺跡の経緯期間には違がある。
- 1 山梨県内では晩期の遺跡は多数確認され調査・研究(小野1977・1986、奈良1981・1986、新津1989・1994、長沢1996)が行われているが、いずれも層位学的な資料は乏しい。このような中で、三宮地遺跡では、前述のとおり安行3b～3c式・大洞BC～C1式期には限定されており、遺構に伴う資料は厳密には、少ないものの当概期の一括資料として扱うことが可能である。
- 1 「分類別重量・破片数」で述べたことと重複するが、遺構(土坑群)・遺物集中部と遺物集中部の間に存在する約10mの空白が存在することである。道路幅の調査であり、これをもってして三宮地遺跡の晩期前半の集落様相を語るわけにはいかないだろうが、遺物・遺構の伴わない空間というものが晩期前半の集落の中に存在した可能性がある。

本稿では三宮地遺跡出土の縄文時代晩期の上器を紹介することに主眼を置き、大きく系統分類し、その破片数および重量の提示をおこなった。これにより既に述べたように、三宮地遺跡の晩期前半には遺構・遺物集中部・遺物集中部及び空白部があるといったことを指摘し得た。また、系統組成を破片数または重量で提示は、これまでの感覚的な地域性等を客観的なものとして捉えることが可能であるとともに、他遺跡との比較が容易であろうという視点から試みたものである。当然のことではあるが、分類等の視点が異なれば組成比も変化するであろうが、一つの客観的なデータとして扱えるのではないだろうか。しかし、三宮地遺跡は上器だけでなく、土製品、石器や配石土坑などの遺構をはじめとする様々な要素の集合体であることは言うまでもない。このような他の様相の分析をおこなってはじめて三宮地遺跡を理解できるのであろうが、そのことに関しては別の機会に譲りたい。

遺跡の調査時および本稿を作成するにあたり以下の方々からご助言をいただきました。秋山圭子氏、今福

利恵氏、小野正文氏、橋原功一氏、小宮山隆氏、佐野降氏、中沢道彦氏、新津健氏、林克彦氏、三田村美彦氏、山下孝司氏。筆者の力量不足からご助言を十二分に生かしきれなかったことをお詫びするとともに、感謝する次第です。

註

- (1) 三宮地遺跡の所在地等は、本書の「遺跡述報」に掲載してあるのであわせてご参照ください。
- (2) 15~16ラインでは出土土器片が極端に少ないので、このような状況は黒曜石製の剝片等の石器も同様である。また、この範囲に晚期の包含層を削平するような後世の遺構等は調査時には確認しておらず、晚期において有意な空白範囲であることは確かである。
- (3) グラフでは第1群の中で分類したものを次のように統合して示した。1類=「縹の手文系」、3・4類=「大溝式系」、5~7類=「安行式系」、8・12類=「中部高地系」、9類=「北陸系」、10類=「清水天王山式系」である。2・11・13・14類は三宮地遺跡の土体となる時期と異なることや時期の判定が困難であることから省略した。
- (4) 「遺跡述報」の中で出土状況の写真を掲載してあるのでご参照ください。

引用・参考文献

- 小野正文 1977 「清水天王山式土器について」『丘陵』3・4 平妻丘陵考古学研究会
小野正文・奈良泰史 1986 「清水天王山土器様式」『縄文土器大観』
新津 健 1994 「金生遺跡出土の土器2(晚期)」『研究紀要』10山梨県立考古博物館
新津 健 1989 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告書第41集「金生遺跡」(縄文時代編) 山梨県教育委員会
百瀬長秀 1992 「長野県の概況」『縄文時代晚期の諸問題』縄文セミナーの会
重久洋・ 1985 「雷文土器の研究」『古代探査II』早稲田大学出版部
高嶋勝善 1983 「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会
中沢道彦 1998 「縄文文化の終焉-晚期」『御代出町誌』歴史編上、御代田町史刊行会
長沢弘昌・茅原みゆき 1996 山梨県埋蔵文化財センター・調査報告書第116集「中谷遺跡」山梨県教育委員会
永井光一 1967 長野県考古学会研究報告書3「佐野」長野県考古学会
奈良 泰 1981 「中谷・宮島遺跡」都留市教育委員会
平野修・橋原功一・山下孝司 1992 「宮ノ前遺跡」並崎市演習調査会
山下孝司・間間俊明・秋山土子 1998 「三宮地遺跡」並崎市教育委員会
小宮山隆 1997 「長坂上条遺跡」長坂町教育委員会

II 発掘調査速報

1. 坂井遺跡 (村ノ前地区・茅林地区・天神前地区)

所在地 芦崎市蘿井町坂井村ノ前

同 坂井茅林

同 坂井天神前

調査原因 送電線整備

調査期間 平成9年10月1日～平成10年1月8日

調査面積 120m² × 3 地区

調査主体 芦崎市遺跡調査会

担当者 山下孝司・間間後明・秋山圭子



遺跡の概要

地区毎にその概要を述べていく。尚、遺跡位置図の南から村ノ前地区、茅林地区、天神前地区である。

・村ノ前地区

村ノ前地区は、沢に挟まれた標高455m前後の台地上にあり、志村龍藏氏の調査した第1・2・3地区の南東部分に当たる。志村龍藏氏はこの3調査区の中で13軒の住居跡および2基の土坑を確認している。報告書『坂井』から判断した時期毎の住居は、勝坂式前半期(洛沢式期)がト号の1軒、曾利式前半期がヘ・リ・チ・ワ・オ号の5軒、曾利式後半期がイ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヌ・ル号の7軒である。また、ロ号の北側で確認された2基の土坑は曾利式後半期である(第1図)。今回の調査では14基の土坑を確認したが、何れも中期後半(曾利式)のものであり、志村氏の調査された造構の時期とはほぼ同時期であることがわかる。また、台地の地形を考慮すると、第1・2・3地区および今回の調査区は1つの集落跡の一部であることは容易に想定でき、今回の調査区の南側は坂井南遺跡として広大な面積がこれまでに調査され、その結果縄文時代中期の土坑が数基のみで居住活動痕跡は非常に薄いことが明らかになっており、集落跡としての南端が今回の調査で明確になったといえよう。おそらく直径150m前後のいわゆる環状集落跡と考えられ、その中で今回の土坑群は環状の外縁近くに作られたものである。



第1図 坂井遺跡村ノ前地区造構配置図 (1/2,500, 1/500)

・茅林地区

茅林地区からは2基の周溝墓とそれに共伴する土器が出土している。出土した壺は、頸部の屈曲が少なく胸部最大径が下半にあり、刷毛調整後に粗い磨きが施されている点から、弥生時代末期に位置づけられよう。

・天神前地区

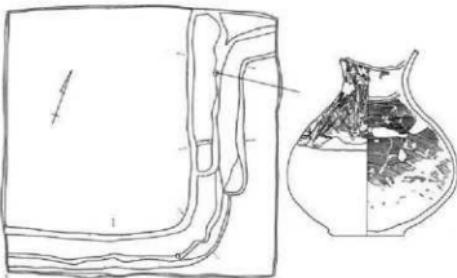
天神前地区は志村庵藏氏の調査により諸磯b式期を中心とする遺跡であることか知られていた。今回の調査においては、弥生時代終末の竪穴住居跡1軒（1号住居跡）、绳文時代前期中葉の竪穴住居跡1軒（2号住居跡）、前期後葉の集石土坑1基、中期後葉の土坑等を確認し調査を行った。

弥生時代終末の1号住居跡からはこの時期に特徴的なS字状口縁甕が全くなく、特異なセット関係である。绳文時代では、前期後半（諸磯b式）に位置付けられる遺物が構内及び包含層から出土している。しかし、胎土に纖維を含むような明らかに前期中葉に位置付けられる土器及びそれに共伴するであろう石器が出土している。特に、2号住居跡からは床面から下層にかけて前期中葉の遺物が出土している。また、同住居には固定式石皿が床面にはば接して住居の南北軸に3点並んだ状態で出土している（第3図）。 （閑間）

参考文献

志村庵藏 1965『坂井』地方書院

山下孝司・閑間俊明・秋山圭子 1998 『坂井遺跡（村ノ前・茅林・天神前地区）』 菊崎市教育委員会



第2図 茅林地区全体図及び出土土器（S = 1/180, 1/6）

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

—

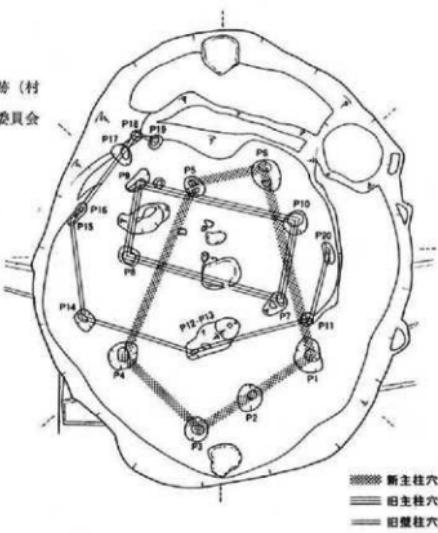
—

—

—

—

—



第3図 2号竪穴住居跡、平面図（1/60）

2. 三宮地遺跡

所在地 茂崎市藤井町北下条字三宮地
調査原因 市道拡幅工事
調査期間 平成9年5月27日～平成10年2月13日
(中断含む)
調査面積 1,000m²
調査主体 茂崎市遺跡調査会
担当者 山下孝司・間間俊明・秋山圭子



遺跡の概要

三宮地遺跡は、塩川右岸の河岸段丘上「藤井平」の西を七里岩に沿って流れる黒沢川の近くの微高地に所在する。周辺では、火雨塚古墳、後田堂の前遺跡、坂井堂ノ前遺跡などの古墳時代から平安時代の遺跡や、縄文時代の配石造構や土偶の出土した後田遺跡などが調査されている。道路の拡幅ということで幅5m弱の調査区であったが、今回の調査で奈良・平安時代の竪穴住居跡14軒、掘立柱建物跡4棟、弥生時代前期末の条痕文系の土器や縄文時代中期前葉の竪穴住居跡1軒、晚期前葉～後葉の配石造構・土坑など多数の遺構・遺物を確認し調査した。藤井平ではこれまで縄文時代晚期前葉は、造構・遺物がまとまって出土しておらず、空白の時期であったが今回の調査でその空白期を埋めることができたことは非常に重要である。ここでは、縄文時代晚期の特徴的な遺構について簡単に触れておくこととする。

・3号土坑

晩期の造構・遺物が集中する範囲の東端近くで検出したものである。長軸390cm、短軸230cm、深さ60cm前後(確認面から)の長楕円形の形状である。土坑内には30~40cmの被熱した礫が北壁から坑内中央部に向かって出土した。これらの礫と土坑底面の間に皮付きのトチの実が加熱によって炭化した状態でまとまって出土した。トチの実はサボニンなどのアクリル酸成分が強く水さらし等のアクリル酸をしなければ食用できないことはよく知られていることである。しかし、今回の場合は、皮付きのまま熱を受けており(皮だけを焼くトチ添とも異なる)、従来の食料加工工程には、あてはめにくい。また、土坑底面に燃焼面があるが、トチの実とやや離れており、直接トチの実を燃やしたものと考えにくい。どのような機能をこの土坑が持つか、今後検討していく必要がある。なお、炭化したトチの実の放射性炭素年代測定を行ったところ、 2700 ± 100 yrBPという測定結果が出ている。

・1号配石土坑

配石土坑群の西部分に作られたものである。土坑上面には50cm前後のやや大型の礫が楕円形に巡らされている。これらの礫は土坑内が埋没した後に配されたことが断面観察から分かる。土坑内底面にはほぼ接する状態で、大形の粗製鉢をほぼ半分にしたもののが、口縁を東側に向けてややすらして重ねて埋設されていた。

(問間)

参考文献

新山雅広・山形秀樹 1988 「茂崎市三宮地遺跡の自然科学分析」「三宮地遺跡」 茂崎市遺跡調査会

山下孝司・間間俊明・秋山圭子 1998 「三宮地遺跡」 茂崎市遺跡調査会



写真1 3号土坑



写真2 3号土坑完掘状況

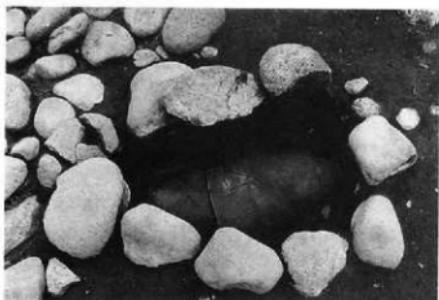
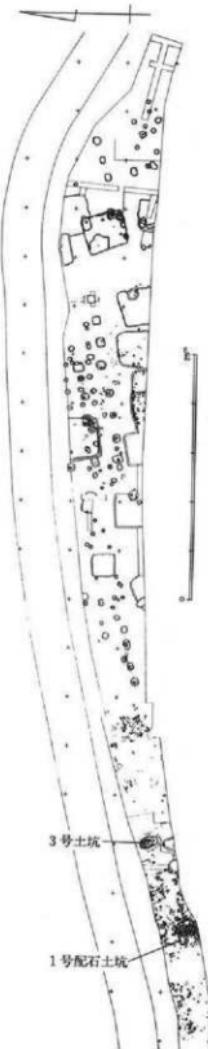


写真3 1号配石土坑



三官遺跡遺構配置図

3. 石之坪遺跡

所在地 茂崎市円野町上円井

調査原因 円野地区圃場整備に伴う事前調査

調査期間 平成9年5月30日～12月10日

調査面積 4,000m²（約20,000m²）

調査主体 茂崎市教育委員会

担当者 関間俊明



遺跡の概要

石之坪遺跡は、山梨県茂崎市円野町上円井に所在し、北に八ヶ岳、南に富士山、西に南アルプス、東に釜無川・七里岩を望むことのできる、標高450m前後の台地の張り出したいわゆる舌状台地上に存在している。

今回の調査は、県営圃場整備事業の事前調査として行っており、発掘予定面積は約20,000m²で、4カ月計画で実施している。1996年から調査を開始しており、これまでに約8,000m²の野外調査を終了した。約85軒の住居跡（縄文時代約55軒、平安時代約30軒）、土坑100基以上、十数基の屋外埋甕などを確認し調査した。以下にこれまでに調査した縄文時代の遺構・遺物に関して時期毎に述べていく。なお、整理作業を本格的に行っていないため今後訂正等があることを承知願いたい。

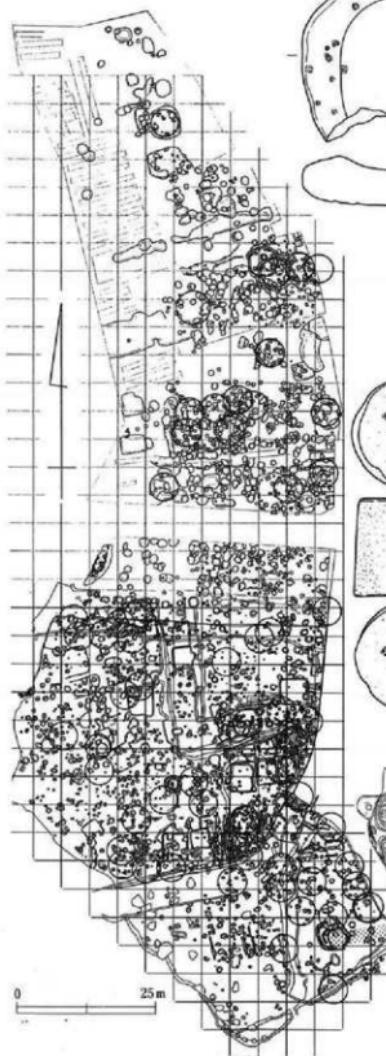
早期後半の条痕文系土器が数片出土しているが、遺構等は確認しておらずこの時期には本格的な居住活動が行われていなかったものと考えられる。

前期に入ると後半の諸磯C式期まで遺構・遺物ともに現在のところ確認していない。諸磯C式期には若干の竪穴住居跡を確認し、ある程度まとまって遺物も出土している。しかし、次の時期である十三菩提式期の遺構・遺物は確認されておらず、居住活動が一時的に中断したものと想定できる。

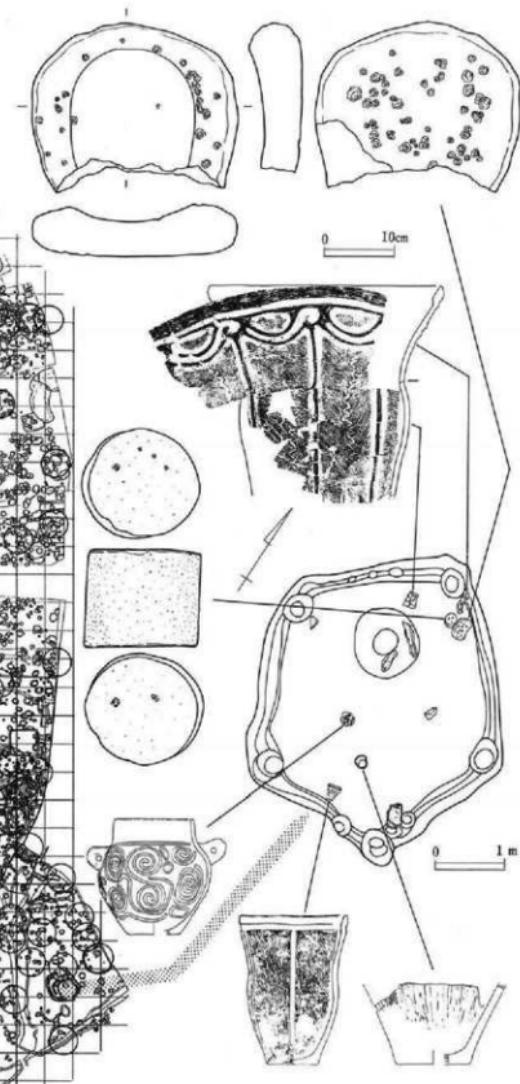
中期に入ると初頭の五領ヶ台式期の竪穴住居跡が数軒確認されている。前葉から中葉の勝坂式期には竪穴住居跡とともに土坑（墓壙・貯藏穴）・屋外埋甕等の遺構を確認している。後葉の曾利式期には多数の竪穴住居跡とともに土坑（墓壙・貯藏穴）・屋外埋甕等の遺構を確認している。第2図の38号竪穴住居跡は遺跡内でも数少ない遺存の良好な曾利式期の住居であり、住居廃絶時に住居内に存在していた道具がまとまって出土している。特に北西壁際の破損した石皿・輪切りしたような石棒と深鉢形土器の胴部上半が組み合わさって置かれている状況は非常に面白い。曾利式期に特に活発な居住活動が行われ、その結果としていわゆる「環状聚落」を形成したのであろう。

後期に入ると竪穴住居跡の数は前時期と比較して激減する。初頭の称名寺式期の柄鏡形敷石住居跡が1軒確認されているのみである。その他に堀ノ内式期の土坑が数基確認されている。後期後半から晩期前半までは遺構・遺物ともに確認していない。晩期終末の浮線文系土器がまとまって出土しているが遺構は確認していない。

以上のように石之坪遺跡は、縄文時代継続的に居住活動が行われていたことをほぼ把握できた。しかし、どのような居住活動の行われた結果として、遺跡が形成されたかは、今後の野外調査及び整理作業を待たなければならない。



石之坪道路遗构配置图



38号竖穴住居床面遗物出土状况图



38号竪穴住居跡



石棒・石皿等出土状況



28T-SD 1 遺物出土状況



27P-SDA 遺物出土状況



95号竪穴住居跡
柄鏡型の住居で、柄部には配石が見られます。

4. 東向・長坂遺跡

所在地 須玉町東向

調査原因 県営圃場整備事業

調査期間 1997年8月

調査面積 10,000m²

調査主体 須玉町教育委員会

担当者 山路恭之助



調査の経過

東向・長坂遺跡は、斑山南麓の中尾を過ぎ、東向の集落へ向かう県道増富・若神子線に沿い、塩川右岸の中位河岸段丘上に立地する。塩川に沿って東から西へ雑段状に造成された田の比高差は8mで、県道と調査区中央の比高差は12m、調査区中央と塩川とでは14mが測られる。昨年12月に調査面積約10,000m²に試掘坑を35ヶ所設定し、遺物遺構の確認を行った結果、縄文を地文とした深鉢の小片、黒曜石剝片、平安時代の甲斐型カメの細片、口縁部や頸部片、中世の綠釉陶器片等、10ヶ所の試掘坑からの遺物を検出した。本調査の結果、石列1、暗渠1、長方形竪穴遺構2が検出された。

遺構と遺物

石列

調査区域の最北端で検出され、平面形は鍵状で地境によって全体の1/3が遺存していた。鍵状の石列の短辺は4.7m、長辺(南北)は10.4mを測り、幅50cmに河原石を並列し、長辺の一部は二段重ねであった。鍵状の石列の内側は大小の礫で埋まる中に、3ヶ所だけ放射状に石を並べた石組みが認められる。

暗渠

石列が暗渠の末端を切る状態で検出された。石列が検出されたエリアを北東から南西へ設けられた暗渠で長さ15.5m、蓋石の幅は40cmで南西隅を石列で切られている。水路は幅10cmで深さ5~6cmと浅い。

長方形竪穴遺構

No.1は石列遺構が検出された田から一段下がった南の田から検出された遺構で、長軸4.85m、短軸1.3mの隅丸長方形を呈し、床から約20cmの厚さに炭化物と黒色土が堆積し、これを除いた床面は軟弱な褐色土で赤色の焼土と灰のブロックもある。遺構の前後部は舟底状で壁は外反する。出土遺物は無文の深鉢口縁部片がある。この遺構は東向大木田遺跡から検出されたものと酷似するが、炭焼跡かは不明である。No.2は調査区域南端に近い地点からの遺構で、長軸3.2m、短軸1.5mを測り、掘り込みは平均8cmと浅い。長軸の東壁中央に焼土が認められ、炭焼跡とすれば煙道出口であろうか。遺物は西隅床面上から内耳土器片が出土した。

今回の調査では出土した遺物は、縄文時代前期の諸磯B式から中期末の曾利式土器片、平安時代から中世にかけての土器片、黒曜石製の石鏃1点などがある。塩川沿いの崖上の狭い傾斜地を雑壇状に耕作地として造成した段階で、出土した遺物に伴う遺構は破壊、消滅したものと思われる。

5. 堀下西遺跡

所在地 須玉町大豆生田

調査原因 団体営園場整備事業

調査期間 1997年12月～1998年3月

調査面積 1,080m²

調査主体 須玉町教育委員会

担当者 山路恭之助



調査の経過

堀下西遺跡は、須玉川左岸の低位河岸段丘上にあって、遺跡に沿って南北に国道141号線が走る。調査区域の中央、地番1799の標高は489mで、調査区全体の標高差は5mを測る。塩川との比高差は4mである。園場整備事業対象区域は約15,000m²であるが、造成工事予定の関係から遺構、遺物を包含する密度が濃い区域に調査範囲を絞った。地番799の180m²と地番1659-1他の約900m²に5mグリッドを設定して精査を進めた。

遺構と遺物

集石遺構

地番1799の東端から南西へ、北側で10m、南で14mの幅に帯状の集石を検出した。周囲に露出する礫は自然堆積によるものもあるが、集石の一部は段状の石積みが意図的になされている可能性がある。1号集石は、地番1799の中央にあり、直径80cmの円内に長さ30cmから10cm位までの河原石が確認面から30cmの深さまで積み重なっていた。下部の掘り込み等は認められず、更に大きな礫が存在する。2号集石は1号集石の付近にあり、1号集石が主に安山岩と一部花崗岩から構成されるのに対して、2号集石は粘板岩から構成されるという違いがある。90cmの円形内に、大小の碎石を小さな丸い河原石の上に40cm積み重ねている。1号と同様に下部の掘り込み等は認められない。

遺物

出土遺物は、細かい土器片がほとんどで、縄文時代から弥生、平安時代、中世から近世にわたる。他に打製石斧、刀子、古鏡などが出土した。S字状口縁をもつ古墳時代前期の甕も出土し、本町の発掘調査では初見例である。また刷毛目状擦痕や太めの条痕が施された粗製土器などは、縄文時代晩期終末のものと考察される。

6. 桑森遺跡

所在地 明野村上手4838-1ほか

調査原因 農地転作

調査期間 1997年4月17日～1998年3月27日

遺跡位置図 1/25,000「若神子」

調査面積 1,100m²

担当者 佐野 隆



遺跡の立地と経歴

明野村は緩やかに西に傾斜する茅ヶ岳山麓に位置し、湯沢川、柄沢川、正樂寺川など西流する小河川によって沢地形と尾根地形とに開析されている。桑森遺跡は、柄沢川南の広い尾根上に位置する。標高は520mである。

桑森遺跡は、平成6年度に桑抜根にともない一部農地で発掘調査が実施され、縄文時代中期中葉の遺物と平安時代の住居跡数軒、中世以降と思われる土坑10基ほどが検出されている。平成5年度には、遺跡より100mほど西側まで県営圃場整備事業が実施されているが、その際の試掘調査では遺物遺構は検出されていない。

平成9年度における桑森遺跡の発掘調査は、桑畠二筆分、面積1,100m²のうち600m²で実施し、平成10年度に継続調査を計画している。平成9年度に検出された遺構は縄文時代中期初頭の住居跡6軒以上、縄文時代中期後半の住居1軒、土坑数基、平安時代の住居1軒、土坑3基、中世以降と思われる溝状遺構1条である。

遺跡の概要

縄文時代中期初頭の住居跡はいずれも五箇台式の埋設土器をともなう地床炉を備え、梢円形もしくは隅丸方形の掘り込みをもつ。主柱穴は規則正しい配列が認められないが3～7本程度で、壁際には小ビットがならぶ住居もみられる。検出された住居のうち、平面形が明瞭に確認できるのは1軒のみで、ほかは相互に重複しているため、平面形、柱穴本数とともに定かではない。そのため、住居軒数は検出された6基の地床炉と埋設土器、および柱穴と思われるビットの配列から想定している。土坑は数基が検出されている。

平安時代の住居は方形の平面形で南東壁にカマドをもつ。カマドの燃焼部には、土師器皿二枚が口縁を合わせて上下に重ねられて埋納されていた。なにがしかのカマド祭祀を思わせる。合わせた土師器皿内部には土が入っていただけで遺物は出土していない。土坑は3基が検出されている。土坑の直径は1m、深さは1.4mで、一抱えほどある砾が覆土中層より検出されている。

中世以降と思われる溝状遺構は、平安時代住居を切って掘り込まれている。幅1m、深さ40cmほどで、断面形はV字状である。現在の地籍境界には沿っているが、その性格は分からぬ。遺物は出土していない。

調査の成果

本年度の調査は僅かな面積にとどまったため、遺跡の全体像を推測するには至らない。本年度調査部での成果を敢えて挙げるならば、次の三点であろうか。

第一は明野村内で確認されていなかった五箇台式期の聚落が発見された点である。茅ヶ岳山麓南端の双葉町内では唐松遺跡において、当該期の住居2軒が検出されているが、明野村内では上手北組地内の屋敷添遺跡で埋設土器数基が検出されているのみであった。桑森遺跡と屋敷添遺跡は1kmほどを隔てるのみで、と

にも塩川に面する山麓西端に位置する。

第二は、当該期の住居と埋設土器の関係についての示唆が得られた点である。北巨摩郡内では大泉村天神遺跡^{註1)}、双葉町唐松遺跡^{註2)}などの当該期遺跡において、輪郭が不規則かつ不明瞭な住居とされる遺構内に、複数の埋設土器と焼土が検出された場合、おそらく複数の住居あるいは複数期の居住期がほぼ同一地点で重複しているだろうという予想はあったものの、その検証が困難であった。しかし、本調査では住居と認定した6軒の遺構のうち、5軒は重複し合い単にプランのみをみると前二遺跡と同様であるが、想定される住居軒数に見合うだけの円形に配された柱穴ピットが同時に検出され、かつ覆土も耕作で不明瞭ながらも遺構間の重複関係を確認するに充分であった。そうした状況から住居軒数と地床炉・埋設土器数がほぼ一対一関係であることが想定しうる。

第三は、上記の住居軒数の認識法を前提とした場合、当該期には類縁に住居の廃棄と新設が繰り返されていた可能性が高いと示唆される点である。わずか10m四方から6軒の住居が集中して検出される現象は、ごく短期間に、廃棄住居の位置が明確に認識されている時点で次々と住居の新設が繰り返されたことによって説明され得る。また、繰り返し住居を新設した人々は同一の集団であったか、住居を建設する位置を伝達しあえる関係にある集団であった可能性が高いだろう。前期末から中期初頭にかけての遺跡の在り方が大きく変化する時期を、どのように解釈するかに重要な視点を加える成果であろう。

上記の調査に関する記録、出土遺物は明野村教育委員会が保管している。

註1 新津 健ほか 1994 「天神遺跡」 山梨県教育委員会

註2 五味信吾ほか 1996 「唐松遺跡」 山梨県教育委員会



桑森遺跡遠景（北方より）



桑森遺跡近景（7軒以上の住居が検出されている）



縄文時代中期初頭の住居（6号住居）



平安時代住居カマドから出土した土師器皿

7. 宮の前遺跡

所在地 高根町藏原字宮の前1703-1番地外

調査原因 市民農園施設整備事業

調査期間 平成9年6月4日～平成9年10月8日

調査面積 8,800m²

調査主体 高根町教育委員会

担当者 雨宮正樹



当遺跡は、八ヶ岳南麓の縦やかに南に開けた比較的幅広の屋根状の台地上に位置する。この台地の東側と西側は高原独特の地形として深く切れ込んだ比高差約10mを測る沢があり、この沢は町内でも有数の穀倉地帯の一つとして数えられる。

この地域は、古くから遺跡の所在地としてしられており、昭和61年に高根町教育委員会が行った遺跡分布調査によれば、宮の前B遺跡として比較的広範囲に広がる縄文時代中期・後期の遺跡として周知されていた。

この地区に市民農園として整備されることにより平成9年2月4日から平成9年2月6日まで詳細分布調査を行い縄文時代中期の大規模な遺跡として確認された。

試掘調査は整備地域全体を対象としていたが、約半分が調査できなかった。調査方法は、重機により一定の幅を開けて東西にトレーナ形式で行った。その結果試掘調査を行ったすべてから、量の差異はあるものの遺構・遺物が確認することができた。のことから現状変更がされるところを中心に発掘調査を行った。調査したヶ所は、本館・倉庫・駐車場等の8ヶ所であった。以降に調査ヶ所ごとに説明していきたい。

本館部分

検出された遺構は、縄文時代中期の住居址2軒、縄文時代中期の土坑1基、時期不明の土坑およびピットを60基検出。住居址が検出された所は本館予定地内の北と西の隅からで、その内の北から確認された1軒は試掘調査により確認されたものである。

・器具庫部分

検出された遺構は、時期不明の土坑19基を検出。

・屋外トイレ1部分

検出された遺構は、縄文時代中期の住居址1軒、時期不明の土坑4基の5遺構である。

・屋外トイレ2部分

検出された遺構は、縄文時代中期の住居址2軒である。

・簡易宿泊施設1部分

検出された遺構は、比較的幅が広く深さがある溝1条と土坑5基を検出。

・簡易宿泊施設2部分

検出された遺構は、比較的幅が広く深さがある溝1条を検出。

・簡易宿泊施設3部分

検出された遺構は、時期不明の土坑およびピットを43基検出。

・駐車場部分

検出された遺構は、時期不明の土坑墓基およびピットを70基と掘建柱建物1棟を検出。以上8ヵ所より209遺構が確認されたが、以下に確認された住居址と土器が埋納されていた土坑について説明したい。

第1号住居址

本館部分の北東部より検出された住居址であり、平面プランは短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈する。周溝は南の出入口と思われる部分を除き全周する。遺構確認面は、現地表面より20cmほど下げた時点での確認され、確認面から床面までの深さは約40cmを測り、依存状況は非常に良好であった。遺物の出土状況は住居址中心部より出土し比較的高い位置から床面まで断続的に出土しているが、密集した出土状況ではなかった。住居内のほぼ中心部より埋甕炉が出土し、この土器によれば終沢期と思われる。

第2号住居址

本館部分の南西部より検出された住居址であり、平面プランは短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈する。周溝は南の出入口と思われる部分を除き全周する。遺構確認面は、現地表面より20cmほど下げた時点での確認され、確認面から床面までの深さは約40cmを測り、依存状況は非常に良好であった。遺物の出土状況は住居址中心部より出土し比較的高い位置から床面まで断続的に出土し、密集した出土状況であった。住居内のほぼ中心部より埋甕炉が出土し、この土器によれば終沢期と思われる。

第3号住居址

倉庫部分の北東部より検出された住居址であり、平面プランは短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈すると思われる。東側半分は、調査区域外に広がるため不明である。遺構確認面は、現地表面より20cmほど下げた時点での確認され、確認面から床面までの深さは約5cmを測り、依存状況は不良であり、遺物の出土状況は住居址内全体より散在した状況で出土している。このことは、耕作による影響と思われる。

第4号住居址

倉庫部分の南東部より検出された住居址であり、平面プランは短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈すると思われる。東側半分は、調査区域外に広がるため不明である。遺構確認面は、現地表面より20cmほど下げた時点での確認され、確認面から床面までの深さは約5cmを測り、依存状況は不良であり、遺物の出土はごくわずかであった。このことは、耕作による影響と以前ここに水車小屋があり、その時の掘削によるものと思われる。

第5号住居址

器具庫部分の北西部より検出された住居址であり、平面プランは直径約5mを測る円形を呈する。遺構確認面は、現地表面より20cmほど下げた時点での確認され、確認面から床面までの深さは約5cmを測り、依存状況は不良であり、遺物の出土はごくわずかであった。住居内のほぼ中心部より右囲い炉が検出されている。

第1号土坑

本館部分の南東部より検出され、内部より底を欠いた土器には完形の小型深鉢1点と比較的大きい土器の破片が折り重なるように出土している。土坑の大きさは、直径90cm、深さは遺構確認面より80cmを測る。

出土した土器は、曾利III式である。

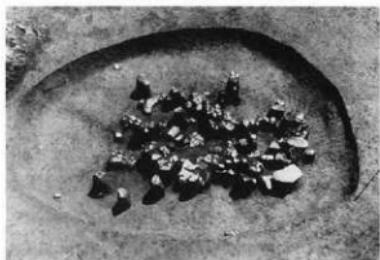
以上のとおりごく簡単に遺跡の内容を記述したが、整理作業の途中であり、詳細については随時報告していきたい。



宮の前遺跡第1号住居出土状況



宮の前遺跡第1号住居完掘状況



宮の前遺跡第2号住居出土状況



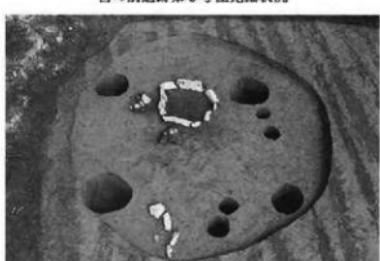
宮の前遺跡第2号住居完掘状況



宮の前遺跡第3号住居完掘状況



宮の前遺跡第4号住居完掘状況



宮の前遺跡第5号住居出土状況



宮の前遺跡第1号土壙遺物出土状況

8. 宮久保遺跡

所在地 長坂町塚川

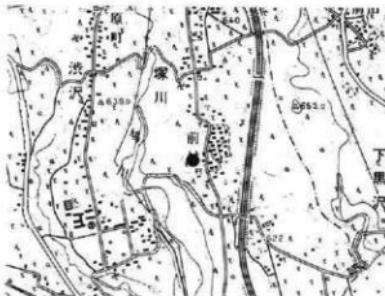
調査原因 塚川団体営圃場整備事業

調査期間 1997年5月13日～9月27日

調査面積 約1,500m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 小宮山隆・村松佳幸



宮久保遺跡は県立嶽北農業高等学校の北東約0.6kmの地点、塚川左岸の段丘上に位置する。すぐ近くに諏訪神社があり、諏訪神社のある微高地とその西側の台地に挟まれた谷部が圃場整備されるため、それに先立ち発掘調査を実施した。試掘を行った結果谷部の西側に遺物と遺構が発見されたので、そこに調査区を設定した。調査面積は約1,500m²で、標高は約620mである。

発見された遺構は縄文時代後期の敷石住居跡2軒、弧状の配石遺構1基・埋設土器1基、平安時代の住居跡4軒・掘立柱建物跡1棟、性格不明な竪穴状遺構4基、土坑約100基、ピット約300基である。遺物は縄文中期から後期の土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・金属器、中世の陶器などが出土した。

6号・7号住居跡は堀之内式期の敷石住居跡であり、2軒とも調査区南側から出土している。6号住居跡は炉体土器を伴う石囲いがをもち、北部と南東部に一部敷石されており、南西部には壁沿いを巡っているようない礫が出土している。7号住居跡は張り出し部に敷石されている(写真3)。住居内部に敷石は確認できなかつたが、中央部から正面に置かれた埋設土器が出土している(写真4)。位置的に炉と考えられないこともないが、焼土が確認できなかつたので現在は埋設土器と考えている。

弧状の配石遺構は調査区中央の3号住居跡の南に位置している。20～60cmの大礫が十数個北から東へ北東に散らみながら弧を描くように配置されている(写真1)。弧の延長上に同じような大きさの礫は出土しなかつたが、環状に巡る所では直径が約10mになると思われる。配石中央の径60cmの大礫の下の土坑から堀之内式の把手付き口縁部の土器片が出土しているので、時期は堀之内式期であろう。

1号竪穴は直徑約2mあり、覆土中には80～30cmの大礫や10cm大の中礫が密集している。壁は落ち込みはなだらかであるが、途中から急角度に落ちていく。時期は陶器の破片が出土しているので中世であろう。

2号竪穴は長径3m×短径2mの楕円形をしており、浅く皿状に盛んでいる。東壁に人為的に組まれたと思われる石組がある。一見壺のように思われるが礫や床が焼けておらず、壺と断定できない。遺構の大きさも住居跡にしては小さく思われ、性格不明の遺構である。

3号住居跡は住居跡としたが、炉が無く床面に小礫を敷き詰めたようになっており、住居以外の役割をもつ遺構であろう(写真2)。時期は床面上から縄文中期から後期初頭の遺物が出土したので、その時期と考えられる。壁際から最大長4.5cm・最大幅0.85cmの水晶原石が1点出土している。その水晶は特に加工はされていないが、先端が磨り減っている。

山梨県内では近年、縄文時代後期遺跡の発掘件数が増え、敷石住居の調査例や資料も増加しつつある。その中で北巨摩郡は調査例や資料も比較的多く、今回の調査もそれに加わることになり、貧弱と思われていた中部高地の縄文後期文化の見直しに役立つものと思われる。



宮久保遺跡全体図 (1/400)



写真1 弧状の配石遺構

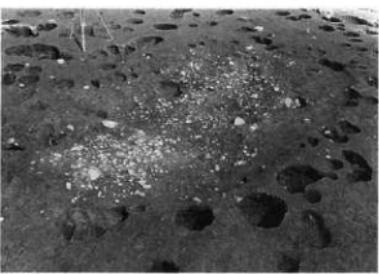


写真2 第3号住跡



写真3 第7号住跡



写真4 第7号住跡出土埋設土器

9. 龍角西遺跡

所在地 長坂町長坂下条

調査原因 県管広域農地農道整備事業

調査期間 1997年10月15日～1998年2月5日

調査面積 約2,000m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 村松佳幸



龍角西遺跡は日野春小学校から北へ約300mの地点、宮川右岸の台地上に位置している。ここからは南に富士山、北に八ヶ岳、東に茅ヶ岳・金峰山、西に甲斐駒ヶ岳・鳳凰三山が眺められ、非常に見晴らしの良い場所に立地している。この台地上に広域農道が建設されることになり、それに先立ち発掘調査を実施した。今年度は宮川に掛る橋の根元から南西へ約100mの所までを調査し、残りの部分は来年度以降に予定している。調査面積は約2,000m²、標高は約658～664mである。

今回の調査で古墳時代の竪穴住居跡10軒、平安時代の竪穴住居跡5軒、時期不明の竪穴住居跡1軒、古墳時代か平安時代の掘立柱建物跡3棟、近～現代のものと思われる建物跡1棟、溝2条、土坑約40基、ピット約250基が発見された。古墳時代の住居跡はどれも前期末から中期にかけてのもので、プランは方形であり、一辺が4～6mの小さい住居跡と、一辺が7～9mの大きい住居跡に分けられる。炉は確認されたほとんどが地床炉で、住居跡の中央ではなく柱穴の間に作られている。遺物は、住居跡からはS字状口縁台付甕・壺・高环・埴（小型丸底壺）・器台等が出土している。また、古墳時代の住居跡の多くは覆土中に焼土や炭化物を多く含んでいるので、火災に遭ったものと思われる。

平安時代の住居は一辺が4～6mぐらいで、古墳時代の住居跡と比べて、地面を堀り下げる深さが深くなっている。そして、本遺跡ではどれも東壁に窓を作っている。平安時代の住居跡からは甕・壺などの土器器が出土した。平安時代の土器器の中には、「南」・「本」などの文字が書かれた墨書き土器も出土している。

第11号住居跡と名付けた遺構は、覆土が他の遺構と違い黄褐色ロームブロックを多量に含む淡い暗褐色土であり、覆土中から丸釘が数本出土しており、柱穴が長方形であった。このことから、おそらく近代以降の建物跡であると思われる。また、覆土中には多量の焼土が堆積しており火災に遭ったと考えられる。

八ヶ岳南麓は縄文時代や平安時代の集落は数多く発見されているが、古墳時代の集落となると長坂町柳坪遺跡（前期1軒、後期8軒）・長坂町頭無遺跡（初期2軒）・高根町西ノ原遺跡（前期1軒）ぐらいしか調査されていなかった。甲府盆地と比べて古墳時代の遺跡数が少ないものの、90年代に入り、長坂町龍角遺跡（中期～後期数件）・長坂町酒呑場遺跡（前期13軒）などが調査され、また、長坂町北村遺跡では方形周溝墓群が確認され、次第に古墳時代遺跡の調査例が増えてきた。平成3年度調査の龍角遺跡は、龍角西遺跡と同じ台地の東へ約100m離れた所にあり、古墳時代中期の住居跡が数軒発見されている。この2つの遺跡は同じ遺跡と考えてもよさそうである。また、八ヶ岳南麓で初めて方形周溝墓群が確認された北村遺跡は谷を挟んで西へ約700mの所にあり、龍角西遺跡周辺が古墳時代に八ヶ岳南麓の中心的な場所であったと考えられる。今回の調査で、調査例の少なかった八ヶ岳南麓の古墳時代集落が発見され、当時の人々の八ヶ岳南麓での生活の様子が徐々に解明されていくであろう。



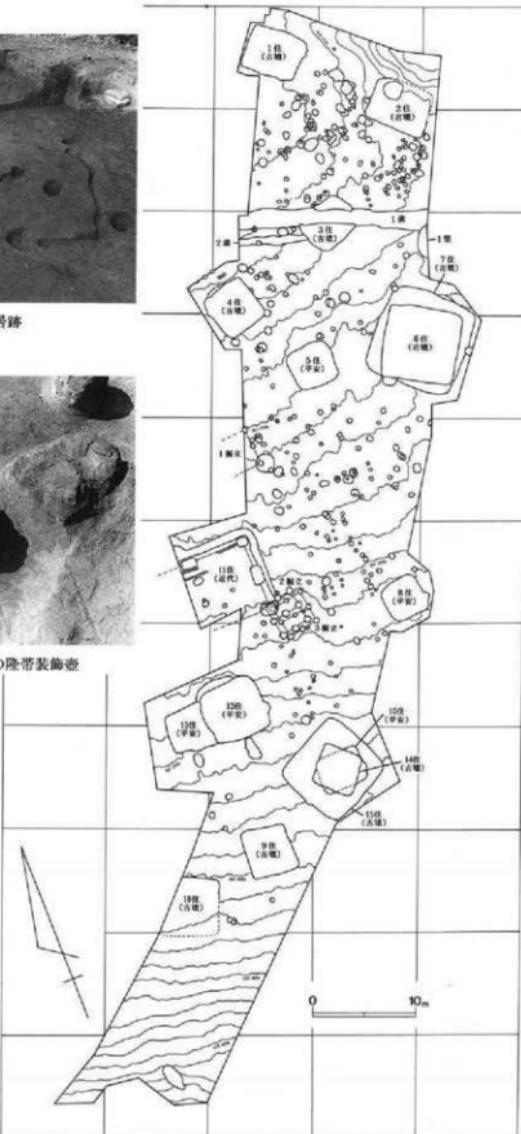
写真1 第1号住居跡



写真2 第1号住居跡出土の陸貝装飾壺



調査区位置図



龍角西道路全体図

10. 甲ッ原遺跡第12地点

所在地 大泉村西井出8867-1

調査原因 小規模建物設置に伴う造成工事

調査期間 平成9年8月25日～9月24日

調査面積 97m²

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 伊藤公明



甲ッ原遺跡は大泉村の南端に位置し、標高は760～810mを測る。遺跡の範囲は南北約900m、東西約300mを測る大規模なもので、西接して甲川、東接して油川が流下している。近隣には縄文時代の集落跡としては天神、姥神、寺所第2、古林第4、金生といった拠点性の高い大規模集落が集中している他、平安時代の集落跡としては寺所、城下、原田、木ノ下・大坪といった集落跡が調査されている。

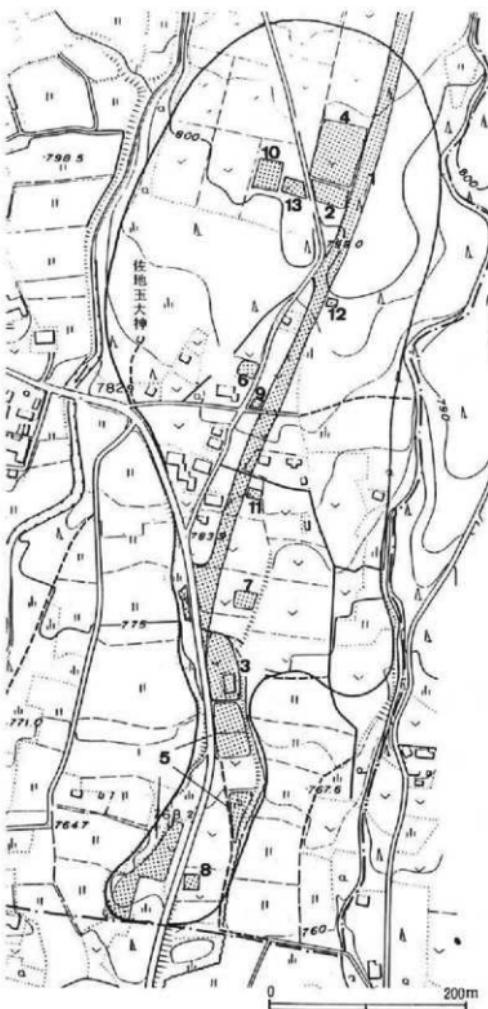
甲ッ原遺跡は現在（平成10年3月現在）までに県道八ヶ岳公園線バイパス工事に伴う発掘調査（第1地点）他各種開発に伴い13地点に渡り調査、確認が実施されている（第1図参照）。ここで報告するのは平成9年に実施された小規模建物設置に伴う造成工事に伴い発掘調査された第12地点の概要である。

先ず経過について述べる。この開発について村教委の埋文担当の筆者が知ることができたのは県道バイパス工事に伴う発掘調査に従事していた県埋文センター山本氏からの通報による。この土地の地目は山林で、農業振興地域の指定も当然ない。開発規模は100m²未満で、居住を目的とせず小規模な物置を設置するだけなので、建築確認を必要としない。法的規制があるのは森林法だけであるが、通常この程度の規模の伐間については報告もされないのが普通である。たまたま伐間の行われた時期に山本氏等が隣接した部分の調査に当っていたため伐間直後に村教委の知る所となつたものである。その後、施主、県教委学術文化財課と協議し、伐間後敷砂利までしてあるか発掘調査をすることで合意が得られた。施主の話によれば敷砂利の上に簡易にコンクリート舗装したことだったが、表土が浅く、包含層までの間層30cmの確保を条件とした関東ブロックの盛土保存の基準には適合しないことからの判断であった。

調査の方法については表土直下が遺物包含層であり、当初手作業により包含層を掘り下げたが、遺構確認面まで最大20cm近く遺存することが確認されたことから重機により包含層を除去し以下作業を進めた。但し第1地点の隣接地点で見られた縄文時代中期後葉に属すると思われる自然縄の分布（註1）がこの地点にも及んでいることが確認されたことや、後述する1号埋甕の口縁部が褐色土層中から検出されたことから、かなりの部分を人力で作業を進めることになった。また、測量については隣接する第1地点のグリッドは採用せず、今後の調査の増加を考慮に入れて第3、5、6、7地点同様に業者委託により公共系の座標による10mグリッドを設定して調査に当った。

調査の結果、この第12地点からは土坑が40基程度、小ピット50基程度、屋外埋甕1基、集石土坑1基が検出されている。この内、土坑、小ピットの認定については調査時の混乱があるので再度検討することとする（第2図）。出土遺物は整理途上であり、詳細は本報告に依ることとするが、今までのところ、概ね縄文時代前期後葉～中期終末の範囲に納まるものであろう。以下代表的な遺構と遺物について述べる。

6号土坑 直径3.5m程度のごく浅い円形プランの土坑の内側に検出された。同様の深い土坑はこの地点から



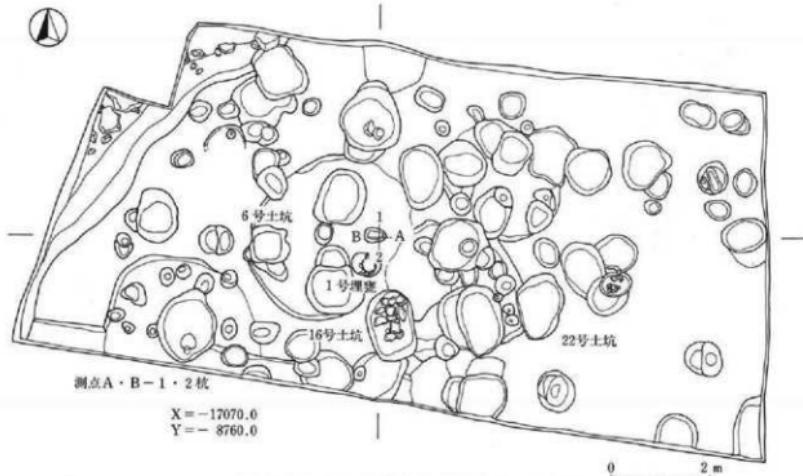
第1図 開拓の遺跡の範囲と調査地点 ($S = 1/5,000$)

あろうと思われる。

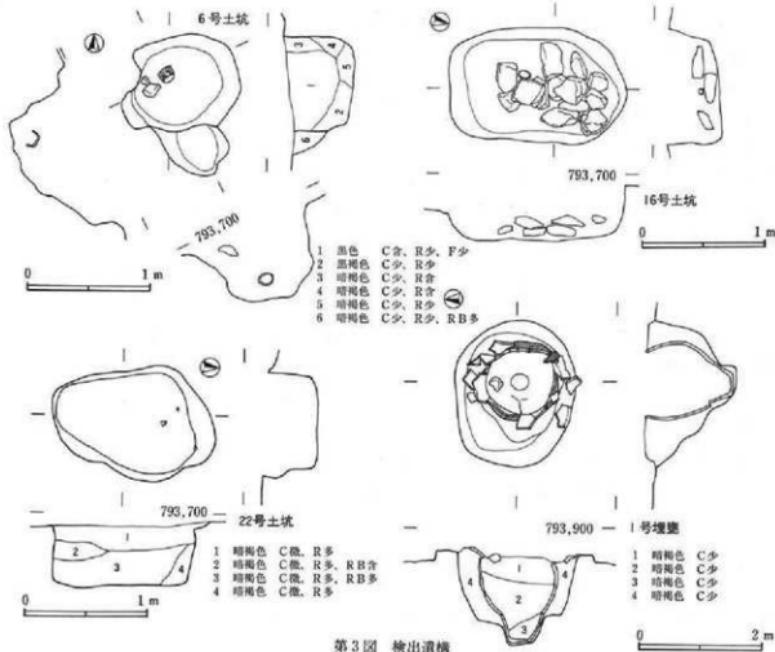
22号土坑 長軸120cm、短軸97cmを測り、深さ49cmを測る不整橿円形プランの土坑である。覆土は4層に分層できたが、同質のもので、覆土堆積の時間差がそれほど無いものと想定され、墓坑としての機能が想定され

4基確認されているが、その帰属時期、性格共に不明で、今後の検討を要する。この浅い土坑との先後関係は不明である。長軸100cm、短軸76cmを測る略橿円形プランを呈する。深さは56cmを測る。覆土中から諸磧b式新絞繩の深鉢刷下半～底部の個体や小児頭大の礫が検出されており、墓坑的な性格のものと考えられる。また、覆土中から小破片ではあるが漆彩文土器が出土している(第4図-1、2)。これは共に有孔浅鉢の破片で、同一個体と考えられる。器外表面を赤色漆で塗彩後、櫛歯状工具を用いて黒色漆で平行線文、同心円文を施文したものと思われる。漆の遺存状況は良好である。

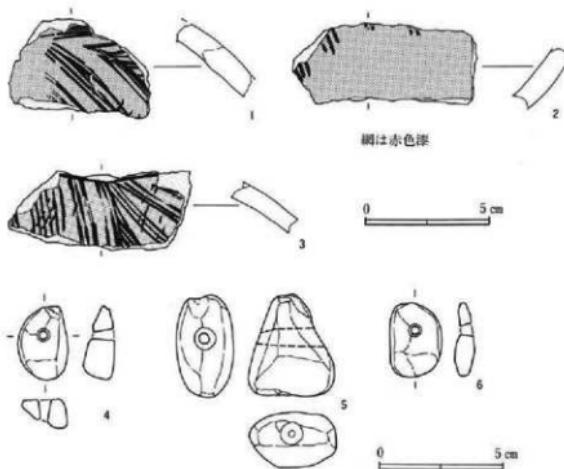
16号土坑 長軸143cm、短軸94cmを測る不整橿円形プランを呈し、深さは42cmを測る。北側に偏して人頭大の偏平な礫が投入されている。この礫は土坑底面からやや浮いて出土している。土坑底面や礫自体に被熱変化は認められず、覆土中にも顯著な焼土、炭化物粒子は分布しないことから墓石炉とは考えられず、やはり墓坑として考えたい。この土坑からも漆彩文土器小片が出土している(第4図-3)。諸磧b-c式の有孔浅鉢の破片で、器外表面を赤色漆で塗彩後2～3本単位の櫛歯状の工具で黒色漆を放射状に施文している。先述の2点の漆彩文土器片も同様であるが、土器胎土の観察からは特殊な様相は見られず、在地で製作された土器で



第2図 甲ヶ原遺跡第12地点 全体図 (S = 1/50)



第3図 検出遺構



第4図 出土遺物 (S = 1/2)

埋葬された人物が、正に一連の垂飾を装着して埋葬された姿が復原されるのである。4は30×20mm、最大厚12mmを測り、12.1gを測る。5は51×35mm、厚さ23mmを測り、50.2gを測る。原石の形状を利用しているため、不整形となっている。また、底面にも凹みが見られるが穿孔を途中で放棄したのであろうか。6は31×21mm、厚さ8mmを測り、8.8gを測る。何れも貫通孔の直径の比率は2:1ほどとなり較差が大きいのが特徴である。また、帰属する時期であるが、出土した土器片より曾利I式としておく。

1号埋甕 先述のとおり褐色土層中で検出された埋甕で、当時の生活面の位置を示唆する。60×50cmほどの楕円形プランの掘り方の中に復元器高約48cmの深鉢が正位で埋設されていた。時期は曾利III式期のもので、穿孔、打欠きは見られない。

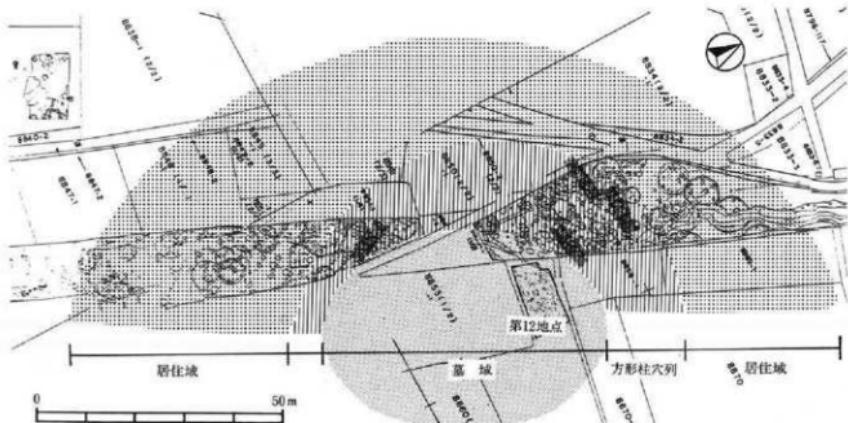
今回調査された第12地点から検出された遺構は、性格不明の小ピット等を除外するとほとんどが墓坑と考えられるものであった。その時期は諸磯b～c式、藤内～曾利式にかけてであり、隣接する第1地点A区で検出された遺構の時期と符号する。即ちこの第12地点周辺は甲ヶ原遺跡A区環状集落_(H2)の墓域に該当することが確認された。また、第1地点の成果と考え合わせると、このA区環状集落は墓域を中心にその外縁部に居住城が展開し、その規模は直径150mほどにも達することが明らかとなっている。なお、中期後葉に限ってではあるが、墓域に接して方形柱穴列が長軸を墓域の方向に向けて同心円状に配列されている_(H2)ことは、方形柱穴列の性格を考える上でも、A区環状集落の性格を考える上でも極めて重要な意味をもつ（第5図参照）。

註1 今福利恵・山本茂樹 1992 「甲ヶ原遺跡概報Ⅰ」山梨県埋蔵文化財センター調査報告第71集

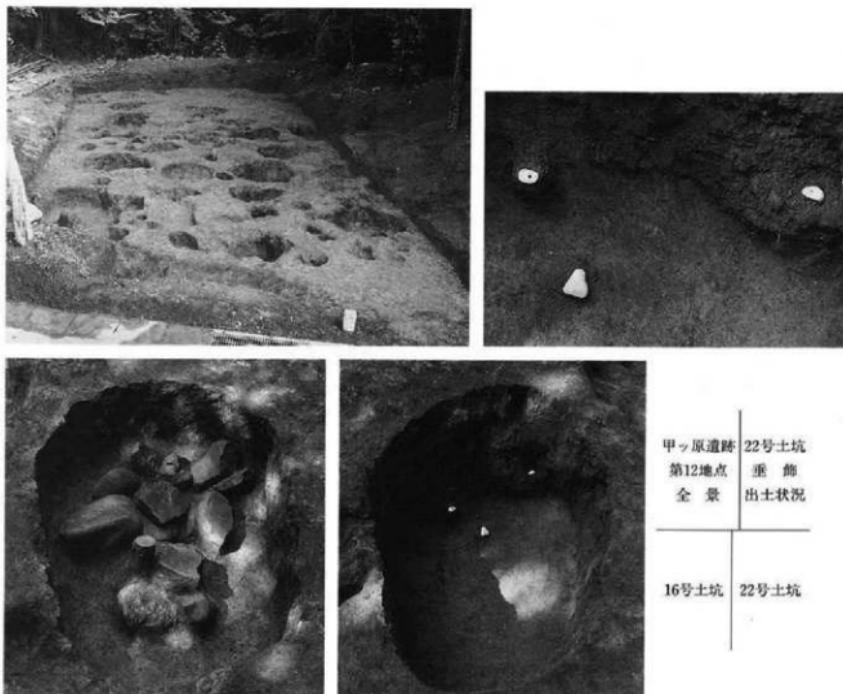
註2 伊藤公明 1994 「甲ヶ原遺跡 第6地点・第7地点」大泉村埋蔵文化財調査報告書10集

註3 註1文献に同じ

る。特筆すべきことはヒスイ製垂飾が3点（第4図4～6）、おそらく埋葬に伴い死者に装着された状態で検出されたことである。即ち、5の大珠が土坑中央北寄り、底面直上から出土し、4がその右奥、底面より11cmほど浮いた状態で、また、6が左奥寄り、底面より9cmほど浮いて出土している。これらの出土状況から頭を土坑北側に向けて



第5図 甲ヶ原遺跡A区環状集落構造模式図 (S = 1/1,000)



11. 鳥原平遺跡群
(上小用遺跡ほか)

所在地 北巨摩郡白州町鳥原地内

調査原因 畑地帯総合整備事業

調査期間 1997年7月1日～11月14日

調査面積 2,901m²

調査主体 白州町教育委員会

担当者 杉本 充



本遺跡群は、明石山脈の北部、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地東麓に位置し、1km程東を北西から南東に流れる釜無川が形成した河岸段丘高位面に立地している。この段丘面（以下鳥原平）の北側は流川に、南東側は松山沢川に削られ、急な段丘崖となっている。現況は、畑及び遊休桑園である。

鳥原平では一面に中世の遺物が散布しているが、段丘の南側には縄文時代中期の遺物が濃密に分布しているため古くから遺跡の存在が知られている。また、南側中央部に中世の教来石民部館跡が存在し、壠跡などの確認のため昭和63年度と平成元年度に地中レーダー探査と計19本のトレンチ調査が行われている。教来石氏は、武田家支流の一条氏から派生した在地の武士団である武川衆の一員である。

本年度の調査では、鳥原平の全面に区画整理が計画されているため遊休桑園などの休耕地を中心に57本の試掘トレンチを設定した。全体に中世の痕跡がみられ、上小用遺跡の範囲内では縄文時代中期の住居址2軒が検出された。

参考文献

折井 敦 1989 「教来石民部館跡」白州町教育委員会

折井 敦 1990 「教来石民部館跡」(第2次)白州町教育委員会



76号トレンチ

うえのはら 12. 上原遺跡

所在地 武川村大字宮脇

調査原因 甲斐駒ヶ岳地区広域農道建設工事に
先立つ発掘調査

調査期間 1997年9月18日～1997年11月26日

調査面積 1,000m²

調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田眞人



上原遺跡は、北を黒沢川、南を小武川に挟まれた東にのびる舌状台地の縁辺部に位置する。標高は約520mである。この台地は、上原遺跡の位置する平坦部と、その西側（山側）の一段高い平坦部からなり、西側の平坦部には向原遺跡が所在している。また、この台地の北側には、大武川と黒沢川に挟まれた台地が同様に張り出しており、実原A遺跡など绳文時代の集落を主とする遺跡が存在している。

上原地区は、古くから畠地として利用されており、その折りに突然大きな陥没があり馬が落ちた、など度々、地下式坑が陥没していたようである。発掘調査は昭和56年と平成7年に行われている。

今回の調査は時間的な制約もあり、発掘調査に入る前に、地中レーダー探査により地下式坑等の確認を行い、レーダーに反応のあった地点を集中的に発掘調査するという方法で行った。発掘調査では、合計8基の地下式坑が発見され、地点をかえて9基の円形及び長方形の土坑、小ピット群が発見されている。

8基の地下式坑には、伴出する遺物はなく、時期を特定することはできなかった。これらの地下式坑は、台地縁辺に位置し、入り口部分は全て谷側につくられている。形状は、床面を隅丸の方形とするものが5基で、3基は楕円形である。この床面を楕円形とするものは、他の5基と比べて小型であり、天井が崩落していないかったため、工具痕もよく観察することができた。

土坑は、円形のものが4基、長方形のものが3基、残り2基はどちらとも判別がつかない。直径及び長径は、それぞれ2m前後である。深さは30～40cmであるが、これらの土坑はpm1層を掘り抜いていることから、土坑が掘られる前に造成が行われていたことが伺える。小ピット群は、直径15～30cm程度のもので、大きさや、深さがほぼ同一で2×3本に配列すると思われるものもある。これらの小ピット群と土坑の関連は不明である。

13. 真原A遺跡

所在地 武川村大字山高

調査原因 営農活動に先立つ発掘調査

調査期間 1997年4月12日～1997年8月28日

調査面積 600m²

調査主体 武川村教育委員会

担当者 竹田眞人



真原A遺跡は、北西側を石空川、南東側を黒沢川に挟まれた北向きの緩傾斜をなす台地上に立地する。今回発掘調査を行った地点は、武川村大字山高字真原3567-4他に所在し、標高は約710mほどである。真原A遺跡では、昭和57年、平成8年度に調査が行われており、それぞれ曾利式期の住居跡が1・2軒検出されている。平成9年度に行った調査地は、平成8年度に調査された地点の西側の隣接地である。

今年度、調査によって検出された遺構・遺物は曾利式期の住居跡が2軒、土坑2基および、同期の遺物である。3号住居跡（遺構Noは、平成8年度からの通しNoとしている。）は、円形で直径は約5.7mである。主柱穴は、5本か7本で、炉は奥壁側により、石囲炉であったと思われるが、ほとんどが抜かれているようである。周溝は壁にそって1周検出されている。また、埋甕が1基入り口部と思われる地点より検出されている。4号住居跡は、円形で直径は約6.5mである。主柱穴は5本で、炉はやはり奥壁側により、石囲炉であったと思われる。周溝は、住居跡に沿いほぼ1周検出されている。この住居跡からは、埋甕は検出されなかった。3・4号住居跡とともに、覆土中より多量の遺物が検出された。

この調査の中で、表採ではあるが縄文時代草創期に属すると思われる有舌尖頭器が発見されている。真原A遺跡の発掘調査は、平成10年度以降も予定されており、今後の調査によって、草創期の資料が増加することを期待したい。



3号住居遺物出土状況（西側より）



4号住居遺物出土状況

平成9年度発掘調査一覧

大泉村	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
城下	谷戸238-1		5	別荘新築	97.4	試掘	集落
石堂第2	西井出8240-2640		5	別荘分譲	97.5	〃	確認
井富	西井出7141-1他	920	宅地分譲	97.4~5	〃	〃	
甲ツ原12地点	西井出8867-1	97	物置建物	97.8~9	発掘	集落	
甲ツ原13地点	西井出8796-78	15	工場新築	97.10	試掘	散布地	
石室 花松園地点	西井出8240 2233	1031	店舗新築	97.11	発掘	落とし穴	
史跡谷戸城跡	谷戸2736		69	学術発掘	97.11~12	発掘	城館
長坂町	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
長坂上条	長坂上条531他	100	下水道敷設	97.4	発掘	散布地	
宮久保	坂川12155他	1500	圃場整備	97.5~9	発掘	縄文・平安集落	
龍角西	長坂下条1391他	2500	広域農道	97.10~98.2	発掘	古墳・平安集落	
龍馬塙	坂川1956-1他	1815	宅地造成	97.7	試掘	散布地	
下ノノリ	大井ヶ森1506-4他	9700	宅地造成	97.7	試掘	散布地	
長坂上条	辰坂上条802-1	580	個人住宅	97.7	試掘	散布地	
健康村遺跡	中丸2267 1他	181	電線鉄塔敷設	97.11	試掘	散布地	
酒呑場	長坂上条621 18他	977	店舗新築	98.1	試掘	散布地	
白山神社前	夏秋949-1	864	店舗新築	98.1	試掘	散布地	
波田	大八田1553	993	工場新築	97.12	試掘	散布地	
石原庄北	大八田167他	18000	店舗新築	97.12	試掘	確認・縄文集落	
山本	洪沢278	4000	農業関連	98.3	試掘	確認・縄文集落	
高根町	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
宮の前	高旗1703-1	45000	農園整備	97.6	発掘	縄文集落	
念場原	清里3545	30000	牧草地造成	97.11	試掘		
海道	箕輪993-3	200	広域農道	97.12	試掘		
金山	村山東割2020	2000	土採取	97.12	試掘	散布地	
朝日丘	清里3545	17000	町道整備	97.12	試掘	散布地	
斜	下黒沢376	38000	桑園整備	97.12	試掘	散布地	
西横森原址	村山北割1128	3000	町道整備	98.2	試掘	城館	
宮地	村山西割1618	3000	駐車場建設	98.2	試掘	確認・縄文集落	
白州町	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
新居	横手字新居1966-2	10	個人住宅	97.4	試掘	平安・中世散布地	
上小川	島原字上小川523他	2901	農業関連	97.7~11	試掘	縄文・中世集落	
荒川村	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査目的	調査期間	備考	種別
真原A	山高字京原地内	560	農業関連	97.4~8	発掘	縄文集落	
真原A	山高字京原地内	10	薪火火槽設置	98.3	試掘		
黒沢	嵐沢地内	300	民問	97.12~98.3	試掘	縄文・中世集落	
黒沢	黒沢地内	20	個人住宅	98.2	試掘		
向原	嵐沢地内	800	民問	97.12~98.3	発掘	縄文集落	
実原B	山高地内	20	個人住宅	98.2	試掘		
上原	官邸地内	1000	広域農道	97.9~97.11	発掘	地下式坑	

明野村	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査目的	調査期間	備考	種別
〃	桑森	上手4838他	1100	農業開拓	97.4~98.3	発掘	縄文集落
〃	村之内	上手4320	684	個人住宅	97.7	試掘	散布地
〃	トキワ真空機材㈱工場地内	上神取389-1	939	工場建設	97.7~8	試掘	
〃	諏訪原	上神取1535-1	800	農業開拓	97.9	試掘	確認・縄文集落
〃	小笠原工区内	小笠原地内	80000	圃場整備	97.12~98.1	試掘	確認・中世
〃	村之内Ⅱ	下反保545-1	933	個人住宅	98.1	試掘	確認・縄文集落
〃	梅の木	浅尾字梅の木	300	畑かん	98.2~3	発掘	縄文集落
〃	上神取工区内	上神取地内	200000	圃場整備	98.1~3	試掘	確認・縄文集落
赤崎市	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査目的	調査期間	備考	種別
〃	右之坪	川野町上川井	4000	圃場整備	97.6~12	発掘	縄文・平安集落
〃	三宮地	藤井町	1000	市道建設	97.5~98.2	発掘	縄文・平安集落
〃	坂井村ノ前	藤井町	120	送電線鉄塔敷設	97.8~98.1	発掘	縄文集落
〃	坂井茅林	藤井町	120	送電線鉄塔敷設	97.8~98.1	発掘	弥生・古墳群構築
〃	坂井天井前	藤井町	120	送電線鉄塔敷設	97.8~98.1	発掘	縄文・古墳集落
〃	能見城跡	穴山町	100	送電線鉄塔敷設	97.8~98.1	発掘	中世城跡
〃	長塚道上	亀岡町字長塚道上	40	宅地造成	97.5	試掘	確認・弥生集落
〃	御庭山	大草町	50	公園造成	97.4	試掘	中近世治水関連
〃	下横邑	藤井町	100	店舗建設	97.11	試掘	散布地
双葉町	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査目的	調査期間	備考	種別
〃	堀西	大室2617他	6297	学校建設	97.6	試掘	散布地
〃	坊沢東	岩糞1285-5他	338	個人住宅	97.10	試掘	散布地
〃	池久保	竜池4384-1他	9265	店舗建設	98.3	試掘	散布地
小瀬沢町	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査目的	調査期間	備考	種別
〃	井跡原	井跡原2973	2989	共同住宅建設	97.7	試掘	
〃	激氏籠	上笠尾字激氏籠847-14	300	道路建設	97.7~97.11	発掘	縄文集落
〃	夏秋	上笠尾字夏秋2535-33	1800	道路建設	97.8~97.12	発掘	縄文集落
〃	二俣	上笠尾字二俣3261-16	4279	駐車場建設	97.10	発掘	高とし穴
〃	山之上	山之上10045-1	2731	共同住宅建設	97.10	試掘	
〃	柿逆下10162-1番地	柿逆下10162-1	2251	駐車場建設	97.10	試掘	
〃	高野	舟窪6811-3	65	個人住宅	97.11	発掘	
〃	鶴沢	鶴沢9459	92	個人住宅	97.11	発掘	
〃	柿逆下10060-452番地	柿逆下10060-452	7071	保養施設	97.12	試掘	
〃	下西麻	下西麻8993	500	下水処理場	98.1	試掘	
〃	岩瀬	岩瀬5046	90	倉庫建設	98.2	試掘	
〃	上前後沢第2	小瀬沢町4823	114	個人住宅	98.2	発掘	縄文土坑など

III 新規指定文化財

平成8年度に高根町教育委員会では下記の3点を文化財として指定しました。いずれも中世の所産であり、高根町あるいは峠北地域の歴史を解明する上で大変貴重なものであります。以下に個々に紹介していきたいと思います。

高根町新指定文化財

1. 藏原の経筒

所 在 地 山梨県北巨摩郡高根町藏原1922

所 有 者 中村芳夫

指定年月日 平成8年4月25日

この経筒は、昭和33年(1958)4月に開墾中に発見されたものであり、当時赤星直忠・山本寿々雄氏によって詳細が発表されている。その後永らく所在不明であったが、平成6年7月5日に中村氏宅より所在が確認された。

開墾中よりの出土であるため出土状況は不明であるが、開墾者によれば塚状の土盛を掘削中に発見されたものである。

出土品は、金銅製の経筒であり、法量は高さ9.9cm、蓋・底の径は4.65cm、筒の径4.5cmを測る。判出品としては、波来鏡12枚(その種類は別記)と経文と思われる炭化物2点がある。

経筒の蓋と正面には葡萄と唐草模様が装飾され、34字の陰刻文字が胴部に彫りこまれている。

・陰刻文字

十羅刹女 甲州住呂中村

梵字(キリーク) 奉納大乘妙典六十六部聖

三十番神 天文二十一年今月

・判出古鏡の種類

開元通宝、太平通宝、祥符通宝(2)、天聖通宝、皇宋通宝(2)、元豐通宝(3)、聖宗元宝、元祐通宝又は元符通宝の12枚であるが、元豐通宝が1枚所在不明である。

・炭化物

出土当時は2個確認されていたが、経筒所在不明中に1個所在不明となっている。

出土状況から經典の可能性がある。



藏原の経筒

概 况

経筒にある陰刻文によれば天文21年(1552)に甲州住呂中村なる人物が法華經と波来鏡12枚を納めたことが読み取れる。

発見地の近くには中村氏の墓地があり、碑面には高野山にある武田家過去帳に記載の見られる『授林道傳禪門逸見藏原 中村右近丞 葦富妙繁信女 甲州逸見藏原 中村右近丞 内方』と刻まれた宝篋印塔と五輪塔(逆修)がある。このことにより、推察を許されるならば中村右近丞により現世利益等を祈願するために埋納されたものであろう。



経筒の蓋(中村芳夫氏蔵)

2. 今川義元朱印過書

所 在 地 山梨県北巨摩郡高根町村山北割1128

所 有 者 植松雄峰

指定年月日 平成8年4月25日

読 下

但今切渡相定船貨可有之 此參宮者四拾 餘人不及諸閑 船貨之沙汰路 次無相違可通 過之
者也及如件 天文二十二年間正月十一日 駿遠參諸閑渡守中

解 説

過書（かしょ・かそ）とは関所の通過証文のことである。この古文書は、駿河国主今川義元が伊勢神宮参拝の一時に駿河・遠江・三河三国の関所渡守等の通行を保証したものである。（例外として、今切の渡のみは船貨の支払いを指示している。）駿河の今川氏が、甲州の伊勢神宮参拝人にこの様な過書を発行して便宜を図った背景には、この前年、天文21年11月に、今川義元の息女が武田晴信の嫡男義信に嫁すという甲駿の友好関係が最も親密な関係にあったことが大きな要因になっているものと思われる。当時の逸見地方における伊勢信仰の様子を伺う上でも好史料である。



今川義元朱印過書（植松雄峰氏蔵）

3. 坂本清三郎宛書簡

所 在 地 山梨県北巨摩郡高根町村山北割1965

所 有 者 白倉全司

指定年月日 平成8年4月25日

読 下

此いせん其方御志あさからず忝候間申候事ニて我等村山のぬしニ罷成候ハハかならずかならず一きまへの
阿てかい申べく候御心安候へく候其手形進覧候 以上

猶申候この以後むらやまに在宿候ハハいきまえ可進候もし又つかねなどへ御こし候てさいしづつ候ハハ
その切は五くわんも五くわんも其時によりしつねんなくてかたのことこと通し申へく候者也 以上

戊寅 極月十八日 昌光 花押

坂本清三郎 喪

解 説

この書簡は、「昌光」なる人物が坂本清三郎宛に、これまでの（坂本清三郎の）（昌光）に対する協力に感謝し、（昌光が）村山の主になったならば（坂本清三郎）に一騎前の宛行をすることを約束したものである。

この書簡については、『甲斐国史』（巻之百十士庶部第十一）でも取り上げられているが、以下の2点について解釈上のミスがあるものと思われる。1、干支を寛永15年（1638）としていること。2、書簡の主を「昌元」と読み違え日向氏縁の人物と見ていること、があげられる。

干支（戊寅）は「我等村山のぬしニ罷成候ハハ」等の文言から考えて寛永年間とは考えられず、天正6年（1578）でなければならないし、書簡の主の名前は、「昌光」であることは明瞭である。そして、昌光は津金衆の中の「清水太郎左衛門尉昌光」であると考えられる。

信玄の死【元亀3年（1573）4月12日】、長篠の敗戦【天正3年（1575）】等武田氏の凋落期における逸見地方の情勢を知る上で貴重な史料である。



坂本清三郎宛書簡（白倉全司氏蔵）

双葉町指定文化財

4. 塔之越経筒 付 銭貨

名 称 塔之越経筒 付 銭貨

員 数 2基（銭貨138枚）

種 別 考古資料

指定年月日 平成10年2月27日

所 有 者 双葉町

双葉町教育委員会は、平成10年2月27日に7件の文化財を指定した。この内考古資料の塔之越経筒を紹介する。

塔之越経筒は山梨県内では出土例の数少ない中世の経筒で、円筒形と六角筒形の2基が出土し、前者には「永祿4年（1561年）」の銘があり、後者も形状や大きさから同時期のものと思われ、銅板を加工し金箔をかけており、銘文や模様は細かい点を重ね合わせて刻んでいる。そして炭化した経巻の一部と思われる塊が内部に残されていた。また同時に発掘された銭貨は、唐銭・宋銭・明銭等で138枚という数は全国的にも最大量の出土である。

これは当時流行した回国聖（六十六部聖）によって供納されたものと思われ、昭和30年代に地元の有志たちによって双葉町下今井字登之越の塔之越経筒から発掘したものである。しかし当時の記録はなく、当事者たちの記憶もはっきりしていないため、発掘したときの状況や日時、場所も曖昧なものとなってしまっている。

経塔があった登之越は、五輪塔等の石造物が散在していたことから、「塔之腰」または「塔之越」と書かれ、現在は「登之越」という文字が用いられている（経筒や経塔については「塔之越」という文字を用いている）。また武田氏によって保護されていたという光照寺（⁽²⁾）があったとされている坊沢や薬師山に隣接しており、宗教的色彩の強い地域であったと思われる。

経筒と銭貨は町に寄託され、教育委員会で管理していたが、発見された土地の所有者であった水上源太郎氏から平成7年3月に双葉町へ寄贈された。そして平成7年度から年次計画で保存処理を行っており、平成10年度末に完了する予定になっている。

○円筒形経筒

高さ 97mm 幅 47mm

（本体高さ 95cm） （本体幅 46mm）

銘文

十羅刹女 摂津國之住清覺

（秉妙典六十六）
(梵字バク) 奉納大^ト^リ^ト^リ^ト^リ^ト部聖

三十番神 永祿四年今月吉日

○六角筒形經筒

高さ 138mm 幅 77mm

(本体高さ 109mm) (本体幅 50mm)

蓋は天蓋形

銘文

十羅刹女 肥前国住照白

奉納大乘妙典六十六部聖

三十三番神 当年今月吉日

(帆迦座像)

○銭貨

	枚数		枚数	
開元通宝	6	太平通宝	1	淳化通宝 6
至道元宝	3	咸平元宝	4	祥符元宝 7
天禧通宝	4	天聖元宝	8	景祐元宝 3
皇宋元宝	1	至和元宝	2	喜祐元宝 4
治平元宝	6	熙寧元宝	4	元祐通宝 8
宣和通宝	2	明道元宝	1	嘉祐通宝 5
元豐通宝	14	紹聖元宝	5	聖宋元宝 6
政和通宝	6	大定通宝	1	嘉定通宝 1
淳祐元宝	2	皇宋通宝	17	洪武通宝 5
不 明	6			

註

光熙寺は天正10年（1582）に織田軍によって焼かれたが、17世紀中頃に現在地（双葉町岩森字山本）に焼け残った薬師堂を移築し再建された。

北巨摩市町村刊行の埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

長坂町	タイトル	発行機関	内容	備考	資料文書
1984. 3 小和田省跡発掘調査概報	長坂町教委	平住1、地坑15、獨立1、ガバ1、壁2、天日窓 陶、水溝など	中世居館		×
1985. 3 小和田船跡発掘調査概報	長坂町教委	調(?)住2、縄(?)住3、平住18、中世住29 地坑12、古瓦多量、和鏡など	中世居館		×
1986. 3 小和田船跡(小和田北渡跡)	長坂町教委	平住1、中世住3、獨立1など	平安・中世の居館		×
1987. 3 深草遺跡 別当十三塙遺跡 別当通路(第2次) 繩屈敷遺跡	長坂町教委	縄(?)住3、純屋外軒8、平住1、中世十二塙 地磚、土塁など	繩文後期造石住居、墨書き土器		×
1988. 3 深草遺跡 別当十三塙遺跡	長坂町教委	中世十三塙、人骨	十三塙		×
1989. 3 大八田 錦川遺跡	長坂町教委	縄(?)住1、平住5、獨立2	繩文後期堅石住居		×
1991. 3 南新潟西遺跡	長坂町教委	平住5	平安聚落		○
1994. 3 鮎原村遺跡	新宿区民 鮎原村遺跡 調査団	高(前中)住各1、縄(前中庭)上坑、縄(?)居 室、平住14、中世石造土坑など	绳文晚期上器好資料		○
1995. 3 手白尾東遺跡	手白尾東遺 跡調査団	縄(?)住1、縄(?)朱石	绳文後期の不定形な築石		○
1995. 3 三井氏邸跡(北村渡跡)概報	長坂町教委	古(?)方形周溝墓6	墳丘をともなう周溝墓		○
1996. 3 北村遺跡	長坂町教委	古(?)方形周溝墓6	筑丘をともなう周溝墓		○
1996. 3 酒呑場遺跡G区	長坂町教委	縄(?)住10	繩文中期大規模遺跡群の一部		○
1997. 3 長坂:北条城復原	長坂町教委	縄(?)後院名居町、平住4	繩文後期環状遺物		○
1997. 3 小屋敷遺跡	長坂町教委	縄(?)住1、縄(?)上坑多数、平~中世住店 多数など	加曾利式系土器多数		○
1997. 3 別当山遺跡	長坂町教委	縄(?)住10	绳文後期数石住居		○
1997. 3 柳坪南遺跡 塚原遺跡	長坂町教委	縄(?)上坑設上器1、縄(?)住2、平住24など	绳文後期住居		○
1997. 3 小屋敷遺跡C区域(冬瓜園跡)	長坂町教委	縄(?)中	加曾利式系土器		○
豊崎市					
発行日	タイトル	発行機関	内容	備考	資料文書
1984. 8 取井南遺跡	豊崎市教委	縄(?)住1、土坑3、古(?)住18、周溝墓4、 平住7など	古墳崩廻の周溝墓、把柄型土偶		×
1985. 3 小田小学校遺跡	豊崎市教委	縄(?)住1、短壁1、縄(?)配石4、縄(?)住3 地坑20、中世住3			×
1986. 3 金山遺跡・下戸戸遺跡・中池遺跡	豊崎市教委	縄(?)住1、平住4、中世小瓦など	绳文時期都狀住居土器		×
1987. 3 中本山遺跡・窓の前遺跡	豊崎市教委	縄(?)中晚)瓦含層、縄(?)住4、平住16	绳文後期聚落		○
1988. 3 反井南	豊崎市教委	古(?)住58、中世住石土坑など	古墳崩廻聚落		○
1988. 3 史跡新府城保存管理計画策定常 古会	新府山教委	新府城資料	戦国中期城郭		○
1988. 3 前山遺跡	豊崎市教委	縄(?)中晚)瓦含層、平住12			○
1988. 3 史跡新府城保存管理計画策定常 古会	新府城資料		戦国中期城郭		○
1989. 3 後田遺跡	豊崎市教委	縄(?)住3、縄(?)中晚)配石、古(?)住2、奈平 12、獨立1	繩文中後期の配石、中空土偶、円 面鏡		○
1990. 3 北横川遺跡	豊崎市教委	縄(?)上坑1、縄(?)住15、奈平33			○
1991. 2 下横川遺跡	豊崎市教委	縄(?)住8、奈平2			○
1991. 3 宮ノ前第3遺跡・北笠山遺跡	豊崎市教委	縄(?)住3、平住15、分断立4、村落内引除など	鬼瓦、瓦		○
1991. 5 北下条遺跡	豊崎市教委	赤(?)住1、奈平9、中世住層			○
1991. 10 小野保第2遺跡	豊崎市教委	古(?)住2、地坑3など			○
1992. 3 上本田遺跡	豊崎市教委	縄(?)住1、奈平11			○
1992. 3 立地遺跡	豊崎市教委	縄(?)中後)瓦含層、井戸			○
1992. 3 宮ノ前遺跡	豊崎市教委	縄(?)住1、縄(?)住1、縄(?)住3、縄(?)住3、 瓦含層、鬼(?)木山、平住43など	赤牛頭彌の水田遺構		○
1993. 3 盆地遺跡Ⅱ	豊崎市教委	縄(?)中晚)土坑、地坑など			○
1993. 3 宮ノ前第3遺跡	豊崎市教委	平住6、縄瓦1、甕石堅穴住居1	漆器		○
1994. 3 石道跡	豊崎市教委	古(?)住2、平住4			○
1994. 3 反川遺跡	豊崎市教委	平住2			○
1995. 3 板井南(人原)遺跡	豊崎市教委	古(?)周溝墓2	パレススタイル墓		○
1995. 3 半鍬田遺跡	豊崎市教委	平住7	漆器、瓦塔		○

墓地名	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書	
高崎市	高ノ山第4遺跡	高崎市教委	弥生中期包含層、席状遺構など		○	
1996. 3	高田遺跡	高崎市教委	縄(中後)土坑、地坑など	縄文後期前半土器	○	
1996. 3	後田第2遺跡	高崎市教委	縄(中後)包含層、弥(後)住6、古(後)住6		○	
1996. 3	水無瀬跡	高崎市教委	平住2、水田跡など	八幡鏡	○	
1996. 5	坂井食ノ前遺跡	高崎市教委	縄(前)土坑1、古(後)住2、秦住2		○	
1996. 5	批杷原遺跡	高崎市教委	古(中)住3		○	
1997. 3	後田第1前遺跡	高崎市教委	弥(後)住6、古(後)生4、秦住2、平住16		○	
1997. 3	宮ノ前第3遺跡	高崎市教委	高(平)包含層、金平住12、撫立1など	須恵器大甕、漆瓶	○	
1997. 3	山形遺跡	高崎市教委	縄(中)住2、土坑1	上坑内人骨	○	
1998. 3	塩川下河原堤防遺跡	高崎市教委	近世近代遺物		○	
1998. 3	三宮塚遺跡	高崎市教委	縄(中)住1、縄(晚)配石、平住15など	縄文後期前半配石	○	
高根町	東久保遺跡	高根町教委	縄(中)住1、平住1、継治遺構1、獨立、土坑など	縄土器「六万・家・家?」	×	
1984. 3	高東久保遺跡	高根町教委	平住、中世磁物群など	須恵器大甕高州の硯	○	
1986. 3	右岸、西ノ原遺跡	高根町教委	縄(後)配石、堅満、古(前)住1、平住(焼火窓)1など	圓石をともなう縄文後燒火窓	×	
1987. 3	町内遺跡分布	高根町教委	昭和6.年度に鉢合		×	
1987. 3	石室B遺跡(第2次)	高根町教委	縄(晚期)配石、鳥居	縄文後晩期の石棺配石、祭壇状配石	○	
1988. 3	西原・当町遺跡	高根町教委	縄(中)住1、平住1、近上坑2など		○	
1993. 3	持川遺跡	高根町教委	萬(小)住1・埋蔵1・屋外1・中世上枕1など	中世の鐵石と幾十をともなう上坑	○	
1996. 3	社口遺跡(第1・2次)	高根町教委	古(中)住28、平住1、鐵石層1など	縄文中期後燒火窓	○	
1996. 3	火拂御遺跡	高根町教委	古(中)住28、平住1、鐵石層1など	縄文中期後燒火窓、削刮大甕、ナイフ形石器	○	
1997. 3	社口遺跡(第3次)	高根町教委	縄(早)包含層、縄(中)住4、縄(後)住7、平、鐵石層1など	志空施文土器、上柄、土柄、墨青土器	○	
1997. 3	藤林寺跡遺跡他6遺跡	高根町教委	縄(前)住11・土坑1、縄(中)住5、平住1、鐵石器、中世土器、(縄跡をともなう配石など)		○	
白州町	飛行口	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書
1985. 3	根古屋遺跡	白州町教委	縄(前)住1、縄(中)住12、土坑26など	茶桶川右岸の曾利式早期集落	×	
1988. 3	坂下遺跡	白州町教委	平住4、撫立1、土坑50など	五輪塚や内可土器が多出土。	×	
1989. 3	所第1遺跡・所第2遺跡	白州町教委	平住16、撫立6、上坑12など	墨書き器あり	×	
1989. 3	牧末石民部塚跡	白州町教委	縄など	武川東教末石氏の館	×	
1989. 12	坂根遺跡	白州町教委	縄(第)住3、土坑10、配石1など	縄文初期初頭集落	×	
1990. 3	教末石民部塚跡(第2次)	白州町教委	縄(中)住4、織痕など	武川東教末石氏の館、曾利式古殿塔土器	×	
1991. 3	上北山3遺跡・新野上山遺跡	白州町教委	縄(前)住1、平住10、撫立10、上坑296など	円形土坑大量発出	○	
1992. 2	風呂平原跡	白州町教委	縄灰遺跡1	羽口と氣孔が大量出土。	○	
1993. 3	上北川遺跡	白州町教委	縄(前)住22、平住3、撫立2、上坑230など	縄文前中期灰陶集落、中核式・神之木式土器	△	
1997. 3	臨木遺跡	白州町教委	平住7	縄文前期本人面土器	○	
1997. 3	白音懐小学校遺跡	白州町教委	平住1、上坑42など	合母脛碗	○	
1998. 3	西ノ久保遺跡	白州町教委	撫住1、撫住1、平住3、土坑56、地坑1など	発生住居	○	
大泉村	発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書
1983. 3	木ノ下・大津遺跡	大泉村教委	平住8、撫立2、土坑8など	墨書き「旗」他	○	
1984. 3	東姥神道跡	大泉村教委	試掘調査報告書		×	
1985. 3	東姥神卫遺跡	大泉村教委	縄(中)住1・平住8、撫立9・上坑66、縄2など	縄治工房を伴う平安集落	×	
1986. 3	豆豆田第3遺跡	大泉村教委	縄(中)住2、平住8、撫6、集石2、撫立6、上坑6など	刻天文字「木」の墨書き土器	○	
1987. 3	姥神遺跡	大泉村教委	縄(中)住12、撫(後)住8、土坑30、集石2、配石	配石をともなう縄文後期集落	×	
1988. 3	方城第1遺跡	大泉村教委	縄(中)住8、撫石2、集石3、上坑106	小規模環状聚落、極五大塚1	(△)	

大泉村	発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書
大和田遺跡・大和山第2遺跡	1989.3	大泉村教委	縄(中)住7、土坑69、窓2など	小規模環状施設、豪華場	X	
人相川第3遺跡	1990.3	大泉村教委	土塁4など	縄文中期十輪筋十分析	O	
宮地第2遺跡・宮地第3遺跡	1991.3	大泉村教委	縄(中)住6、平住3、地坑8、土坑217など	縄文中期半弧状聚落、中世整活	O	
火神金4遺跡保存委員会報告書	1991.3	大泉村教委			O	
川ヶ原遺跡第6地立第7地点	1994.3	大泉村教委	縄(前中)住9以上、土坑など	縄文土器、縄文中期大型聚落の一部	O	
明野村						
龜行七	発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書
1986.3	山吹崎遺跡	明野村教委	施(後)住2、绳理更2	加賀利日式好資料	O	
1987.3	普門寺遺跡	明野村教委	平住1、土坑7		O	
1988.3	北原遺跡	明野村教委	平住5、獨立2、土坑4		O	
1989.3	藤石遺跡・藤井寺遺跡 白山口遺跡	明野村教委	施(前中)住1、平住1		O	
千野木1・II遺跡 他の下遺跡	1990.3	明野村教委	出土1、平住4、地坑45、土坑14	地下式坑の好資料	O	
藤石川遺跡 中村道祖神遺跡	1991.3	明野村教委	平住21、獨立2、土坑81、地坑1		O	
弓削遺跡 須田遺跡	1993.3	明野村教委	縄(中)住3、縄(後)住3、配石19、土坑100以上、平住23	縄文後期の配石好資料(写真機撮影)	X	
神坂	1994.3	明野村教委	縄(中)久舍原、縄(早)住1、縄(中)環廻1、古(前)住8、平住12	木彫形尖頭器等の墓例期石器、微瓦型縄文、爪形文上器	X	
村之内II・III遺跡 高吉・中谷井遺跡	1995.3	明野村教委	縄(中)住2、占(前)土坑1、平生36	鐵冶遺構らしい住居跡、平安末～中世初期の住居	O	
庭敷添II	1996.3	明野村教委	縄(中)生3、縄(後)住3、配石19、土坑100以上	縄文後期の配石好資料	X	
下大内遺跡 星故塚遺跡第2遺跡 中原遺跡	1997.3	明野村教委	縄(早)包金肩、縄(中)住1、古(前)再葬墓1、冰生崩落の柔軟文系糸をもつた無柱古墓	O		
武川村						
発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書	
1984.3	中山塚	武川村誌編纂委員会	中世城郭試測・測量調査	中世城郭	O	
1985.3	向原遺跡(概要)	武川村教委	縄(中)住7、浮住1、平住3、土坑1	詳解不明	O	
1986.3	首間田遺跡	武川村教委	燒窯		O	
1986.3	宮園田遺跡	武川村教委	平生2、中世作2、掘立45	「真衣野牧」経営集団の墓洛か	O	
1996.3	向原遺跡・上原遺跡	武川村教委	右様溝塗1、地坑1		O	
豆美町						
発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書	
1984.3	宇津峰遺跡	牧野町教委	縄(中)住1・土坑1		X	
須玉町						
発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書	
1982	大小久保遺跡	須玉町教委				
1984.3	中尾城遺跡 樅山遺跡	須玉町教委				
1986.3	川又沟遺跡	須玉町教委				
1986.3	御金剛所前遺跡	須玉町教委				
1983.3	西川遺跡	須玉町教委				
小瀬沢町						
発行日	タイトル	発行機関	内 容	備 考	資料文書	
1979.3	逆尾豆跡	小瀬沢町教委		小豆城跡		
1979.3	小瀬沢町の縄始古代遺跡	小瀬沢町教委	遺跡部分調査報告書			
1983.3	小瀬沢町竹原山遺跡発掘調査報告書	小瀬沢町教委				
1984.3	沢の玉遺跡	小瀬沢町教委				
1985.3	舟田遺跡	小瀬沢町教委				
1986.3	官原遺跡	小瀬沢町教委				
1987.3	石上りが遺跡	小瀬沢町教委				
1988.3	小瀬沢町竹原山遺跡	小瀬沢町教委				
1989.3	小瀬沢町加佐遺跡	小瀬沢町教委				
1990.3	神田遺跡	小瀬沢町教委				

北巨摩市町村文化財担当者会

八ヶ岳考古（平成9年度年報）

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月31日 発行

発行 北巨摩市町村文化財担当者会

事務局 山梨県北巨摩郡長坂町大八川3509

長坂町教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

長野県長野市柳原2133-5

TEL (026) 244-0235

